

ノ管轄ニ於テスルヲ願フモ原告人ノ情願ニ任ス可シ

第九章 讓證文ヲ以テ訴ル事

第二十八條 九年第九拾九號
布告ニ依リ消スル

第二十九條 父母祖父母等ノ貸附タル米金等ハ其家ノ相續ヲ爲シタル者ニ非レハ其子孫ニ

シテ貸附證文ヲ所持スト雖ヒ父母祖父母等ノ讓渡シタル證書ナキ時ハ之ヲ訴ルコト得ス

但外國人ハ其本人ノ國法ニ隨ヒ正シキ權ヲ得可シ同上但書ハ

第十章 代言人ノ事九年第九拾八號布告ニ依リ代官
ノ條ヲ廢止ス以下皆同シ

第三十條

第三十一條

第三十二條

第二卷 被告人ノ答書

第一章 答書ノ定則ノ事

第三十三條 答書ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ル時原告人ノ陳述スル所條理ア

ラハ速ニ熟議シ原告人之ヲ許諾セハ解訟ヲ請フ事ヲ得ヘシ其場合ニ於テハ代書人ヲシ

テ熟議解訟ノ答書ヲ作ラシメ之ヲ裁判所ニ呈ス可シ第四十七條及四十七年第七拾五號
人ノ件ハ

消滅ス

第二 原告人ノ述ル所非理不實ニシテ辨解ス可キ確證アラハ其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ

非理不實ノ事ヲ書ス可シ

第三 答書ノ首ニ被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ答書ノ末ニ年月日ヲ記シ被告

人ト代書人トノ氏名連印アル可シ附錄第十三號(同)
見合ス可シ(上)

第四 答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ユ可シ若シ本人自署スルコト能ハサル時

ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ

第五 答書ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具ス可シ

第二章 代書人ヲ用フル事同上

第三十四條

第三章 代言人ノ事九年第九拾八號布告ニ
依リ本章ヲ廢止ス

第三十五條

第三十六條

第三十七條

第四章 原告人ノ返リ證文ヲ所有シタル答書ノ事

第三十八條 負債主米金等ヲ返濟スルニ債主原ノ證書ヲ還付セサルコト以テ二重ノ催促ヲナ

ス訴訟ハ被告人其答書ニ返リ證文返證文ハ債主ヨリ原ノ證書ヲ還附セスシ
其米金受取ノ證書ヲ交付スルヲ云フヲ寫載シ次ニ

原告人二重ノ催促ヲ爲シタル旨ヲ書ス可シ

第三十九條 原告人米金等ヲ受取リタルノミノ證書ニシテ貸付ノ米金ヲ受取リタル確證ノ文字ナク又ハ他ノ憑據トス可キ證據ナキ時ハ其米金ヲ受取タルノミノ證書ヲ以テ返リ證文ト看做ス可ヲ得ス

第五章 原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書ノ事

第四十條 借用ノ米金等ヲ返濟スヘキ期限ニ至リ負債主ヨリ債主ニ熟議シテ返濟延期ノ約ヲ結ヒ其證書ニ押印ヲ爲シタル債主ヨリ其約ヲ破リ本證文ニ據リ訴ヘタル答書ハ對談一札對談一札トハ返濟アルコトヲ記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告人ノ約ヲ破リタルコトヲ書ス可シ

第四十一條 負債主ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル事件ヨリ起リ債主本證文ニ據リ訴出タル原由アル時ハ負債主ナル者己レヨリ約ヲ破リタル返濟延期ノ證書ヲ以テ原告人破約ノ證トナスコトヲ得ス

第六章 原告人證書ヲ偽造シタル答書ノ事

第四十二條 被告人ノ證書ヲ原告人偽造シタル答書ハ其偽造ヲ證スル爲ニ管轄町ノ役場ニ届ケ置タル年月日ノ人別帳ノ寫ヲ記載シ次ニ此人別帳ノ印ト證書ノ印ト相違シタル旨ヲ書ス可シ

第七章 經界ヲ爭フ答書ノ事

第四十三條 國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ答書ノ方法ハ第十九條ヲ照ス可シ

第八章 既ニ訴ヘラレタル事件ニ未タ訴ヘサル事件ヲ接續スル事

第四十四條 負債主米金ヲ返濟ス可キ期限ヲ過キテ返濟セサルヲ訴ヘラレタルニ別ニ其債主ヨリ受取ル可キ米金アリテ其受取可キ期限モ亦タ過キ未タ訴ヘスト雖モ雙方均シク返濟ノ約期ヲ破リタルヲ以テ兩件ヲ接續シ差引ノ計算ヲ爲サントスル答書ハ負債主ヨリ其別ニ受取ル可キ米金ノ證書ヲ寫載シ次ニ差引計算ヲ爲スノ旨ヲ書ス可シ

第四十五條 負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ訴ヘラレタルニ答ルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ更ニ丙某ニ貸附ケ其期限ヲ過キ返濟セサルヲ以テ既ニ訴ヘラレタル乙某ノ事件ト未タ訴ヘサル丙某ノ事件トヲ接續シテ丙某ノ返濟ヲ爲ス可キ米金ヲ以テ乙某ニ返濟センコトヲ答ルヲ許サス何トナレハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ス丙ノ借ル所ノ者ハ甲ニシテ乙ニ非ラサルヲ以テナリ

第九章 對決前熟議解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十六條 被告人訴狀ニ對シ辨解スルコト能ハサル者ハ速ニ原告人ト熟議シ對決前ニ解訟ヲ爲シタル答書ハ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシム可シ

附錄第拾四號
見合ス可シ

第四十七條 前條ノ場合ニテ貸借滯滞ノ訴ニ起ル解訟ノ答書ハ償ノ既濟又ハ未濟ト雖モ更ニ延期ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ照ス可シ各種違約ノ訴訟ハ原被雙方ノ熟和ニ至リ又ハ更ニ改定ノ條約ヲ立テタル等モ亦前條ニ照ス可シ

第十章 對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第四十八條 原被告人對決審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返濟スルノ延期ヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期ノ旨趣ヲ書シテ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシム可シ附錄第拾五號

第十一章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十九條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償セシムヲ請ヒ原告人之ヲ承諾セハ熟議解訟ノ答書ニ其延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及原告人ノ與書連印ヲ爲サシム可シ附錄第拾六號

第十二章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第五十條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償セシムヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シテ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ與書連印ヲ爲サシム可シ附錄第拾七號

訴答文例附錄

第一號

訴狀表紙ノ式美濃紙大半紙又ハ右寸法ニ同シキ紙ヲ用ユ可シ

年月日

某訴狀

住所
身分
氏名

某訴狀トハ假令ハ貸金ノ淹滞ヲ訴ルハ貸金催促ノ訴狀ト記シ流質地ノ爭訟ハ流質地引渡催促ノ訴狀ト記スノ類

訴狀ノ式

住所	身分	氏名
原告人		
住所	身分	氏名
被告		

書式印アリ七
人連印アリ七
年第七十五號
布告ニ依リ除
キ又六年第三
百拾貳號布告
ヲ以テ宛書ヲ
改正ス毎號管
同シ

標記云々

被告人

氏

名

右原告人氏名申上候私儀云々

年月日

氏

名

印

某

裁判所長

氏名

第二號

貸金催促ノ訴狀

住所

身分

原告人

氏

名

住所

身分

被告人

氏

名

貸金催促ノ訴

一元金何圓 年月日貸附

一利金何圓 一年又ハ一月幾分ノ利

合何圓

右證文ノ寫左ノ如シ

借用證文

一金何圓

右云々

借主

氏

名

證人

氏

名

貸主

名當

右原告人氏名申上候云々

住所

身分

氏

名

印

某

年月日

氏

名

印

氏名

第三號

賣掛代金淹滞ノ訴狀

住所

身分

原告人

氏名

名

住所

身分

被告人

氏名

名

賣掛代金淹滞ノ訴

一金何圓

右賣掛帳ノ總計高ニ御坐候

但帳面ニ被告人ノ證印有之候

若賣掛帳ニ非スシテ證文ナレハ其證文全文ノ寫ヲ出ス可シ

右原告人氏名申上候云々

年月日

其

裁判所長

氏名印

氏名

第四號

買附米引渡違約ノ訴狀

住所

身分

原告人

氏名

名

住所

身分

被告人

氏名

名

買附米引渡違約ノ訴

一米何石年月日買取約定濟此
度受取ル可キ石高

代金何圓何石ニ付
何圓換

内何圓年月日手付金トシテ渡濟

殘何圓年月日限現米引替ニ渡ス可キ約定

右約定證書ノ寫左ノ如シ

證書云々

右原告人氏名申上候云々

第五號

某 年月日
裁判所長
氏名

氏名印

賣附生絲代金引渡違約ノ訴狀

賣附生絲代金引渡違約ノ訴

原告人

住所

身分

氏

名

住所

身分

氏

名

被告人

一金何圓年月日限生糸引替ニ
テ受取ル可キ殘金高
元金何圓年月日生糸何斤
賣附約定ノ金高
但何斤ニ付何圓替
内何圓年月日手附金
トシテ受取濟
右約定證ノ寫左ノ如シ

證書云々

右原告人氏名申上候云々

某 年月日
裁判所長

氏名印

氏名

第六號

妻離別ノ訴狀

妻離別ノ訴

原告人

住所

身分

氏

名

住所

身分

氏

名

被告人

夫 氏名當何歳
妻 氏名當何歳
某御役所ニ差出置候年月日ノ戸籍人別帳ノ寫左ノ如シ

某ノ訴

原告人

住所

氏

名

被告人

住所

氏

名

標記云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

氏

名

印

前書ノ儀原告私共連名ニテ御願可申上等ニ御座候處病氣云々ニテ難罷出ニ付何ノ誰エ總代相頼候然ル上ハ何之誰ヨリ申上候事柄並ニ御受仕候事柄共後日ニ至リ私共ヨリ異儀申上問敷候爲後證與印仕候

住所

氏

名

印

年月日

住所

氏

名

印

住所

氏

名

印

某

裁判所長

氏名

第九號

被告人連名中脱走又ハ病死人アルノ訴狀

住所

氏

名

名

住所

氏

名

名

被告人

住所

氏

名

名

被告人

右何ノ誰ハ年月日脱走致シ候段何町役人

何之誰ヨリ承知仕候

住所

氏

名

名

被告人

右何ノ誰ハ年月日死亡致シ候段何町役人
何之誰ヨリ承知仕候

右原告人氏名申上候云々

年月日

氏名印

某
裁判所長

氏名

第十號

第十一號

讓證文ヲ以テ催促スル訴狀九年第九拾九號
布告ニ依リ消滅

第十二號

代言人ヲ頼ム訴狀同上

第十三號

一時假リノ代言人ヲ出ス證書同上

答書表紙ノ式用紙寸法第壹號
訴狀ノ法ノ如シ

年月日

某ノ答書

住所

身分

氏名

名

答書ノ式

住所

身分

氏名

名

某ノ答

右住所身分何之誰何々之儀訴出候付今何日御呼出之御狀拜見仕御答申上候

私儀云々

證據ノ書類アラハ其寫ヲ記載スヘシ

右之通御座候

年月日

氏名印

某
裁判所長

氏名

第十四號

對決前熟議解訟ノ答書

住所

身分

氏

名

被告人

某ノ訴濟口ノ答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼出ノ御狀拜見仕原告人ニ熟談濟方仕候趣申上候

私儀云々

年月日

氏名印

前書被告人何之誰ヨリ申上候通熟談濟方仕候付此上對決ノ御裁斷不奉願候

住所

身分

氏

名

印

原告人

年月日

某

裁判所長

氏名

第十五號

對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書

住所

身分

氏

名

被告人

某ノ訴濟口日延ノ答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼出ノ御狀拜見仕原告人ニ熟談之上濟方日延約定仕候段左之通御坐候

私儀云々

年月日

氏名印

前書被告人何之誰申上候通熟談之上濟方日延約定仕候付來何年何月何日迄御

裁斷御猶豫奉願候

住所

身分

氏

名

印

原告人

年月日

某
裁判所長
氏名

第十六號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル解訟ノ答書

住所
身分
氏名

某ノ訴何之誰ヨリ日延代償ニテ濟口之答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼出之御狀拜見仕原告人へ熟談
之上親族中何之誰ヨリ日延代償約定仕候段左之由御座候
私儀云々

年月日
住所
身分
氏名
印

前書被告人何之誰申上候通私共ヨリ日延代償ノ約定仕候段相違無御座候

代書人
住所
身分
氏名
印

住所

身分

氏名
印

代償人

年月日

前書被告人何之誰申上候通私共承諾仕候付此上對決ノ御裁斷不奉願候

住所

身分

氏名
印

原告人

年月日

某

裁判所長

氏名

第十七號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル答書

住所
身分
氏名

被告人

某ノ訴何之誰代償濟口日延ノ答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼出之御狀拜見仕原告人エ熟談之上親族中何之誰ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段左之通御座候私儀云々

年月日

氏名印

前書被告人何之誰申上候通私共ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段相違無御座候

住所

身分

代償人

氏名

名

年月日

前書被告人何之誰申上候通熟談之上何之誰ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候付來何年月何日迄御裁判御猶豫奉願候

住所

身分

原告人

氏名印

年月日

某
裁判所長

氏名

第十八號

外國原告人訴狀ノ式

本國住所

身分

原告人

氏名

住所

身分

被告人

氏名

訴狀

右原告人氏名ヨリ右被告人氏名ニ對シ當御裁判所へ左之通訴訟申上候

第一云々

第二云々

第三云々

依之原告ヨリ御裁判所へ云々被成下度願上候事

但シ何等ノ處置ハ原告人ノ所願ニ候ヤ金
子ノ排カ其金高何程カ右判然ト認メ其他
公正ノ御裁判ヲ願ノ趣ヲ認ムヘシ
但シ訴訟ノ根源事實ノ大略ヲ明白ニ認ム
ヘシ若其申實混交シテ長文ナル時ハ第一
第二第三條ト之ヲ區別スヘシ

日本地名

年月日

原告人

氏名花押

第十七類 第三章 訴訟

若シ原告人ノ代言者アル時ハ左ノ如ク加
判スヘシ
代言者 氏名花押
裁判所長 氏名

〔一〕訴答文例ハ當分御國人ノ遵守ス
明治六年十月十日
 布告第三百三十九號

本年七月第貳百四拾七號布告訴答文例ハ詮議ノ次第モ有之當分御國人ノ遵守候儀ト可
 相心得此旨布告候事

〔二〕訴答文例中掲クル所ノ證書ナクモ證據端緒アルモノハ憑據アル訴答ト見認ム
明治十年
 三月二十
 六日

司法省達丁第二拾七號大審院上等裁判所地方裁判所

訴答文例ハ唯リ訴答ノ書式ヲ指示シタルモノナレハ第十四條第廿八條第廿九條ヲ除クノ外文例中云々スル所ノ證書等
 ナシト雖モ證據ノ端緒之アルニ於テハ憑據アル訴答ト見認ム可キハ勿論ノ事

右相達候條此旨可心得事

〔三〕訴狀數通爲差出方
明治十年十二月三日
 司法省達丁第八拾四號大審院諸裁判所

控訴者訴狀數通差出方ノ儀長崎上等裁判所ヨリ甲號ノ通伺出候ニ付乙號ヲ以テ大政官へ上申シ御裁令ノ上丙號ノ通及
 指令候條此段爲心得相達候事

甲號 長崎上等裁判所長判事伊丹重賢伺
十年九月
 十一日

九年司法省甲
 第五號布達
 (第二百八十
 一ノ下)ヲ以テ
 訴訟入費償却
 規則ヲ改正ス

控訴者訴狀正副兩通ヲ差出ス成規ニ有之動モスレハ被告數名ニシテ該時居住各所ニ相成遠ク數十里ヲ相隔候者間々
 有之右副書一冊ヲ以テ數人へ答辯等申付候テハ不都合不少是カ爲メ自然事務選延人民ノ難澁抄ナカラス以來右様相
 手方數員ニ其内旅行又ハ隔地へ散在スル者アル時ハ上等裁判所ニ於テ直ニ原告人へ申談時宜ニ應シ數通差出サセ
 候テ可然哉此段上申仰御指揮候也

乙號 大政官へ上申
十年十月
 二十九日

長崎上等裁判所伺控訴人訴狀ノ儀正副二通トハ訴狀進呈ノ常式ニシテ該伺ニ謂ヘル如ク相手方數名或ハ旅行或ハ遠
 地隔絶ノ場合ニ於テ原告人へ申談シ適宜ニ數通差出サシムルハ差支無之儀ト思考候得共訴答文例第六條第四項ニ明
 文アルヲ以テ一應相伺候間急遽何分ノ御裁令被下度候也

丙號 指令
十年十一
 月三十日

伺之通

〔四〕民事訴訟ニ關シ大審院裁判所へ差出ス書類紙種及行數字詰等
明治十七年三月五日
 司法省告示甲第壹號

今般第五號布告ヲ以テ訴訟用紙規則廢セラレ候ニ付テハ本年四月一日以後民事訴訟ニ關シ大審院又ハ裁判所へ差出
 ス書類ハ都テ美濃紙又ハ之レト同尺度ノ紙ヲ用ヒ一枚貳拾四行一行貳拾字詰ニ書スヘキモノトス

但訴訟入費ハ明治九年當省甲第五號布達第一條第九條ニ定メタル割合ニ依リ書類認料ハ一枚金貳拾錢認料ハ一枚
 金四圓ト相成ル義ト心得ヘシ

右告示候事

●伺指令

●追訴書式ノ儀ニ付伺指令
明治十七年二月廿九日
 兵庫縣伺

官金拜借主他債ノ爲メ身代限ノ處分ヲ受クルトキ追訴之儀ニ付明治十五年二月四日大政官第拾貳號御達有之候處右
 第一項用紙ハ通常公文用紙ニナスト雖モ其書式ハ従前ノ通訴答文例ニ據リ可認儀ト被存候得共爲念此段相伺候也

司法省指令 明治十七年三月十日(電報)
追訴書式ノ儀ニ付伺ノ趣ハ既答文例ニ據ルヲ要セス

第二百八十一

控訴上告手續

明治十年二月十九日
布告第十九號

十年司法省丁
第七十四號送
(第二百六十
九)十三項
ヲ以テ刑部
帶ノ民事裁判
ニ不服ノ者ハ
民申ノ手續ニ
據ラシム

明治八年五月第九十壹號布告大審院諸裁判所職制章程同年同第九拾三號布告控訴上告手續別冊ノ通り改正候條此旨布告候事大審院諸裁判所職制章程ハ略之
(但巡回裁判規則判事職制通則ハ刪除候事)

第一章 控訴上告手續

第一章

控訴ノ事

第一條 凡ソ始審裁判所ノ初審ニ服セスシテ再ヒ控訴裁判所ニ訴ヘ覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云フ十四年第二號布達ニ依リ地方裁判所ヲ始審裁判所トシ上等裁判所ヲ控訴裁判所トス以下皆同シ

第二條 控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及ハス

第三條 控訴ハ一タビスルコトヲ得再ビスルコトヲ得ス

第四條 始審裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタル時原告被告ノ雙方又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナル時ハ裁判言渡シヨリ第七日マテニ裁判言渡ノ翌日ヨリ數フ裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルコトヲ得ヘシ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルコトヲ要スルノ場合

ニ於テハ七日内ト雖モ控訴スルコトヲ得

第五條 始審裁判所ノ裁判言渡ヨリ二ヶ月三十日ヲ以テ過ルキハ控訴スルコトヲ許サス但シ始審裁判所ヨリ控訴裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キハ期限二ヶ月ノ外八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ増スヘシ十五年第廿一號布告ヲ以テ(期限三ヶ月)トアルヲ(二ヶ月)ト改ム

第六條 控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル始審裁判所ニ届ケ出ツヘシ但シ添翰ヲ乞フニ及ハス

第七條 前條ノ届ヲ受ケ取りタル始審裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ控訴裁判所ノ請求アル時ハ始審裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條 控訴裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ

第二章 上告總則ノ事

第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云

第十條 上告スルコトヲ得ルノ事件ハ

第一 裁判所管理ノ權限ヲ越ユ

第二 聽斷ノ定規ニ乖ク

第三 裁判法律ニ違フ

第十一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニアラス故ニ控訴スヘキノ

刑申ノ上告ハ
治罪法ニ依リ
消滅ス

事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ理セス

第十二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ越ユル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルコトヲ得

第十三條 凡ソ上告シタル者已ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フルコトヲ得ス

第三章

民事上告ノ事

第十四條 民事ノ上告スルコトヲ得ル者ハ已ニ控訴裁判所ニ控訴シ其審判ヲ經タル者ニ限ル

第十五條 上告ヲ爲ント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告狀ヲ大審院ニ捧クヘシ而シ

テ同時被告人ニ通知スルコトヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時

ハ二月ノ外八里毎ニ一日ヲ増ス此定期ヲ過レハ上告スルコトヲ許サス

上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

第一 原告人ノ住所身分氏名

第二 被告人ノ住所身分氏名

第三 被告人ノ住所身分氏名

第四 證人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名

第五 始審裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル

年月日 第六 控訴裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル

年月日

上告狀ハ正本一冊及ヒ副本五冊ヲ差出スヘシ

上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出スヘシ

第一 始審裁判所ニ於テノ訴狀並ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第二 控訴裁判所ニ於テノ訴狀並答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第三 上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱書シ編シテ一冊ト爲シ又ハ

葉數多ニ付編シテ幾冊ト爲シタル者

右ノ訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊

ヲ訟庭ニ取下ケ見坐ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ取ルコトヲ得ヘシ

若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サ、ルニ因リ上告人其寫ヲ出シ能ハサル時ハ其

旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添テ金拾圓ヲ大審院ニ預クヘシ若シ其金高ヲ預ケサルハ

上告ヲ爲スコトヲ得ス

第一 若シ上告ヲ取上ケサルハ其預リ金ヲ没入ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ

預リ金ヲ没入シ又訴訟入費規則ニ照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム

第十七條 上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ三日内ニ大
審院ニ遞送スヘシ

第十八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院已ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レハ即日原
裁判所ニ通報シテ大審院ヨリ執行ヲ止メ更ニ審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消シテ後
ノ裁判ヲ執行セシムヘシ

但内國人ヨリ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ内國人ニ對スル上告ハ原裁判
ノ執行ヲ停ムヘシ

第十九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代言人ヲシテ之ヲ捧ケシムルモ本人ノ意
ニ任ス

第二十條 大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決スル時ハ何々ノ理由ヲ以テ上告
ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第二十一條 判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ言渡シタル時ハ其後二日
内ニ被告人呼出狀ヲ仕出スヘシ此ノ呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添フヘシ

第二十二條 被告人ハ呼出シ狀ヲ受取タルヨリ三十日内ニ答辯書ヲ作り自身又ハ代言人ヨリ
之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告人ノ住所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キハ八里毎
ニ一日ヲ増スヘシ

第二十三條 大審院ニ於テ被告人ノ答辯書ヲ受取リシキハ院長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主

任ヲ命シ一件書類ヲ取纏メ遲緩ナク一件始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被告對審ノ日ヲ豫定
シ三日以前ニ原被告對審ノ呼出狀ヲ原被告雙方ニ送達スヘシ

第二十四條 原被告對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述
次ニ被告ノ陳述次ニ原被告交互ノ論辨ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルキハ
何々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ某裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨
又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘシ

第二十五條 若シ原告人ノ上告理ナシト決スルキハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡
スヘシ

第四章

刑事上告ノ事(治罪法ニ依リ消滅ニ
歸スルヲ以テ省ク)

〔一〕終決裁判執行不服説明ノ訴却下ニ付上告處分方明治十一年十月十六日
司法省達丁第三拾六號各上等裁判所

別紙終決裁判執行云々大審院ヨリ伺出候ニ付朱書之通指令ニ及候條此旨心得ノ爲メ相達候申

(別紙)

茲ニ某ノ地方裁判所ニ於テ終決裁判ノ執行ヲ爲サント其場ニ臨ミ判文ニ照ラシ原告被告ニ云々ノイヲ命シタリ然ルニ
一方ノ甲者其ノ執行ノ命令ハ判文ノ意ニ違ヘリトシ判文ヲ提供シテ判文通ノ執行ヲ求メシニ執行裁判官ハ之レニ説明
ヲ與ヘス而シテ該地方警察官ヲシテ之レカ執行ヲサシメタリ依テ甲者ハ其執行ノ判文ニ違フ旨ヲ訴狀ニ作り以テ其
裁判ヲ爲セシ原裁判所即チ某上等裁判所へ差出シ原判文ノ説明ト原判文ニ違ヒシ執行ノ救正トヲ願ヒシニ某上等裁判
所ハ其説明ヲ與ヘスン判文ニ違ヒシ執行ニ異論アラハ執行スヘキノ裁判所即チ初審廳へ申立同廳ノ指揮ヲ受ヘキ儀ト

可相心得下申渡シ右ノ訴狀却下シタリ爰ニ於テ甲者ハ右某上等裁判所ノ申渡ヲ不法トシ上告シテ曰ク初審廳ノ指揮ハ業已ニ之ヲ得タリ然ルニ其指揮某上等裁判所ノ判文ニ違ヒシ指揮ナルニヨリ止ムヲ得ス其裁判ヲ與ヘラレシ某上等裁判所ニ説明及ヒ救正ヲ乞ヒタリシニ其上等裁判所ノ申渡ノ如クシテ猶又初審廳ノ指揮ヲ要セハ是則チ一應ニシテ訴訟ヲ復審スルカ如シ夫レ裁判ハ之ヲ授ケシ裁判所ノ思考ヨリ成立セシ論說ナリ故ニ其論說ノ兩義ニ解釋ス可キ疑議ノ生スル條件アラハ之ヲ兩義中ノ一義ニ決スルハ原ト裁判セシ裁判所ノ説明ヲ得サレハ果テ原裁判所ノ思考ニ適スルヤ否ヤハ傍人之ヲ説明スル能ハサル也故ニ其裁判ヲ爲シタル所ヲ以テ本訴ノ管理者ト看認メ其執行ニ係ル疑議ハ裁判シタル裁判所カ當ニ管理ノ説明スヘキ筋ナリト思考ス然ルヲ原裁判所ハ之レカ説明ヲ與ヘスシテ一概ニ訴狀及ヒ願書ヲ却ケ強テサキニ非違ノ執行ヲ命シタル地方裁判所ノ再ヒ指揮ヲ受クヘシトノ裁判ハ是其管理ノ本分ヲ行ハサルモノニ付不當ノ申渡シト思考シ右ノ申渡ノ破毀ヲ求ムト因テ本院ニ於テ被上告者ヲ召喚シ對審セシムルニ果テ上告ノ如ク爰キニ初審廳ニ於テ指揮ヲナシ已ニ執行ヲ命セシハ原被ノ口供符合セリ如此場合ニ於テハ其上等裁判所ハ其與ヘシ判文ノ説明ヲ自カラナスヘキニ却テ再度初審ノ指揮ヲ受シムヘキ旨裁判セシハ不條理ニ付原裁判所カ却下ノ裁判ヲ破毀シ原裁判所ニ於テ爰ノ終決裁判ノ説明ヲ與フヘキモノト判決シ下シ相當ノ儀ト考慮致シ候然ルニ上告ニ付裁判ヲ破毀セシ上ハ他ノ裁判所ニ移スノ外原裁判所ニ於テ再ヒ審理セシムルハ異例ナレトモ本件ハ他ノ裁判所ニ於テハ説明ヲ與ヘ難キ事件ニ付定例ニハ無之候得共原裁判所ヘ附シ可然哉此段相伺候也

明治十一年十月二日

大審院長

判事玉乃世儀

司法卿大木喬任殿

朱書

何之通

明治十一年十月十六日

〔二〕控訴書類遞送方

明治十二年九月三十日
司法省達丁第貳拾四號各上等裁判所

控訴書類遞送ノ別紙ノ通大審院ヨリ申出之趣モ有之ニ付自今右書類ハ通運ニテ遞送可致此段相達候事
(別紙)

各上等裁判所ヨリ上告届出候節控訴書類往返遞送費取立方之儀去明治十二年七月十一日付ヲ以上申上八月五日御閉届ノ御達ニ相成リ其後各上等裁判所ニ於テモ右御閉届ノ趣ニ相運ヒ候處右控訴書類遞送方ニ付郵便送致ト通運送致ト兩便ニ於テハ通運賃ハ郵便ヨリ小數ニ付通運ノ方ニ一定致シ候ヘハ人民ノ幸不少且又本院ニ於テモ右ニ付テノ不都合ハ無之事ト存候間控訴書類往返遞送ノミニ限リ通運ヲ以差出方相成候様重テ御達相成度此段上申仕候也

明治十二年九月二十日

大審院長

判事玉乃世儀

司法卿大木喬任殿

(朱書指令)

上申ノ趣御閉届別紙ノ通各上等裁判所ヘ相達候事

〔三〕控訴書類遞送方ハ便宜取計ハシム

明治十三年七月二十日
司法省達丁第拾六號各上等裁判所函館裁判所

控訴書類遞送ノ儀司法省明治十二年九月丁第廿四號ヲ以テ各上等裁判所工達置候處右ハ自今郵便ニ附シテ便ナルモノハ郵便ニ附シ通運ニ付シテ便ナルモノハ通運ニ付シ且場所ニ因リ其他ノ方法ヲ以テ送致スルヲ得ヘキ向東京上等裁判所ヨリ大審院ニ送致スルハ小使ニ送致スルノ類ハ適宜可取計此旨更ニ相達候事

〔第二百八十下〕

訴訟入費償却規則

明治九年四月二十二日
司法省布達甲第五號

訴訟入費償却規則左之通改正候條此旨布達候事

十七年司法省
甲第壹號告示

(第二百七十九ノ四項)ヲ十
以テ書類認メ
方并譯料ノ
價ヲ示ス

第一條

訴訟並其外書類認料

一枚十六行十五字詰ニ付
十錢但シ一枚以下モ同價

右定限

第一 原告人ノ訴狀ノ正本副本

第二 被告人ノ答書ノ正本副本

第三 訴狀又ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫

第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據ノ書類ノ寫

第五 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被告雙方往復ノ文書

第二條 十二年同省甲第二號布達ニ依リ(引合人)ノ
下(差添人)ノ三字ヲ削ル第三條四條皆同シ

證人並ニ引合人手當

一日ニ付五十錢

但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ二十五錢ヲ増ス

右定限

裁判所ニ出席ヲ爲シタル日

第三條 九年同省甲第六號ヲ以テ追テ達
スル迄施行ニ不及旨ヲ布達ス

證人並引合人滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當

一日ニ付五十錢

第四條

證人並引合人旅費

滿八里ニ付十錢歸路モ同斷

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限

第一 兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ甲路ヲ經ルト雖モ乙路ヲ以テ計算ス可
シ

第二 本條ハ日本國管内ヲ通行スルモノ、爲メ設ク

第五條

原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當

一日ニ付五十錢

但シ八里外ヨリ罷出止宿スル者ハ二十五錢ヲ増ス

右定限

第二條ニ同シ

第六條 同上

原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當

一日ニ付五十錢

第七條

原告人又ハ被告人直者旅費

滿八里ニ付十錢歸路モ同斷

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付十錢

右定限

第四條ニ同シ

第八條 通辯雇料

右定限

一日ニ付三圓

第二條ニ同シ往返旅費ヲモ定額ノ通計算ス可シ

第九條

翻譯料

右定限

一枚ニ付十六行十五字詰
二圓但シ一枚以下モ同價

第一條ニ同シ

第十條

測量繪圖認料

右定限

第一 長三百間ニテ盡ル時ハ

百間ニ付一尺ノ割

西ノ内一枚ニ付十錢

第二 長六百間迄

百間ニ付五寸ノ割

同 十二錢

第三 長千二百間迄

百間ニ付三寸ノ割

同 十四錢

第四 長六千間迄

百間ニ付二寸ノ割

同 十七錢

第五 長一萬二千間迄

百間ニ付一寸ノ割

同 二十錢

第六 長一萬二千間以上

百間ニ付五分ノ割

同 廿四錢

一測量ニ及ハサル見取繪圖ハ間數ノ長短ヲ論セス大凡見積ヲ以テ簡便ニ圖引致ス可シ

但西ノ内一枚ニ付十錢

第十一條

滿一里毎二十錢一里未滿ハ五錢

使賃

但歸路モ同斷

右定限

第一 裁判所ニテ示談中雙方承諾ノ上原告被告雙方又ハ一方ノ者ヨリ遣シタル使賃

第二 裁判所ニテ示談中原告又ハ被告一方ノ者掛裁判役ノ檢印ヲ經タル使賃

第三 原告又ハ被告一方ノ者出訴中違約シテ出席セサル時掛裁判役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ

賣ムル使賃

第四 原告被告雙方ノ爲メ又ハ一方ノ爲メニ雙方又ハ一方ノ者ノ申立ニ因リ裁判所ヨリ

臨時ニ遣シタル使賃

第十二條

郵便並ニ電信料

右定限

第十一條ニ同シ

第十三條

身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又町役場ニ納ム可キ評價人監定人等ノ日雇賃金ノ諸入費

及ヒ身代限諸雜費ハ臨時計算ヲ以テ定ム

右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツヘシ

〔一〕訴訟入費規則ハ外國人ヘハ施行セズ明治十一年一月七日 司法省達丁第壹號大審院諸裁判所

明治九年四月甲第五號ヲ以テ訴訟入費償却規則及布達置候處右ハ爾後各國公使ヘ談判ノ次第有之ニ付當分外國人民ヘハ施行難相成候條此旨可相心得候事

但各國之内ニ該規則之通準行致シ來候分ハ此限ニアラス十一年丁第貳號省達ヲ以テ但書ヲ加フ

〔二〕裁判費訴訟費負擔方明治十二年三月十四日 司法省達丁第拾號諸裁判所

裁判費訴訟費ノ義ニ付別紙ノ通大審院ヘ相達候此旨爲心得相達候事

別紙

大審院ヘ達明治十二年三月十三日

裁判費訴訟費ノ義過般及答議候處右ハ取消シ別紙ノ通更ニ相達候事

定價

別紙

(括弧内朱書)

〔第一例〕

原告(甲)勝 被告(乙)負 入費ヲ拂フ

控訴ニテ 原告(甲)勝 被告(乙)負 (甲)ハ初告控訴兩件ノ入費ヲ拂フ

〔破毀〕 原告(甲)勝 被告(乙)負 (甲)ハ總テノ入費ヲ拂フ

〔第二例〕

原告(甲)勝 被告(乙)負 初告ニテ (甲)勝或ハ負トモ (乙)負或ハ勝トモ

控訴ニテ (甲)勝 (甲)ハ初告控訴ノ入費ヲ拂フ

〔破毀〕 原告(甲)勝 被告(乙)負 (乙)ハ上告入費ヲ拂フ而シテ甲ハ控訴マテノ乙ノ入費ヲ既ニ償ヒシナラハ取返スヘシ

〔第三例〕 此例ハ大審院ニ於テ破毀シタル後第二ノ上告裁判所ニ移シタル場合ナリ 此時負者ハ初告下第一控訴ト第二控訴ト都合三件ノ入費ヲ拂フヘシ上告入費ニ至テハ其ノ上告ノ負者之ヲ拂ヒ第二控訴ノ負者ハ之ヲ拂フヘキニ非ス

〔三〕訴訟入費辨償言渡方明治十二年十一月二十一日 司法省達丁第貳拾八號大審院諸裁判所

訴訟入費云々ノ義十一年丁第四拾四號ヲ以テ相達置候處左ノ通改達候條此旨可心得事

訴訟入費ハ曲者ヨリ直者ニ辨償スヘキハ當然ノ事ナルニ付裁判言渡ノ節ハ必ス曲者ノ辨償ニ歸スヘキ旨言渡スヘシ

〔四〕民事詞訟上喚出狀送達方及送達入費取立方明治十三年四月十九日 司法省達丁第拾六號大審院諸裁判所

民事詞訟上喚出狀送達ノ義ハ可成丈直ニ本人ヘ送達スヘシ不得止戸長役場(戸長役場アラサ)ヲ經由スルハ其役場迄ノ送達費用ハ其呼出ヲ請フ者ヨリ取立ツヘシ但裁判落着ノ上曲者ノ辨償ニ歸スヘキハ勿論ナリトス

右相達候事

丙第四號

民事訴訟上喚出狀送達ノ差別紙ノ通大審院諸裁判所へ相違候條爲心得此段相違候事
(別紙ハ丁第六號達ニ付略之)

各府縣

百九十八

〔五〕民事裁判上人民呼出狀脚夫賃錢及赤貧者喚問旅費繰替又ハ官費支給ヲ禁ス
明治十五年三月二十二日

内務省達七第貳拾號府縣(沖
細函箱札帳根室ノ四縣ヲ除ク)

民事裁判所ヨリ人民呼出狀脚夫ノ賃錢及赤貧者被告トナリ喚問旅費ノ儀從前郡區役所又ハ戸長役場ニ於テ繰替又ハ官費支給候向モ有之候處自今一切不相成候條此旨相違候事

● 伺指令

● 訴訟入費償却之儀ニ付伺指令 明治十七年二月廿日
高知縣伺

訴訟入費償却規則第四條但書ニ八里ヲ越シハ毎滿一里ニ付拾錢トアルハ假令ハ裁判所ヲ距ル九里ノ地ヨリ召喚ニ應シタルキハ更ニ一里ヨリ起算シ即チ金九拾錢ヲ給スルノ主旨ニ候哉將夕滿八里ノ外ヨリ一里毎ニ金拾錢ヲ乘シ九里ハ金貳拾錢十里ハ金三拾錢ト計算スル儀ニ候哉
司法省指令 明治十七年三月十二日
伺之趣後段見込ノ通

本件ニ付大審
院裁判所へハ
同年司法省丁
第貳拾壹號ヲ
以テ達ス略之

○第十八類

○第一章 刑法 大赦令

● 刑法沿革要領

明治元年正月廿三日布告ヲ以テ暗殺ヲ嚴禁シ犯ス者ハ嚴科ニ處ス○同年四月布告ヲ以テ阿片烟草賣買吸食ヲ嚴禁ス
○同年十月三十日布告ヲ以テ磔刑禁刑等ヲ改正ス○二年五月廿八日布告ヲ以テ贋造金銀貨ヲ行使スル者ハ嚴科ニ處
セシム○三年七月二日偽造寶貨律ヲ定ム○同年八月九日販賣鴉片烟律ヲ定ム○同年十一月十八日准流法ヲ設ケ今後
流罪ヲ犯ス者處分方ヲ定ム○同年十二月二十日新律綱領六卷ヲ頒布ス○六年六月第二百六號布告ヲ以テ改定律例ヲ
頒布ス○十三年七月第三十六號布告ヲ以テ刑法ヲ改定ス

〔第二百八十一〕 刑法 明治十三年七月十七日
布告第三十六號

刑法別冊ノ通改定候條此旨布告候事

但實際施行ノ期日ハ追テ布告スヘキ事 十四年第三十六號ヲ以テ十五年
一月一日ヨリ實施ノ旨ヲ布告ス

刑法目錄

第一編 總則

第一章 法例

第二章 刑例

第一節 刑名

第二節 主刑處分

第十八類 第一章 刑法 大赦令

百九十九

- 第三節 附加刑處分
- 第四節 徵償處分
- 第五節 刑期計算
- 第六節 假出獄
- 第七節 期滿免除
- 第八節 復權
- 第三章 加減例
- 第四章 不論罪及ヒ減輕
- 第一節 不論罪及ヒ宥恕減輕
- 第二節 自首減輕
- 第三節 酌量減輕
- 第五章 再犯加重
- 第六章 加減順序
- 第七章 數罪俱發
- 第八章 數人共犯
- 第一節 正犯
- 第二節 從犯

- 第九章 未遂犯罪
- 第十章 親屬例
- 第二編 公益ニ關スル重罪輕罪
- 第一章 皇室ニ對スル罪
- 第二章 國事ニ關スル罪
- 第一節 内亂ニ關スル罪
- 第二節 外患ニ關スル罪
- 第三章 靜謐ヲ害スル罪
- 第一節 兇徒聚衆ノ罪
- 第二節 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪
- 第三節 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪
- 第四節 附加刑ノ執行ヲ遁ル、罪
- 第五節 私ニ軍用ノ銃礮彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪
- 第六節 往來通信ヲ妨害スル罪
- 第七節 人ノ住所ヲ侵スル罪
- 第八節 官ノ封印ヲ破棄スル罪
- 第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪

- 第四章 信用ヲ害スル罪
 - 第一節 貨幣ヲ偽造スル罪
 - 第二節 官印ヲ偽造スル罪
 - 第三節 官ノ文書ヲ偽造スル罪
 - 第四節 私印私書ヲ偽造スル罪
 - 第五節 免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ偽造スル罪
 - 第六節 偽證ノ罪
 - 第七節 度量衡ヲ偽造スル罪
 - 第八節 身分ヲ詐稱スル罪
 - 第九節 公選ノ投票ヲ偽造スル罪
- 第五章 健康ヲ害スル罪
 - 第一節 阿片烟ニ關スル罪
 - 第二節 飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪
 - 第三節 傳染病豫防規則ニ關スル罪
 - 第四節 危害品及ヒ健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪
 - 第五節 健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪
 - 第六節 私ニ醫業ヲ爲スル罪

- 第六章 風俗ヲ害スル罪
- 第七章 死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪
- 第八章 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪
- 第九章 官吏瀆職ノ罪
 - 第一節 官吏公益ヲ害スル罪
 - 第二節 官吏人民ニ對スル罪
 - 第三節 官吏財産ニ對スル罪
- 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪
 - 第一章 身體ニ對スル罪
 - 第一節 謀殺故殺ノ罪
 - 第二節 毆打創傷ノ罪
 - 第三節 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪
 - 第四節 過失殺傷ノ罪
 - 第五節 自殺ニ關スル罪
 - 第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪
 - 第七節 脅迫ノ罪
 - 第八節 墮胎ノ罪

第九節 幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪
 第十節 幼者ヲ略取誘拐スル罪
 第十一節 猥褻姦淫重婚ノ罪
 第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪
 第十三節 祖父母父母ニ對スル罪
 第二章 財産ニ對スル罪
 第一節 竊盜ノ罪
 第二節 強盜ノ罪
 第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪
 第四節 家資分散ニ關スル罪
 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪
 第六節 贓物ニ關スル罪
 第七節 放火失火ノ罪
 第八節 決水ノ罪
 第九節 船舶ヲ覆没スル罪
 第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪
 第四編 違警罪

十四年第八十
 一號布告(本
 款二項)參看

刑法

第一編 總則

第一章 法例

第一條 凡法律ニ於テ罰ス可キ罪別テ三種ト爲ス
 一 重罪
 二 輕罪
 三 違警罪

第二條 法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲ト雖モ之ヲ罰スルコトヲ得ス
 第三條 法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスコトヲ得ス

若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス

第四條 此刑法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ論ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第五條 此刑法ニ正條ナクシテ他ノ法律規則ニ刑名アル者ハ各其法律規則ニ從フ

若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサル者ハ此刑法ノ總則ニ從フ

第二章 刑例

第一節 刑名

第六條 刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス
 主刑ハ之ヲ宣告ス

第十八類 第一章 刑法 大赦令

附加刑ハ法律ニ於テ其宣告スル者ト宣告セサル者トヲ定ム

第七條 左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス

一死刑

二無期徒刑

三有期徒刑

四無期徒刑

五有期徒刑

六重懲役

七輕懲役

八重禁獄

九輕禁獄

第八條 左ニ記載シタル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス

一重禁錮

二輕禁錮

三罰金

第九條 左ニ記載シタル者ヲ以テ違警罪ノ主刑ト爲ス

一拘留

二科料

第十條 左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト爲ス

一剝奪公權

二停止公權

三禁治產

四監視

五罰金

六沒收

第十一條 刑ヲ執行シ及ヒ犯人ヲ檢束スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第二節 主刑處分

第十二條 死刑ハ絞首ス但規則ニ定ムル所ノ官吏臨檢シ獄内ニ於テ之ヲ行フ

第十三條 死刑ハ司法卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フコトヲ得ス

第十四條 大祀令節國祭ノ日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス

第十五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ナル時ハ其執行ヲ停メ分娩後一百日ヲ經ルニ非サレハ刑ヲ行ハス

第十六條 死刑ノ遺骸ハ親屬故舊請フ者アレハ之ヲ下付ス但式ヲ用ヒテ葬ルコトヲ許サス

第十七條 徒刑ハ無期有期ヲ分タヌ島地ニ發遣シ定役ニ服ス

十四年第六十二號布告參看
〔次項〕

有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第十八條 徒刑ノ婦女ハ島地ニ發遣セス内地ノ懲役場ニ於テ定役ニ服ス

第十九條 徒刑ノ四六十歳ニ滿ル者ハ通常ノ定役ヲ免シ其體力相當ノ定役ニ服ス

第二十條 流刑ハ無期有期ヲ分タス島地ノ獄ニ幽閉シ定役ニ服セス

有期流刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第二十一條 無期流刑ノ四五年ヲ經過スレハ行政ノ處分ヲ以テ幽閉ヲ免シ島地ニ於テ地ヲ限リ居住セシムルヲ得

有期流刑ノ四三年ヲ經過スル者亦同シ

第二十二條 懲役ハ内地ノ懲役場ニ入レ定役ニ服ス但六十歳ニ滿ル者ハ第十九條ノ例ニ從フ

重懲役ハ九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十三條 禁獄ハ内地ノ獄ニ入レ定役ニ服セス

重禁獄ハ九年以上十一年以下輕禁獄ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十四條 禁錮ハ禁錮場ニ留置シ重禁錮ハ定役ニ服シ輕禁錮ハ定役ニ服セス

禁錮ハ重輕ヲ分タス十一日以上五年以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十五條 定役ニ服スル四人ノ工錢ハ監獄ノ規則ニ從ヒ其幾分ヲ獄舎ノ費用ニ供シ其幾分ヲ四人ニ給與ス但現役百日以内ハ給與ノ限ニ在ラス

十七年内務司
法兩省達し第
三十四號(第
九十五)九
項)參看

第二十六條 罰金ハ二圓以上ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第二十七條 罰金ハ裁判確定ノ日ヨリ一月内ニ納完セシム若シ限内納完セサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シ之ヲ輕禁錮ニ換フ其一回ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

罰金ヲ禁錮ニ換フル者ハ更ニ裁判ヲ用ヒス檢察官ノ求ニ因リ裁判官之ヲ命ス但禁錮ノ期限ハ二年ニ過クルヲ得ス

若シ禁錮限内罰金ヲ納メタル時ハ其經過シタル日數ヲ扣除シテ禁錮ヲ免ス親屬其他ノ者代テ罰金ヲ納メタル時亦同シ

第二十八條 拘留ハ拘留所ニ留置シ定役ニ服セス其刑期ハ一日以上十日以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十九條 科料ハ五錢以上一圓九十五錢以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第三十條 科料ハ裁判確定ノ日ヨリ十日内ニ納完セシム若シ限内納完セサル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ之ヲ拘留ニ換フ

第三節 附加刑處分

第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス

一 國民ノ特權

二 官吏ト爲ルノ權

三 勳章年金位記賞號恩給ヲ有スルノ權

四外國ノ勳章ヲ佩用スルノ權

五兵籍ニ入ルノ權

六裁判所ニ於テ證人ト爲ルノ權但單ニ事實ヲ陳述スルハ此限ニ在ラス

七後見人ト爲ルノ權但親屬ノ許可ヲ得テ子孫ノ爲メニスルハ此限ニ在ラス

八分散者ノ管財人ト爲リ又ハ會社及ヒ共有財産ヲ管理スルノ權

九學校長及ヒ教師學監ト爲ルノ權

第三十二條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス終身公權ヲ剝奪ス

第三十三條 禁錮ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス現任ノ官職ヲ失ヒ及ヒ其刑期間公

權ヲ行フコトヲ停止ス

第三十四條 輕罪ノ刑ニ於テ監視ニ付シタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス監視ノ期間間公權ヲ行

フコトヲ停止ス

主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタル者亦同シ

第三十五條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其主刑ノ終ルマテ自ラ財産ヲ

治ムルコトヲ禁ス

第三十六條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル時ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免ヌル

コトヲ得

第三十七條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス各本刑ノ短期三分ノ一ニ等シ

キ時間監視ニ付ス

第三十八條 輕罪ノ刑ニ附加スル監視ハ之ヲ宣告ス但各本條ニ記載スルノ外監視ニ付スル

コトヲ得ス

第三十九條 死刑及ヒ無期刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス五年間監視ニ付ス

第四十條 監視ノ期限ハ主刑ノ終リタル日ヨリ起算ス主刑ノ期滿免除ヲ得タル時ハ其捕ニ

就キタル日ヨリ起算ス

若シ主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタル時ハ其裁判確定ノ日ヨリ起算ス

第四十一條 監視ニ付セラレタル者其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ假ニ監視ヲ免スルコトヲ

得

第四十二條 附加ノ罰金ハ之ヲ宣告ス若シ一月内ニ納完セサル時ハ第二十七條ノ例ニ照シ

輕禁錮ニ換ヘ主刑滿限ノ後之ヲ執行ス

第四十三條 左ニ記載シタル物件ハ宣告シテ官ニ沒收ス但法律規則ニ於テ別ニ沒收ノ例ヲ

定メタル者ハ各其法律規則ニ從フ

一法律ニ於テ禁制シタル物件

二犯罪ノ用ニ供シタル物件

三犯罪ニ因テ得タル物件

第四十四條 法律ニ於テ禁制シタル物件ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス犯罪ノ用ニ供シ

及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ犯人ノ所有ニ係リ又ハ所有主ナキ時ノ外之ヲ沒收スルヲ得ス

第四節 徵償處分

第四十五條 刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人ニ科ス但其費用ノ額ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四十六條 犯人刑ニ處セラレ又ハ放免セラレ、ト雖モ被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ免カル、ト得ス

第四十七條 數人共犯ニ係ル裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ共犯人ヲシテ之ヲ連帶セシム

第四十八條 裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審判スルヲ得若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直チニ之ヲ被害者ニ還付ス

第五節 刑期計算

第四十九條 刑期ヲ計算スルニ一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ二十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

受刑ノ初日ハ時間ヲ論セス一日ニ算入シ放免ノ日ハ刑期ニ算入セス

第五十條 刑ハ裁判確定シタル後ニ非サレハ之ヲ執行スルヲ得ス

第五十一條 刑期ハ刑名宣告ノ日ヨリ起算ス若シ上訴ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ從フ

一 犯人自ラ上訴シテ其上訴正當ナル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算ス若シ其上訴不當ナル時ハ後判宣告ノ日ヨリ起算ス

二 檢察官ノ上訴ニ係ル者ハ其上訴正當ナルト否トヲ分タス前判宣告ノ日ヨリ起算ス

三 上訴中保釋ヲ得又ハ責付セラレタル者ハ其日數ヲ刑期ニ算入スルヲ得ス

第五十二條 刑期限内逃走シ再ヒ捕ニ就キタル者ハ其逃走ノ日數ヲ除キ前後受刑ノ日ヲ計算ス

第六節 假出獄

第五十三條 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ遵守シ悔改ノ狀アル時ハ其刑期四分ノ

三ヲ經過スルノ後行政ノ處分ヲ以テ假ニ出獄ヲ許スヲ得
無期徒刑ノ四ハ十五年ヲ經過スルノ後亦同シ

流刑ノ四ハ第二十一條ニ照シ幽閉ヲ免スルノ外假出獄ノ例ヲ用ヒス

第五十四條 徒刑ノ四ハ假出獄ヲ許サル、ト雖モ仍ホ島地ニ居住セシム

第五十五條 假出獄ヲ許サレタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スルヲ得但本刑期限内特別ニ定メタル監視ニ付ス

第五十六條 假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入スルヲ得ス

第五十七條 刑期限内更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許サス

第七節 期滿免除

第五十八條 刑ノ執行ヲ通レタル者法律ニ定メタル期限ヲ經過スルニ因テ期滿免除ヲ得

第五十九條 主刑ハ左ノ年限ニ從テ期滿免除ヲ得

一死刑ハ三十年

二無期徒刑ハ二十五年

三有期徒刑ハ二十年

四重懲役重禁獄ハ十五年

五輕懲役輕禁獄ハ十年

六禁錮罰金ハ七年

七拘留科料ハ一年

第六十條 剝奪公權停止公權及ヒ監視ハ期滿免除ヲ得ス
附加ノ罰金ハ主刑ト共ニ期滿免除ヲ得

第六十一條 期滿免除ハ刑ノ執行ヲ通レタル日ヨリ起算ス若シ捕ニ就キ再ヒ逃走シタル時

ハ其逃走ノ日ヨリ起算シ關席裁判ニ係ル時ハ其宣告ノ日ヨリ起算ス
第六十二條 刑ノ執行ヲ通レタル者ニ對シ逮捕ヲ命シタル時ハ最終ノ令狀ヲ出シタル日ヨリ期滿免除ヲ起算ス

第八節 復權

第六十三條 公權ヲ剝奪セラレタル者ハ主刑ノ終リタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後其情狀ニ因リ將來ノ公權ヲ復スルコトヲ得

主刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後亦同シ

第六十四條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ直チニ復權ヲ得特赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ赦狀中記載スルニ非サレハ復權ヲ得ス

赦ニ因テ復權ヲ得タル者ハ自ラ監視ヲ免シタル者トス

第六十五條 復權ハ勅裁ニ非サレハ之ヲ得可カラズ

第三章 加減例

第六十六條 法律ニ於テ刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ後ノ數條ニ記載シタル例ニ照シテ加減ス但加ヘテ死刑ニ入ルコトヲ得ス

第六十七條 重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑

二無期徒刑

三有期徒刑

四重懲役

五輕懲役

第六十八條 國事ニ關スル重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑

二無期流刑

三有期流刑

四重禁獄

五輕禁獄

第六十九條 輕懲役ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

第七十條 禁錮罰金ニ該ル者減輕ス可キ時ハ各本條ニ記載シタル刑期金額ノ四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等ト爲シ其加重ス可キ時ハ亦四分ノ一ヲ加フルヲ以テ一等ト爲ス

第七十一條 禁錮ヲ減盡シタル時ハ拘留ニ處シ罰金ヲ減盡シタル時ハ科料ニ處ス禁錮罰金ヲ減シテ其短期十日以下算數一圓九十五錢以下ニ及フ時ハ亦拘留科料ニ處スルヲ得

第七十二條 拘留科料ニ該ル者加減ス可キ時ハ禁錮罰金ノ例ニ照シ其四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス

違警罪ノ刑ハ加ヘテ輕罪ニ入ルヲ得ス但拘留ハ加ヘテ十二日ニ至ルヲ得減シテ一日

以下ニ降スヲ得ス科料ハ加ヘテ二圓四十錢ニ至ルヲ得減シテ五錢以下ニ降スヲ得ス

第七十三條 禁錮拘留ヲ加減スルニ因テ其期限ニ零數ヲ生シ一日ニ滿サル時ハ之ヲ除棄ス

第七十四條 附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減シ其金額ノ四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス若シ減盡シタル時ハ止マ主刑ヲ科ス

第四章 不論罪及ヒ減輕

第一節 不論罪及ヒ宥恕減輕

第七十五條 抗拒ス可カラサル強制ニ遇ヒ其意ニ非サルノ所爲ハ其罪ヲ論セス

天災又ハ意外ノ變ニ因リ避ク可カラサル危難ニ遇ヒ自己若クハ親屬ノ身體ヲ防衛スルニ出タル所爲亦同シ

第七十六條 本屬長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テ爲シタル者ハ其罪ヲ論セス

第七十七條 罪ヲ犯ス意ナキノ所爲ハ其罪ヲ論セス但法律規則ニ於テ別ニ罪ヲ定メタル者ハ此限ニ在ラス

罪ト爲ル可キ事實ヲ知ラスシテ犯シタル者ハ其罪ヲ論セス

罪本重カル可クシテ犯ス時知ラサル者ハ其重キニ從テ論スルヲ得ス

法律規則ヲ知ラサルヲ以テ犯スノ意ナシト爲スヲ得ス

第七十八條 罪ヲ犯ス時知覺精神ノ喪失ニ因テ是非ヲ辨別セサル者ハ其罪ヲ論セス

第七十九條 罪ヲ犯ス時十二歳ニ滿サル者ハ其罪ヲ論セス但滿八歳以上ノ者ハ情狀ニ因リ

滿十六歲ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヲ得

第八十條 罪ヲ犯ス時滿十二歲以上十六歲ニ滿サル者ハ其所爲是非ヲ辨別シタルト否トヲ
審案シ辨別ナクシテ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ滿二十歲ニ過キサル時間之
ヲ懲治場ニ留置スルヲ得

若シ辨別アリテ犯シタル時ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ二等ヲ減ス

第八十一條 罪ヲ犯ス時滿十六歲以上二十歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減
ス

第八十二條 瘖啞者罪ヲ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ五年ニ過キサル時間之ヲ
懲治場ニ留置スルヲ得

第八十三條 違警罪ハ滿十六歲以上二十歲ニ滿サル者ト雖モ其罪ヲ宥恕スルヲ得ス

滿十二歲以上十六歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス十二歲ニ滿サル者及

ヒ瘖啞者ハ其罪ヲ論セス

第八十四條 此節ニ記載スルノ外特別ノ不論罪宥恕減輕ハ各本條ニ於テ之ヲ記載ス

第二節 自首減輕

第八十五條 罪ヲ犯シ事未タ發覺セザル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ニ一等ヲ減ス但
謀殺故殺ニ係ル者ハ自首減輕ノ限ニ在ラス

第八十六條 財産ニ對スル罪ヲ犯シタル者自首シテ其贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタル時ハ

自首減輕ノ外仍ホ本刑ニ二等ヲ減ス其全部ヲ還償セスト雖モ半數以上ヲ還償シタル時ハ
一等ヲ減ス

第八十七條 財産ニ對スル罪ヲ犯シ被害者ニ首服シタル者ハ官ニ自首スルト同ク前二條ノ
例ニ照シテ處斷ス

第八十八條 此節ニ記載スルノ外本條別ニ自首ノ例ヲ掲ケタル者ハ各其本條ニ從フ

第三節 酌量減輕

第八十九條 重罪輕罪違警罪ヲ分タス所犯情狀原諒ス可キ者ハ酌量シテ本刑ヲ減輕スルヲ
得

法律ニ於テ本刑ヲ加重シ又ハ減輕ス可キ者ト雖モ其酌量ス可キ時ハ仍ホ之ヲ減輕スルヲ
得

第九十條 酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第五章 再犯加重

第九十一條 先ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯重罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十二條 先ニ重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯輕罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十三條 先ニ違警罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯違警罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ但
一年内再ヒ其違警罪裁判所ノ管轄地内ニ於テ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヲ
得ス

第九十四條 再犯加重ハ初犯ノ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ論スルコトヲ得ス

第九十五條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯スニ因リ刑ヲ宣告シタル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服セサル者ヲ後ニス若シ初犯再犯共ニ定役ニ服スル刑ニ該ル時又ハ共ニ定役ニ服セサル刑ニ該ル時ハ先ツ其重キ者ヲ執行ス

罰金科料ニ該ル者ハ順序ニ拘ハラス各之ヲ徴收ス

第九十六條 陸海軍裁判所ニ於テ判決ヲ經タル者再ヒ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ初犯ノ罪常律ニ從ヒ處斷シタル者ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得ス

第九十七條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ再ヒ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得ス

第九十八條 三犯以上ノ者ト雖モ其加重ノ法ハ再犯ノ例ニ同シ

第六章 加減順序

第九十九條 犯罪ノ情狀ニ因リ總則ニ照シ同時ニ本刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ左ノ順序ニ從テ其刑名ヲ定ム但從犯及ヒ未遂犯罪ノ減等其他各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ハ其加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

- 一再犯加重
- 二宥恕減輕
- 三自首減輕
- 四酌量減輕

第七章 數罪俱發

第一百條 重罪輕罪ヲ犯シ未タ判決ヲ經スニ罪以上俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從テ處斷ス

重罪ノ刑ハ刑期ノ長キ者ヲ以テ重ト爲シ刑期ノ等シキ者ハ定役アル者ヲ以テ重ト爲ス輕罪ノ刑ハ其所犯情狀最重キ者ニ從テ處斷ス

第一百一條 違警罪二罪以上俱ニ發シタル時ハ各其刑ヲ科ス若シ重罪又ハ輕罪ト俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從フ

第一百二條 一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ其輕ク若クハ等シキ者ハ之ヲ論セス其重キ者ハ更ニ之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ス但前發ノ刑罰金科料ニ該リ已ニ納完シタル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ折算シテ後發ノ刑期ニ通算ス

若シ前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタル者ハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ前發ノ刑ヲ通算セス

第一百三條 數罪俱ニ發シ一ノ重キニ從フ時ト雖モ其沒收及ヒ徵償ノ處分ハ各本法ニ從フ

第八章 數人共犯

第一節 正犯

第一百四條 二人以上現ニ罪ヲ犯シタル者ハ皆正犯ト爲シ各自ニ其刑ヲ科ス

第一百五條 人ヲ教唆シテ重罪輕罪ヲ犯サシメタル者ハ亦正犯ト爲ス

第六條 正犯ノ身分ニ因リ別ニ刑ヲ加重ス可キ時ハ他ノ正犯從犯及ヒ教唆者ニ及ホスヲ得ス

第七條 犯人ノ多數ニ因リ刑ヲ加重ス可キ時ハ教唆者ヲ算入シテ多數ト爲スヲ得ス
第八條 事ヲ指定シテ犯罪ヲ教唆スルニ當リ犯人教唆ニ乘シ其指定シタル以外ノ罪ヲ犯シ又ハ其現ニ行フ所ノ方法教唆者ノ指示シタル所ト殊ナル時ハ左ノ例ニ照シテ教唆者ヲ處斷ス

一所犯教唆シタル罪ヨリ重キ時ハ止タ其指定シタル罪ニ從テ刑ヲ科ス
二所犯教唆シタル罪ヨリ輕キ時ハ現ニ行フ所ノ罪ニ從テ刑ヲ科ス

第二節 從犯

第九條 重罪輕罪ヲ犯スヲ知テ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示シ其他豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ハ從犯ト爲シ正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス但正犯現ニ行フ所ノ罪從犯ノ知ル所ヨリ重キ時ハ止タ其知ル所ノ罪ニ照シ一等ヲ減ス

第十條 身分ニ因リ刑ヲ加重ス可キ者從犯ト爲ル時ハ其重キニ從テ一等ヲ減ス
正犯ノ身分ニ因リ刑ヲ減免ス可キ時ト雖モ從犯ノ刑ハ其輕キニ從テ減免スルヲ得ス

第九章 未遂犯罪

第十一條 罪ヲ犯サンコトヲ謀リ又ハ其豫備ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル者ハ本條別ニ刑名ヲ記載スルニ非サレハ其刑ヲ科セス

第十二條 罪ヲ犯サントシテ已ニ其事ヲ行フト雖モ犯人意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未タ遂ケサル時ハ已ニ遂ケタル者ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第十三條 重罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス
輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ本條別ニ記載スルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヲ得ス

違警罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ其罪ヲ論セス

第十章 親屬例

第十四條 此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

- 一 祖父母父母夫妻
- 二 子孫及ヒ其配偶者
- 三 兄弟姊妹及ヒ其配偶者
- 四 兄弟姊妹ノ子及ヒ其配偶者
- 五 父母ノ兄弟姊妹及ヒ其配偶者
- 六 父母ノ兄弟姊妹ノ子
- 七 配偶者ノ祖父母父母
- 八 配偶者ノ兄弟姊妹及ヒ其配偶者
- 九 配偶者ノ兄弟姊妹ノ子

十配偶者ノ父母ノ兄弟姉妹

第百十五條 祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同シ父母ト稱スルハ繼父母嫡母同シ子孫ト稱スルハ庶子曾玄孫外孫同シ兄弟姉妹ト稱スルハ異父異母ノ兄弟姉妹同シ
養子其養家ニ於ル親屬ノ例ハ實子ニ同シ

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪

第一章 皇室ニ對スル罪

第百十六條 天皇三后皇太子ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ處ス

第百十七條 天皇三后皇太子ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ三月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

皇陵ニ對シ不敬ノ所爲アル者亦同シ

第百十八條 皇族ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處ス其危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第百十九條 皇族ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百二十條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二章 國事ニ關スル罪

十五年第三十
六號布告(第
百七十七)參
看

同上

第一節 内亂ニ關スル罪

第百二十一條 政府ヲ顛覆シ又ハ邦土ヲ僭竊シ其他朝憲ヲ紊亂スルヲ目的ト爲シ内亂ヲ起シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 首魁及ヒ教唆者ハ死刑ニ處ス

二 群衆ノ指揮ヲ爲シ其他樞要ノ職務ヲ爲シタル者ハ無期流刑ニ處シ其情輕キ者ハ有期流刑ニ處ス

三 兵器金穀ヲ資給シ又ハ諸般ノ職務ヲ爲シタル者ハ重禁獄ニ處シ其情輕キ者ハ輕禁獄ニ處ス

四 教唆ニ乘シテ附和隨行シ又ハ指揮ヲ受ケテ雜役ニ供シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百二十二條 内亂ヲ起スノ目的ヲ以テ兵器彈藥船舶金穀其他軍備ノ物品ヲ劫掠シタル者ハ已ニ内亂ヲ起シタル者ノ刑ニ同シ

第百二十三條 政府ヲ變亂スルノ目的ヲ以テ人ヲ謀殺シタル者ハ兵ヲ擧ルニ至ラスト雖モ内亂ト同ク論シ其教唆者及ヒ下手者ヲ死刑ニ處ス

第百二十四條 前三條ノ罪ハ未遂犯罪ノ時ニ於テ乃チ本刑ヲ科ス

第百二十五條 兵隊ヲ招募シ又ハ兵器金穀ヲ準備シ其他内亂ノ豫備ヲ爲シタル者ハ第百二十一條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第十八類 第一章 刑法 大赦令

内亂ノ陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ各二等ヲ減ス

第二百二十六條 内亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

第二百二十七條 内亂ノ情ヲ知テ犯人ニ集會所ヲ給與シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二百二十八條 内亂ニ乘シテ人ノ身體財産ニ對シ内亂ノ目的ニ關セサル重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ通常ノ刑ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二節 外患ニ關スル罪

第二百二十九條 外國ニ與シテ本國ニ抗敵シ又ハ外國ト交戰中同盟國ニ抗敵シ其他本國ニ背叛シテ敵兵ニ附屬シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百三十條 交戰中敵兵ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ本國及ヒ同盟國ノ都府城塞又ハ兵器彈藥船艦其他軍事ニ關スル土地家屋物件ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百三十一條 本國及ヒ同盟國ノ軍情機密ヲ敵國ニ漏泄シ若クハ兵隊屯集ノ要地又ハ道路ノ險夷ヲ敵國ニ通知シタル者ハ無期流刑ニ處ス

敵國ノ間諜ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ之ヲ藏匿シタル者亦同シ

第二百三十二條 陸海軍ヨリ委任ヲ受ケ物品ヲ供給シ及ヒ工作ヲ爲ス者交戰ノ際敵國ニ通謀シ又ハ其賂遺ヲ收受シテ命令ニ違背シ軍備ノ缺乏ヲ致シタル時ハ有期流刑ニ處ス

第二百三十三條 外國ニ對シ私ニ戰端ヲ開キタル者ハ有期流刑ニ處ス其豫備ニ止ル者ハ一等又ハ二等ヲ減ス

第二百三十四條 外國交戰ノ際本國ニ於テ局外中立ヲ布告シタル時其布告ニ違背シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十五條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三章 靜謐ヲ害スル罪

第一節 兇徒聚衆ノ罪

第二百三十六條 兇徒多衆ヲ嘯聚シテ暴動ヲ謀リ官吏ノ說諭ヲ受クルト雖モ仍ホ解散セサル者首魁及ヒ教唆者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス附和隨行シタル者ハ二圓以上五圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十七條 兇徒多衆ヲ嘯聚シテ官廳ニ喧鬧シ官吏ニ強逼シ又ハ村市ヲ騷擾シ其他暴動ヲ爲シタル者首魁及ヒ教唆者ハ重懲役ニ處ス其嘯聚ニ應シ煽動シテ勢ヲ助ケタル者ハ輕懲役ニ處シ其情輕キ者ハ一等ヲ減ス附和隨行シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十八條 暴動ノ際人ヲ殺死シ若クハ家屋船舶倉庫等ヲ燒燬シタル時ハ現ニ手ヲ下シ及ヒ火ヲ放ツ者ヲ死刑ニ處ス

同上
衆議院議員選舉法(第五十條)
三ノ二項(第九條)
九十四條(第九條)
十六條(第九條)
議院選舉規則(第五十八條)
ノ四項(第六十四條)
十三條(第六十四條)
四條(第六十四條)

首魁及ヒ教唆者情ヲ知テ制セサル者亦同シ

第二節 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

第二百二十九條 官吏其職務ヲ以テ法律規則ヲ執行シ又ハ行政司法官署ノ命令ヲ執行スルニ當リ暴行脅迫ヲ以テ其官吏ニ抗拒シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

暴行脅迫ヲ以テ其官吏ノ爲ス可カラサル事件ヲ行ハシメタル者亦同シ

第二百四十條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ官吏ヲ毆傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百四十一條 官吏ノ職務ニ對シ其目前ニ於テ形容若クハ言語ヲ以テ侮辱シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其目前ニ非スト雖モ刊行ノ文書圖書又ハ公然ノ演說ヲ以テ侮辱シタル者亦同シ

第三節 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第二百四十二條 已決ノ囚徒逃走シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ獄舎獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シテ逃走シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百四十三條 已決ノ囚徒逃走ノ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論セス其刑期限内再ヒ逃走シタル者ハ再犯ヲ以テ論ス

十五年第五十八號布告(第七)參看

第二百四十四條 未決ノ囚徒入監中逃走シタル者ハ第二百四十二條ノ例ニ同シ但原犯ノ罪ヲ判決スル時ニ於テ數罪俱發ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百四十五條 囚徒三人以上通謀シテ逃走シタル時ハ第二百四十二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百四十六條 囚徒ヲ逃走セシムル爲メ兇器其他ノ器具ヲ給與シ又ハ逃走ノ方法ヲ指示シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス囚徒ヲ逃走ヲ致シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百四十七條 囚徒ヲ劫奪シ又ハ暴行脅迫ヲ以テ囚徒ノ逃走ヲ助ケタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ輕懲役ニ處ス

第二百四十八條 囚徒ヲ看守シ又ハ護送スル者囚徒ヲ逃走セシメタル時ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百四十九條 前數條ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百五十條 看守又ハ護送者其懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス
第二百五十一條 犯罪人又ハ逃走ノ囚徒及ヒ監視ニ付セラレタル者ナルコトヲ知テ之ヲ藏匿シ

若クハ隱避セシメタル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第百五十二條 他人ノ罪ヲ免カレシメンコトヲ圖リ其罪證ト爲ル可キ物件ヲ隱蔽シタル者ハ十一日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十三條 前二條ノ罪ヲ犯シタル者犯人ノ親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第四節 附加刑ノ執行ヲ遁ル、罪

第百五十四條 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者私ニ其權ヲ行ヒタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十五條 監視ニ付セラレタル者其規則ニ違背シタル時ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第百五十六條 前二條ノ罪ハ其刑期限内再ヒ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルコトヲ得ス

第五節 私ニ軍用ノ銃砲彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪

第百五十七條 官命ヲ受ケス又ハ官許ヲ得スシテ陸海軍ノ用ニ供スル銃砲彈藥其他破裂質ノ物品ヲ製造シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其之ヲ輸入シタル者亦同シ

五年第廿八號
布告(第七十
八)同第百
八十二號布
(同)項十七
年第三十一
號

布告(第七十
九)十七年第
三十二號布
(第八十一)參
看

前項ノ物品ヲ私ニ販賣シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十八條 前條ノ罪ヲ犯スト雖モ職工又ハ雇人ニシテ止タ正犯ノ使令ニ供シタル者ハ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百五十九條 前二條ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第百六十條 第百五十七條ニ記載シタル物品ヲ私ニ所有シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百六十一條 第百五十七條ニ記載シタル物品ノ製造ニ供シタル器械ニシテ單ニ其用ニ供ス可キ者ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス

第六節 往來通信ヲ妨害スル罪

第百六十二條 道路橋梁河溝港埠ヲ損壞シテ往來ヲ妨害シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百六十三條 偽計又ハ威力ヲ以テ郵便ヲ妨害シ若クハ之ヲ阻止シタル者ハ亦前條ニ同シ

第百六十四條 電信ノ器械柱木ヲ損壞シ又ハ條線ヲ切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シタル者ハ三

月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ器械柱木條線ヲ損壞シテ電信ノ妨害ヲ爲スト雖モ不通ニ至ラサル時ハ一等ヲ減ス

第百六十五條 瀛車ノ往來ヲ妨害スル爲メ鐵道及ヒ其標識ヲ損壞シ其他危險ナル障礙ヲ爲

六年第百一號
布告(第六十

シタル者ハ重懲役ニ處ス

第六十六條 船舶ノ往來ヲ妨害スル爲メ燈臺浮標其他航海ノ安寧ヲ保護スル標識ヲ損壞シ又ハ詐僞ノ標識ヲ點示シタル者ハ亦前條ニ同シ

第六十七條 前數條ニ記載シタル罪其事務ニ關スル官吏及ヒ雇人職工自ラ犯シタル時ハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ

第六十八條 第六十二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ殺傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六十九條 第六十五條第六十六條ノ罪ヲ犯シ因テ瀕車ヲ顛覆シ又ハ船舶ヲ覆没シタル時ハ無期徒刑ニ處シ人ヲ死ニ致シタル時ハ死刑ニ處ス

第七十條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第七節 人ノ住所ヲ侵ス罪

第七十一條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ左ニ記載シタル所爲アル時ハ一等ヲ加フ

一 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ又ハ鎖鑰ヲ開キテ入りタル時

二 兇器其他犯罪ノ用ニ供ス可キ物品ヲ携帯シテ入りタル時

三 暴行ヲ爲シテ入りタル時

四 二人以上ニテ入りタル時

七十二條 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ前條ニ記載シタル加重ス可キ所爲アル時ハ一等ヲ加フ

七十三條 故ナク皇居禁苑離宮行在所及ヒ皇陵内ニ入りタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第八節 官ノ封印ヲ破棄スル罪

七十四條 官署ノ處分ニ因リ特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破棄シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ看守者自ラ犯シタル時ハ一等ヲ加フ

七十五條 官ノ封印ヲ破棄シテ其物件ヲ盜取シ又ハ毀壞シタル者ハ盜罪及ヒ毀壞ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

七十六條 看守者其懈怠ニ因リ封印ヲ破棄シ又ハ其物件ヲ盜取毀壞スル犯人アルヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪

七十七條 陸海軍ノ將校タル者出兵ヲ要求スル權アル官署ヨリ其要求ヲ受ケ故ナクシ

第百八十九條

偽造變造ノ貨幣ヲ内國ニ輸入シタル者ハ偽造變造ノ刑ニ同シ

第百九十條

偽造變造ノ情ヲ知テ其貨幣ヲ取受シ之ヲ行使シタル者ハ偽造變造シテ行使シタル者ノ刑ニ照シ各二等ヲ減ス

其未タ行使セサル者ハ各三等ヲ減ス

第百九十一條

前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第百九十二條

貨幣ヲ偽造變造シ及ヒ輸入取受シタル者未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

若シ職工雜役及ヒ房屋ヲ給與シタル者未タ行使セサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第百九十三條

貨幣ヲ取受スルノ後ニ於テ偽造又ハ變造ナルコトヲ知リ之ヲ行使シタル者ハ其價額ニ倍ノ罰金ニ處ス但其罰金ハ二圓以下ニ降スコトヲ得ス

第二節

官印ヲ偽造スル罪

第百九十四條

御璽國璽ヲ偽造シ又ハ其偽璽ヲ使用シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第百九十五條

各官署ノ印ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ重懲役ニ處ス

第百九十六條

產物商品等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ輕懲役ニ處ス

書籍什物等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ其偽印ヲ使用シタル者ハ一年以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百九十七條

御璽國璽官印記號印章ノ影蹟ヲ盜用シタル者ハ前數條ニ記載シタル偽造ノ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ監守者自ラ犯シタル時ハ偽造ノ刑ニ同シ

第百九十八條

官ヨリ發行スル各種ノ印紙界紙及ヒ郵便切手ヲ偽造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百九十九條

已ニ貼用シタル各種ノ印紙及ヒ郵便切手ヲ再ヒ貼用シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百條

此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百一條

此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節

官ノ文書ヲ偽造スル罪

第二百二條

詔書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ無期徒刑ニ處ス其詔書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第十八類

第一章 刑法 大赦令

九年第九十五號
布告(第百六十三號)
年第四十七號
布告(第百六十六號)
九年勅令第六十六號(第百六十八號)參看

第二百三條 官ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス
其官ノ文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百四條 公債證書(地券)其他官吏ノ公證シタル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス
若シ無記名ノ公債證書ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第二百五條 官吏其管掌ニ係ル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ
其文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百六條 官ノ文書ヲ偽造スルニ因テ官印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル者ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四節 私印私書ヲ偽造スル罪

第二百八條 他人ノ私印ヲ偽造シテ使用シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ他人ノ印影ヲ盜用シタル者ハ一等ヲ減ス

第二百九條 爲替手形其他裏書ヲ以テ賣買ス可キ證書若クハ金額ト交換ス可キ約定手形ヲ

偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス
其手形證書ニ詐偽ノ裏書ヲ爲シテ行使シタル者亦同シ

第二百十條 賣買貸借贈遺交換其他權利義務ニ關スル證書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其餘ノ私書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百十一條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百十二條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第五節 免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ偽造スル罪

第二百十三條 官ノ免狀又ハ鑑札ヲ偽造シテ行使シタル者ハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シテ處斷ス

第二百十四條 屬籍身分氏名ヲ詐稱シ其他詐偽ノ所爲ヲ以テ免狀鑑札ヲ受ケタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
官吏情ヲ知テ其免狀鑑札ヲ下付シタル者ハ一等ヲ加フ

第二百五十五條 公務ヲ免カル可キ爲メ醫師ノ氏名ヲ用ヒ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

醫師囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル者ハ一等ヲ加フ

第二百五十六條 陸海軍ノ徵兵ヲ免カル可キ爲メ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者及ヒ囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル醫師ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百五十七條 免狀鑑札及ヒ疾病ノ證書ヲ増減變換シテ行使シタル者ハ亦偽造ノ刑ニ同シ

第六節 偽證ノ罪

第二百十八條 刑事ニ關スル證人トシテ裁判所ニ呼出サレタル者被告人ヲ曲庇スル爲メ事實ヲ掩蔽シテ偽證ヲ爲シタル時ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一 重罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二 輕罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三 違警罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ違警罪ノ本條ニ依テ處斷ス

第二百十九條 偽證ノ爲メ被告人正當ノ刑ヲ免カレタル時ハ偽證者ノ刑前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百二十條 被告人ヲ陷害スル爲メ偽證ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一 重罪ニ陷ラシムル爲メ偽證シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二 輕罪ニ陷ラシムル爲メ偽證シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三 違警罪ニ陷ラシムル爲メ偽證シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十一條 偽證ノ爲メ被告人刑ニ處セラレタル後ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ偽證者ヲ其刑ニ反坐ス若シ反坐ノ刑前條ニ記載シタル偽證ノ刑ヨリ輕キ時ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス

其刑期限内ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ現ニ經過シタル日數ニ照シテ反坐ノ刑期ヲ減スルヲ得但減シテ前條偽證ノ刑ヨリ降スヲ得ス

第二百二十二條 偽證ノ爲メ被告人死刑ニ處セラレタル時ハ反坐ノ刑一等ヲ減ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ二等ヲ減ス

若シ被告人ヲ死ニ陷ルハノ目的ヲ以テ偽證ヲ爲シタル時ハ死刑ニ反坐ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ一等ヲ減ス

第二百二十三條 民事商事又ハ行政裁判ニ關シテ偽證ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ

重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十四條 鑑定又ハ通事ノ爲メ裁判所ニ呼出サレタル者詐偽ノ陳述ヲ爲シタル時ハ前數條ニ記載シタル偽證ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百二十五條 賄賂其他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ偽證又ハ詐偽ノ鑑定通事ヲ爲サシメタル者ハ亦偽證ノ例ニ同シ

第二百二十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者其事件ノ裁判宣告ニ至ラサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第七節 度量衡ヲ偽造スル罪

第二百二十七條 度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シテ販賣シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ盜用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百二十八條 偽造變造ノ情ヲ知テ其度量衡ヲ販賣シタル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ減ス

第二百二十九條 商賈農工定規ヲ増減シタル度量衡ヲ所有シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ其度量衡ヲ使用シテ利ヲ得タル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ズ
第二百三十條 人ノ囑託ヲ受ケテ度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シタル者ハ其囑託シタル犯人ノ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

九年第十七號
布告(第二百
廿七)參看

第八節 身分ヲ詐稱スル罪

第二百三十一條 官署ニ對シ文書又ハ言語ヲ以テ其屬籍身分氏名年齢職業ヲ詐稱シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十二條 官職位階ヲ詐稱シ又ハ官ノ服飾徽章若クハ内外國ノ勳章ヲ借用シタル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九節 公選ノ投票ヲ偽造スル罪
第二百三十三條 公選ノ投票ヲ偽造シ又ハ其數ヲ増減シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十四條 賄賂ヲ以テ投票ヲ爲サシメ又ハ賄賂ヲ受ケテ投票ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十五條 投票ヲ檢査シ及ヒ其數ヲ計算スル者其投票ヲ偽造シ又ハ増減シタル時ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十六條 調書ヲ造リ投票ノ結局ヲ報告スル者其數ヲ増減シ其他詐偽ノ所爲アル時ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五章 健康ヲ害スル罪

第一節 阿片烟ニ關スル罪

第二百三十七條 阿片烟ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

衆議院議員選
舉法(第五十
三ノ二項)第
九十條第九
一及第十條
一(第五十四
四項)第六十
條參看

第二百三十八條 阿片烟ヲ吸食スルノ器具ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第二百三十九條 稅關官吏情ヲ知テ阿片烟及ヒ其器具ヲ輸入セシメタル者ハ前二條ノ刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百四十條 阿片烟ヲ吸食スル爲メ房屋ヲ給與シテ利ヲ圖ル者ハ輕懲役ニ處ス
人ヲ引誘シテ阿片烟ヲ吸食セシメタル者亦同シ

第二百四十一條 阿片烟ヲ吸食シタル者ハ二年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス
第二百四十二條 阿片烟及ヒ吸食ノ器具ヲ所有シ又ハ受寄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二節 飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪

第二百四十三條 人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルヲ能ハサルニ至ラシメタル者ハ十一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十四條 人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ用ヒテ水質ヲ變シ又ハ腐敗セシメタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十五條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三節 傳染病豫防規則ニ關スル罪

十三年第三十四號(第百二十)ヲ以テ傳染病豫防規則ヲ定ム

第二百四十六條 傳染病豫防ノ爲メ設ケタル規則ニ違背シテ入港ノ船舶ヨリ上陸シ又ハ物品ヲ陸地ニ運搬シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十七條 船長自ラ前條ノ罪ヲ犯シ又ハ人ノ犯スヲ知テ制セサル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ加フ

第二百四十八條 傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ流行地方ヨリ他處ニ出テタル者ハ十五日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十九條 獸類ノ傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ獸類ヲ他處ニ出シタル者ハ十日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四節 危害品及ヒ健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪

第二百五十條 官許ヲ得スシテ危害ヲ生ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ健康ヲ害ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
第二百五十一條 官許ヲ得テ前條ニ記載シタル製造所ヲ創設スト雖モ危害ヲ豫防シ健康ヲ保護スル規則ニ違背シタル者ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第二百五十二條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第五節 健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪

第二百五十三條 人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ飲食物ニ混和シテ販賣シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十四條 規則ニ違背シテ毒藥劇藥ヲ販賣シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十五條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六節 私ニ醫業ヲ爲ス罪

第二百五十六條 官許ヲ得スシテ醫業ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十七條 前條ノ犯人治療ノ方法ヲ誤リ因テ人ヲ死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六章 風俗ヲ害スル罪

第二百五十八條 公然猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十九條 風俗ヲ害スル冊子圖書其他猥褻ノ物品ヲ公然陳列シ又ハ販賣シタル者ハ

四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百六十條 賭場ヲ開張シテ利ヲ圖リ又ハ博徒ヲ招結シタル者ハ三月以上一年以上ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

十五年第二十
五號布告(第
八十九)一
項)參看

第二百六十一條 財物ヲ賭シテ現ニ博奕ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者亦同シ但飲食物ヲ賭スル者ハ此限ニ在ラス

賭博ノ器具財物其現場ニ在ル者ハ之ヲ沒收ス

第二百六十二條 財物ヲ醜集シ富籤ヲ以テ利益ヲ僥倖スルノ業ヲ興行シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十三條 神祠佛堂墓所其他禮拜所ニ對シ公然不敬ノ所爲アル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ說教又ハ禮拜ヲ妨害シタル者ハ四十圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七章 死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪

第二百六十四條 埋葬ス可キ死屍ヲ毀棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十五條 墳墓ヲ發掘シテ棺槨又ハ死屍ヲ見ハシタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ死屍ヲ毀棄シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十六條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照

シテ處斷ス

第八章 商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪

第二百六十七條 偽計又ハ威力ヲ以テ穀類其他衆人ノ需用ニ缺ク可カラサル食用物ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

前項ニ記載シタル以外ノ物品ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ一等ヲ減ス

第二百六十八條 偽計又ハ威力ヲ以テ糶賣又ハ入札ヲ妨害シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十九條 偽計又ハ威力ヲ以テ農工ノ業ヲ妨害シタル者ハ亦前條ニ同シ

第二百七十條 農工ノ雇人其雇賃ヲ増サシメ又ハ農工業ノ景況ヲ變セシムル爲メ雇主及ヒ他ノ雇人ニ對シ偽計威カヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十一條 雇主其雇賃ヲ減シ又ハ農工業ノ景況ヲ變スル爲メ雇人及ヒ他ノ雇主ニ對シ偽計威カヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ亦前條ニ同シ

第二百七十二條 虛偽ノ風説ヲ流布シテ穀類其他衆人需用物品ノ價直ヲ昂低セシメタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第九章 官吏瀆職ノ罪

第一節 官吏公益ヲ害スル罪

第二百七十三條 官吏其管掌ニ係ル法律規則ヲ公布施行セス又ハ他ノ官吏ノ公布施行ヲ妨害シタル者ハ二月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十四條 兵隊ヲ要求シ及ヒ之ヲ使用スル權アル官吏地方ノ騷擾其他兵權ヲ以テ鎮撫ス可キ時ニ當リ其處分ヲ爲サル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十五條 官吏規則ニ違背シテ商業ヲ爲シタル者ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二節 官吏人民ニ對スル罪

第二百七十六條 官吏擅ニ威權ヲ用ヒ人ヲシテ其權利ナキ事ヲ行ハシメ又ハ其爲ス可キ權利ヲ妨害シタル者ハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十七條 人ノ身體財産ヲ妨害スルノ犯人アルニ當リ豫審判事檢察官吏其報告ヲ受ケテ速ニ保護ノ處分ヲ爲サル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十八條 逮捕官吏法律ニ定メタル程式規則ヲ遵守セスシテ人ヲ逮捕シ又ハ不正ニ人ヲ監禁シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

加ス但監禁日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第二百七十九條 司獄官吏程式規則ヲ遵守セスシテ囚人ヲ監禁シ若クハ囚人ヲ出獄セシム可キノ時ニ至リ之ヲ放免セサル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十條 前二條ニ記載シタル官吏又ハ護送者囚人ニ對シ飲食衣服ヲ屏去シ其地苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ囚人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百八十一條 水火震災ノ際官吏囚人ノ監禁ヲ解クコトヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加フ

第二百八十二條 裁判官檢察事及ヒ警察官吏被告人ニ對シ罪狀ヲ陳述セシムル爲メ暴行ヲ加ヘ又ハ陵虐ノ所爲アル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ被告人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス
第二百八十三條 裁判官檢察官故ナクシテ刑事ノ訴ヲ受理セス又ハ遷延シテ審理セサル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其民事ノ訴ニ係ル者亦同シ

第二百八十四條 官吏人ノ囑託ヲ受ケ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ一月以上一年

以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ不正ノ處分ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百八十五條 裁判官民事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以

上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ不正ノ裁判ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百八十六條 裁判官檢察警察官吏刑事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ被告人ヲ曲庇シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其被告人ヲ陷害シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス若シ枉斷シタル所ノ刑此刑ヨリ重キ時ハ第二百二十一條第二百二十二條ノ例ニ照シテ反坐ス

第二百八十七條 裁判官檢察警察官吏賄賂ヲ收受聽許セスト雖モ情ニ徇カヒ又ハ怨ヲ挾サ

シ被告人ヲ曲庇陷害シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十八條 前數條ニ記載シタル賄賂已ニ收受シタル者ハ之ヲ沒收シ費用シタル者ハ其價ヲ追徴ス

第三節 官吏財産ニ對スル罪

第十八類 第一章 刑法 大赦令

第二百八十九條 官吏自ら監守スル所ノ金穀物件ヲ竊取シタル者ハ輕懲役ニ處ス
因テ官ノ文書簿冊ヲ増減變換シ又ハ毀棄シタル時ハ第二百五條ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百九十條 租稅其他諸般ノ入額ヲ徵收スル官吏正數外ノ金穀ヲ徵收シタル者ハ二月以
上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百九十一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監
視ニ付ス

第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪

第一章 身體ニ對スル罪

第一節 謀殺故殺ノ罪

第二百九十二條 豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ死刑ニ處ス

第二百九十三條 毒物ヲ施用シテ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ヲ以テ論シ死刑ニ處ス

第二百九十四條 故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲シ無期徒刑ニ處ス

第二百九十五條 支解折割其他慘刻ノ所爲ヲ以テ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十六條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ
故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十七條 人ヲ殺スノ意ニ出テ詐稱誘導シテ危害ニ陷レ死ニ致シタル者ハ故殺ヲ以
テ論シ其豫メ謀ル者ハ謀殺ヲ以テ論ス

第二百九十八條 謀殺故殺ヲ行ヒ誤テ他人ヲ殺シタル者ハ仍ホ謀殺ヲ以テ論ス

第二節 毆打創傷ノ罪

第二百九十九條 人ヲ毆打創傷シ因テ死ニ致シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百條 人ヲ毆打創傷シ其兩目ヲ瞎シ兩耳ヲ聾シ又ハ兩肢ヲ折リ及ヒ舌ヲ斷チ陰陽ヲ毀
敗シ若クハ知覺精神ヲ喪失セシメ篤疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其一目ヲ瞎シ一耳ヲ聾シ又ハ一肢ヲ折リ其他身體ヲ殘廢シ癡疾ニ致シタルハ者ハ二年以
上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百一條 人ヲ毆打創傷シ二十日以上ノ時間疾病ニ罹リ又ハ職業ヲ營ムヲ能ハサルニ至
ラシメタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

其疾病休業ノ時間二十日ニ至ラサル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百二條 豫メ謀テ人ヲ毆打創傷シ休業癡篤疾又ハ死ニ致シタル者ハ前數條ニ記載シタ
ル刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第三百三條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ毆打
創傷シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百四條 毆打ニ因リ誤テ他人ヲ創傷シタル者ハ仍ホ毆打創傷ノ本刑ヲ科ス

第三百五條 二人以上共ニ人ヲ毆打創傷シタル者ハ現ニ手ヲ下シ傷ヲ成スノ輕重ニ從テ各

自ニ其刑ヲ科ス若シ共毆シテ傷ヲ成スノ輕重ヲ知ルヲ能ハサル時ハ其重傷ノ刑ニ照シ一等ヲ減ス但教唆者ハ減等ノ限ニ在ラス

第二百六條 二人以上共ニ人ヲ毆打スルニ當リ自ラ人ヲ傷セスト雖モ幫助シテ傷ヲ成サシメタル者ハ現ニ傷ヲ成シタル者ノ刑ニ一等ヲ減ス

第二百七條 健康ヲ害ス可キ物品ヲ施用シテ人ヲ疾苦セシメタル者ハ豫メ謀テ毆打創傷スルノ例ニ照シテ處斷ス

第二百八條 人ヲ殺スノ意ニ非スト雖モ詐稱誘導シテ危害ニ陷レ因テ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ヲ以テ論ス

第三節 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪

第二百九條 自己ノ身體ニ暴行ヲ受クルニ因リ直チニ怒ヲ發シ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第二百十條 毆打シテ互ニ創傷シ其手ヲ下スノ先後ヲ知ルヲ能ハサル者ハ各其罪ヲ宥恕スルヲ得

第二百十一條 本夫其妻ノ姦通ヲ覺知シ姦所ニ於テ直チニ姦夫又ハ姦婦ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ此限ニ在ラス

第二百十二條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戶牆壁ヲ踰越損壞セントスル者ヲ防止スル爲メ之ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス

第二百十三條 前數條ニ記載シタル宥恕ス可キ罪ハ各本刑ニ照シ二等又ハ三等ヲ減ス

第二百十四條 身體生命ヲ正當ニ防衛シ己ムヲ得サルニ出テ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス其罪ヲ論セス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第二百十五條 左ノ諸件ニ於テ己ムヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ論セス
一 財産ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スルニ出タル時
二 盜犯ヲ防止シ又ハ盜賊ヲ取還スルニ出タル時
三 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入り若クハ門戶牆壁ヲ踰越損壞スル者ヲ防止スルニ出タル時

第二百十六條 身體財産ヲ防衛スルニ出ルト雖モ己ムヲ得サルニ非スシテ害ヲ暴行人ニ加ヘ又ハ危害己ニ去リタル後ニ於テ勢ニ乘シ仍ホ害ヲ暴行人ニ加ヘタル者ハ不論罪ノ限ニ在ラス但情狀ニ因リ第二百十三條ノ例ニ照シ其罪ヲ宥恕スルヲ得

第四節 過失殺傷ノ罪

第二百十七條 疎虞懈怠又ハ規則慣習ヲ遵守セス過失ニ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百十八條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ癱篤疾ニ致シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十九條 過失ニ因テ人ヲ創傷シ疾病休業ニ至ラシメタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五節 自殺ニ關スル罪

第三百二十條 人ヲ教唆シテ自殺セシメ又ハ囑託ヲ受ケテ自殺人ノ爲メニ手ヲ下シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其他自殺ノ補助ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第三百二十一條 自己ノ利ヲ圖リ人ヲ教唆シテ自殺セシメタル者ハ重懲役ニ處ス

第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪

第三百二十二條 擅ニ人ヲ逮捕シ又ハ私家ニ監禁シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第三百二十三條 擅ニ人ヲ監禁制縛シテ毆打拷責シ又ハ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百二十四條 前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三百二十五條 擅ニ人ヲ監禁シ水火震災ノ際其監禁ヲ解クコトヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第七節 脅迫ノ罪

第三百二十六條 人ヲ殺サント脅迫シ又ハ人ノ住居シタル家屋ニ放火セント脅迫シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
毆打創傷其他暴行ヲ加ヘント脅迫シ又ハ財産ニ放火シ及ヒ毀壞劫掠セント脅迫シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
第三百二十七條 兇器ヲ持シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ
第三百二十八條 親屬ニ害ヲ加フ可キ事ヲ以テ脅迫シタル者ハ亦前二條ノ例ニ同シ
第三百二十九條 此節ニ記載シタル罪ハ脅迫ヲ受ケタル者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第八節 墮胎ノ罪

第三百三十條 懷胎ノ婦女藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十一條 藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎セシメタル者ハ亦前條ニ同シ因テ婦女ヲ死ニ致シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十二條 醫師穩婆又ハ藥商前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各二等ヲ加フ

第三百三十三條 懷胎ノ婦女ヲ威逼シ又ハ誑騙シテ墮胎セシメタル者ハ一年以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十四條 懷胎ノ婦女ナルコトヲ知テ毆打其他暴行ヲ加ヘ因テ墮胎ニ至ラシメタル者

ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス其墮胎セシムルノ意ニ出タル者ハ輕懲役ニ處ス
第三百三十五條 前二條ノ罪ヲ犯シ因テ婦女ヲ癡篤疾又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各
本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第九節 幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪

第三百三十六條 八歳ニ滿サル幼者ヲ遺棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス
自ラ生活スルヲ能ハサル老者疾患者ヲ遺棄シタル者亦同シ

第三百三十七條 八歳ニ滿サル幼者又ハ老疾者ヲ寥闕無人ノ地ニ遺棄シタル者ハ四月以上
四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十八條 給料ヲ得テ人ノ寄託ヲ受ケ保養ス可キ者前二條ノ罪ヲ犯シタル時ハ各一
等ヲ加フ

第三百三十九條 幼者老疾者ヲ遺棄シ因テ廢疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處シ篤疾ニ致シタ
ル者ハ重懲役ニ處シ死ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第三百四十條 自己ノ所有地又ハ看守ス可キ地内ニ遺棄セラレタル幼者老疾者アルヲ知
テ之ヲ扶助セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス
若シ疾病ニ罹リ昏倒スル者アルヲ知テ扶助セス又ハ申告セサル者亦同シ

第十節 幼者ヲ畧取誘拐スル罪

第三百四十一條 十二歳ニ滿サル幼者ヲ畧取シ又ハ誘拐シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付

シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十二條 十二歳以上二十歳ニ滿サル幼者ヲ畧取シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付
シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其誘拐
シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上
二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十三條 畧取誘拐シタル幼者ナルヲ知テ自己ノ家屬僕婢トナシ又ハ其他ノ名稱
ヲ以テ之ヲ收受シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第三百四十四條 前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但略
取誘拐セラレタル幼者式ニ從テ婚姻ヲ爲シタル時ハ告訴ノ效ナシ

第三百四十五條 二十歳ニ滿サル幼者ヲ略取誘拐シテ外國人ニ交付シタル者ハ輕懲役ニ處
ス

第十一節 猥褻姦淫重婚ノ罪

第三百四十六條 十二歳ニ滿サル男女ニ對シ猥褻ノ所行ヲ爲シ又ハ十二歳以上ノ男女ニ對
シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上
二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十七條 十二歳ニ滿サル男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ二
月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十八條 十二歳以上ノ婦女ヲ強姦シタル者ハ輕懲役ニ處ス

藥酒等ヲ用ヒ人ヲ昏睡セシメ又ハ精神ヲ錯亂セシメテ姦淫シタル者ハ強姦ヲ以テ論ス

第三百四十九條 十二歳ニ滿サル幼女ヲ姦淫シタル者ハ輕懲役ニ處ス若シ強姦シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百五十條 前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第三百五十一條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シテ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各

本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス但強姦ニ因テ廢篤疾ニ致シタル者ハ宥期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百五十二條 十六歳ニ滿サル男女ノ淫行ヲ勸誘シテ媒合シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百五十三條 有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其相姦スル者亦同シ

此條ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ告訴ノ效ナシ
第三百五十四條 配偶者アル者重テ婚姻ヲ爲シタル時ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪

第三百五十五條 不實ノ事ヲ以テ人ヲ誣告シタル者ハ第二百二十條ニ記載シタル偽證ノ例

十五年第五十八號布告(第

七) 參看

ニ照シテ處斷ス

第三百五十六條 誣告ヲ爲スト雖モ被告人ノ推問ヲ始メサル前ニ於テ誣告者自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第三百五十七條 誣告ニ因テ被告人刑ニ處セラレタル時ハ第二百二十一條第二百二十二條ニ記載シタル例ニ照シテ處斷ス

第三百五十八條 惡事醜行ヲ摘發シテ人ヲ誹毀シタル者ハ事實ノ有無ヲ問ハス左ノ例ニ照シテ處斷ス

一 公然ノ演說ヲ以テ人ヲ誹毀シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二 書類書圖ヲ公布シ又ハ雜劇偶像ヲ作爲シテ人ヲ誹毀シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百五十九條 死者ヲ誹毀シタル者ハ誣罔ニ出タルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヲ得ス

第三百六十條 醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人若クハ神官僧侶其身分職業ニ於テ委託ヲ受ケタル事ニ因リ知得タル陰私ヲ漏告シタル者ハ誹毀ヲ以テ論シ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但裁判所ノ呼出ヲ受ケテ事實ヲ陳述スル者ハ此限ニ在ラス

第二百六十一條 此節ニ記載シタル誹毀ノ罪ハ被害者又ハ死者ノ親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第十二節 祖父母父母ニ對スル罪

第二百六十二條 子孫其祖父母父母ヲ謀殺故殺シタル者ハ死刑ニ處ス 其自殺ニ關スル罪ハ凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ

第二百六十三條 子孫其祖父母父母ニ對シ毆打創傷ノ罪其他監禁脅迫遺棄誣告誹毀ノ罪ヲ犯シタル者ハ各本條ニ記載シタル凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ但癡疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百六十四條 子孫其祖父母父母ニ對シ衣食ヲ供給セス其他必要ナル奉養ヲ缺キタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス 因テ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百六十五條 祖父母父母ニ對シタル殺傷ノ罪ハ特別ノ宥恕及ヒ不論罪ノ例ヲ用フルヲ得ス但其犯ス時知ラサル者ハ此限ニ在ラス

第二章 財産ニ對スル罪

第一節 竊盜ノ罪

第二百六十六條 人ノ所有物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百六十七條 水火震災其他ノ變ニ乘シテ竊盜ヲ犯シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百六十八條 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ若クハ鎖鑰ヲ開キ邸宅倉庫ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ亦前條ニ同シ

第二百六十九條 二人以上共ニ前三條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第二百七十條 兇器ヲ携帯シテ人ノ住居シタル邸宅ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第二百七十一條 自己ノ所有物ト雖ヒ典物トシテ他人ニ交付シ又ハ官署ノ命令ニ因リ他人ノ看守シタル時之ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第二百七十二條 田野ニ於テ穀類菜葉其他ノ產物ヲ竊取シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百七十三條 山林ニ於テ竹木鑛物其他ノ產物ヲ竊取シ又ハ川澤池沼湖海ニ於テ人ノ生養シ若クハ營業ニ關スル產物ヲ竊取シタル者ハ亦前條ニ同シ

第二百七十四條 牧場ニ於テ牧畜ノ獸類ヲ竊取シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百七十五條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

十七年第十七號布告(第二百十四)ノ二項)參看

第三百七十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百七十七條 祖父母父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姊妹互ニ其財物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論スルノ限ニ在ラス
若シ他人共ニ犯シテ財物ヲ分チタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第二節 強盜ノ罪

第三百七十八條 人ヲ脅迫シ又ハ暴行ヲ加ヘテ財物ヲ強取シタル者ハ強盜ノ罪ト爲シ輕懲役ニ處ス

第三百七十九條 強盜左ニ記載シタル情狀アル者ハ一個毎ニ一等ヲ加フ

一 二人以上共ニ犯シタル時

二 兇器ヲ携帯シテ犯シタル時

第三百八十條 強盜人ヲ傷シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百八十一條 強盜婦女ヲ強姦シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百八十二條 竊盜財ヲ得テ其取還ヲ拒ク爲メ臨時暴行脅迫ヲ爲シタル者ハ強盜ヲ以テ論ス

第三百八十三條 藥酒等ヲ用ヒ人ヲ醉迷セシメ其財物ヲ盜取シタル者ハ強盜ヲ以テ論シ輕懲役ニ處ス

八年第六十六號
號布告(第八十八號)船難破漂流物取扱規則參看

九年第五十六號
號布告(第八十二號)遺失物條例參看
十年第十一號
甲第廿號布達
(同上)項埋藏物掘取處分方參看

第三百八十四條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪

第三百八十五條 遺失及ヒ漂流ノ物品ヲ拾得テ隱匿シ所有主ニ還付セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百八十六條 他人ノ所有地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得テ隱匿シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百八十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第四節 家資分散ニ關スル罪

第三百八十八條 家資分散ノ際其財産ヲ藏匿脱漏シ又ハ虛偽ノ負債ヲ増加シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

情ヲ知テ虛偽ノ契約ヲ承諾シ若クハ其媒介ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第三百八十九條 家資分散ノ際牒簿ノ類ヲ藏匿毀棄シ若クハ分散決定ノ後債主中ノ一人又ハ數人ニ其負債ヲ私償シテ他ノ債主ヲ害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

第三百九十條 人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ證書類ヲ騙取シタル者ハ詐欺取財ノ罪

ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
因テ官私ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ偽造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷
ス

第二百九十一條 幼者ノ知慮淺薄又ハ人ノ精神錯亂シタルニ乘シテ其財物若クハ證書類ヲ
授與セシメタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第二百九十二條 物件ヲ販賣シ又ハ交換スルニ當リ其物質ヲ變シ若クハ分量ヲ偽テ人ニ交
付シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第二百九十三條 他人ノ動産不動産ヲ冒認シテ販賣交換シ又ハ抵當典物ト爲シタル者ハ詐
欺取財ヲ以テ論ス

自己ノ不動産ト雖モ已ニ抵當典物ト爲シタルヲ欺隱シテ他人ニ賣與シ又ハ重ネテ抵當典
物ト爲シタル者亦同シ

第二百九十四條 前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二百九十五條 受寄ノ財物借用物又ハ典物其他委託ヲ受ケタル金額物件ヲ費消シタル者
ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス若シ騙取拐帶其他詐欺ノ所爲アル者ハ詐欺取財ヲ以
テ論ス

第二百九十六條 自己ノ所有ニ係ルト雖モ官署ヨリ差押ヘタル物件ヲ藏匿脱漏シタル者ハ
一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス但家資分散ノ際此罪ヲ犯シタル者ハ第二百八十八條ノ

例ニ照シテ處斷ス

第二百九十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照
シテ處斷ス

第二百九十八條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第二百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル
時ハ其罪ヲ論セス

第六節 贓物ニ關スル罪

第二百九十九條 強竊盜ノ贓物ナルヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタ
ル者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百條 前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百一條 詐欺取財其他ノ犯罪ニ關シタル物件ナルヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若
クハ牙保ヲ爲シタル者ハ十一日以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金
ヲ附加ス

第七節 放火失火ノ罪

第四百二條 火ヲ放テ人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

第四百三條 火ヲ放テ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ燒燬シタル者ハ無期徒刑ニ處
ス

第四百四條 火ヲ放テ廢屋及ヒ柴草肥料等ヲ貯フル屋舎ヲ燒燬シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百五條 火ヲ放テ人ヲ乗載シタル船舶汽車ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

其人ヲ乗載セサル船舶汽車ニ係ル時ハ重懲役ニ處ス

第四百六條 火ヲ放テ山林ノ竹木田野ノ穀麥又ハ露積シタル柴草竹木其他ノ物件ヲ燒燬シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第四百七條 火ヲ放テ自己ノ家屋ヲ燒燬シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百八條 放火ノ罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百九條 火ヲ失シテ人ノ家屋財産ヲ燒燬シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十條 火藥其他激發ス可キ物品又ハ煤氣并蒸氣罐ヲ破裂セシメテ人ノ家屋財産ヲ毀壞シタル者ハ其故意ニ出ルト過失トヲ分チ放火失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第八節 決水ノ罪

第四百十一條 堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ毀壞シテ人ノ住居シタル家屋ヲ漂失シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

若シ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ漂失シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百十二條 堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シテ田圃礦坑牧場等ヲ荒廢シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第四百十三條 他人ノ便益ヲ損シ又ハ自己ノ便益ヲ圖ル爲メ堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シ其

他水利ヲ妨害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百十四條 過失ニ因テ水害ヲ起シタル者ハ失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第九節 船舶ヲ覆没スル罪

第四百十五條 衝突其他ノ所爲ヲ以テ人ヲ乗載シタル船舶ヲ覆没シタル者ハ死刑ニ處ス但

船中死亡ナキ時ハ無期徒刑ニ處ス

第四百十六條 前條ノ所爲ヲ以テ人ヲ乗載セサル船舶ヲ覆没シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

第四百十七條 人ノ家屋其他ノ建造物ヲ毀壞シタル者ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ

二圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第四百十八條 人ノ家屋ニ屬スル牆壁及ヒ園池ノ裝飾又ハ田圃ノ樊圍牧場ノ柵欄ヲ毀壞シ

タル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十九條 人ノ稼穡竹木其他需用ノ植物ヲ毀損シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁

錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百二十條 土地ノ經界ヲ表シタル物件ヲ毀壞シ又ハ移轉シタル者ハ一月以上六月以下

ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百二十一條 人ノ器物ヲ毀棄シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百二十二條 人ノ牛馬ヲ殺シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百二十三條 前條ニ記載シタル以外ノ家畜ヲ殺シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス但被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第四百二十四條 人ノ權利義務ニ關スル證書類ヲ毀棄滅盡シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四編 違警罪

第四百二十五條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

一規則ヲ遵守セスシテ火藥其他破裂ス可キ物品ヲ市街ニ運搬シタル者

二規則ヲ遵守セスシテ火藥其他破裂ス可キ物品又ハ自ラ火ヲ發ス可キ物品ヲ貯藏シタル者

三官許ヲ得スシテ烟火ヲ製造シ又ハ販賣シタル者

四人家稠密ノ場所ニ於テ濫リニ烟火其他火器ヲ玩ヒタル者

五蒸氣器械其他烟筒火竈ヲ建造修理シ及ヒ掃除スル規則ニ違背シタル者

六官署ノ督促ヲ受ケテ崩壞セントスル家屋牆壁ノ修理ヲ爲サ、ル者

七官許ヲ得スシテ死屍ヲ解剖シタル者

八自己ノ所有地内ニ死屍アルヲ知テ官署ニ申告セス又ハ他所ニ移シタル者

九人ヲ毆打シテ創傷疾病ニ至ラサル者

十密ニ賣淫ヲ爲シ又ハ其媒合容止ヲ爲シタル者

十一人ノ住居セサル家屋内ニ潜伏シタル者

十二定リタル住居ナク平常營生ノ産業ナクシテ諸方ニ徘徊スル者

十三官許ノ墓地外ニ於テ私ニ埋葬シタル者

十四違警罪ノ犯人ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者但被告人偽證ノ爲メ刑ヲ免カレタル時ハ

第二百十九條ノ例ニ從フ

第四百二十六條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ二日以上五日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五十錢以上

一圓五十錢以下ノ科料ニ處ス

一人家ノ近傍又ハ山林田野ニ於テ濫リニ火ヲ焚ク者

二水火其他ノ變ニ際シ官吏ヨリ防禦ス可キノ求ムヲ受ケ傍觀シテ之ヲ肯セサル者

三不熟ノ菓物又ハ腐敗シタル飲食物ヲ販賣シタル者

四健康ヲ保護スル爲メ設ケタル規則又ハ傳染病豫防規則ニ違背シタル者

五人ノ通行ス可キ場所ニアル危險ノ井溝其他凹所ニ蓋又ハ防圍ヲ爲サ、ル者

- 六路上ニ於テ犬其他ノ獸類ヲ喉シ又ハ驚逸セシメタル者
 - 七發狂人ノ看守ヲ怠リ路上ニ徘徊セシメタル者
 - 八狂犬猛獸等ノ繫鎖ヲ怠リ路上ニ放チタル者
 - 九變死人ノ檢視ヲ受ケスシテ埋葬シタル者
 - 十墓碑及ヒ路上ノ神佛ヲ毀損シ又ハ汚瀆シタル者
 - 十一神祠佛堂其他公ノ建造物ヲ汚損シタル者
 - 十二公然人ヲ罵詈嘲弄シタル者但訴ヲ待テ其罪ヲ論ス
- 第四百二十七條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日以上三日以下ノ拘留ニ處シ又ハ二十錢以上一圓二十五錢以下ノ科料ニ處ス
- 一濫リニ車馬ヲ疾驅シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
 - 二制止ヲ肯セスシテ人ノ群集シタル場所ニ車馬ヲ牽キタル者
 - 三夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者
 - 四木石等ヲ道路ニ堆積シテ防圍ヲ設ケス又ハ標識ノ點燈ヲ怠リタル者
 - 五瓦礫ヲ道路家屋園圍ニ投擲シタル者
 - 六禽獸ノ死屍ヲ道路ニ棄擲シ又ハ取除カサル者
 - 七汚穢物ヲ道路家屋園圍ニ投擲シタル者
 - 八警察ノ規則ニ違背シテ工商ノ業ヲ爲シタル者

- 九醫師穩婆事故ナクシテ急病人ノ招キニ應セサル者
 - 十死亡ノ申告ヲ爲サスシテ埋葬シタル者
 - 十一流言浮説ヲ爲シテ人ヲ誣惑シタル者
 - 十二妄ニ吉凶禍福ヲ説キ又ハ祈禱符呪等ヲ爲シ人ヲ惑ハシテ利ヲ圖ル者
 - 十三私有地外へ濫リニ家屋牆壁ヲ設ケ又ハ軒楹ヲ出シタル者
 - 十四官許ヲ得スシテ路傍又ハ河岸ニ床店等ヲ開キタル者
 - 十五路上ノ植木市街ノ常燈及ヒ厠場等ヲ毀損シタル者
 - 十六道路橋梁其他ノ場所ニ榜示シタル通行禁止及ヒ指道標ノ類ヲ毀棄汚損シタル者
- 第四百二十八條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日ノ拘留ニ處シ又ハ十錢以上一圓以下ノ科料ニ處ス
- 一官署ヨリ價額ヲ定メタル物品ヲ定價以上ニ販賣シタル者
 - 二渡船橋梁其他ノ場所ニ於テ定價以上ノ通行錢ヲ取り又ハ故ナク通行ヲ妨ケタル者
 - 三渡船橋梁其他通行錢ヲ拂フ可キ場所ニ於テ其定價ヲ出サスシテ通行シタル者
 - 四路上ニ於テ賭博ニ類スル商業ヲ爲シタル者
 - 五官許ヲ得スシテ劇場其他觀物場ヲ開キ及ヒ其規則ニ違背シタル者
 - 六溝渠下水ヲ毀損シ又ハ官署ノ督促ヲ受ケテ溝渠下水ヲ浚ハサル者
 - 七制止ヲ肯セスシテ路傍ニ食物其他ノ商品ヲ羅列シタル者

八官許ヲ得スシテ獸類ヲ官有地ニ放チ又ハ牧畜シタル者
 九身體ニ刺文ヲ爲シ及ヒ之ヲ業トスル者
 十他人ノ繫キタル牛馬其他ノ獸類ヲ解放シタル者
 十一他人ノ繫キタル舟筏ヲ解放シタル者
 第四百二十九條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス
 一橋梁又ハ堤防ノ害ト爲ル可キ場所ニ舟筏ヲ繫キタル者
 二牛馬諸車其他物件ヲ道路ニ横タヘ又ハ木石薪炭等ヲ堆積シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
 三車馬ヲ並ヘ牽テ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
 四水路ニ於テ舟ヲ並ヘ通船ノ妨害ヲ爲シタル者
 五氷雪塵芥等ヲ路上ニ投棄シタル者
 六官署ノ督促ヲ受ケテ道路ノ掃除ヲ爲サハル者
 七制止ヲ肯セスシテ路上ニ遊戯ヲ爲シ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
 八牛馬ヲ牽キ又ハ繫クヲ忽カセニシテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
 九出入ヲ禁止シタル場所ニ濫リニ出入シタル者
 十通行禁止ノ榜示ヲ犯シテ通行シタル者
 十一道路ニ於テ放歌高聲ヲ發シテ制止ヲ肯セサル者

十二酩酊シテ路上ニ喧噪シ又ハ醉臥シタル者
 十三路上ノ常燈ヲ消シタル者
 十四人家ノ牆壁ニ貼紙及ヒ樂書シタル者
 十五邸宅ノ番號標札招牌又ハ貸家賣家ノ貼紙其他報告ノ榜標等ヲ毀損シタル者
 十六他人ノ田野園圃ニ於テ菜葉ヲ採食シ又ハ花卉ヲ採折シタル者
 十七公園ノ規則ヲ犯シタル者
 十八通路ナキ他人ノ田圃ヲ通行シ又ハ牛馬ヲ牽入レタル者
 第四百三十條 前數條ニ記載スルノ外各地方ノ便宜ニヨリ定ムル所ノ違警罪ヲ犯シタル者ハ其罰則ニ從テ處斷ス
 〔一〕刑法附則 明治十四年十二月十九日 布告第十七號
 刑法附則別冊ノ通相定メ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス
 右奉 勅旨布告候事
 (別冊)
 刑法附則
 第一章 主刑執行
 第一條 死刑ハ其執行ヲ爲ス裁判所ノ檢察官書記及ヒ獄司刑場ニ立會獄司ヨリ囚人ニ死刑ヲ執行スヘキヲ告示シタル後獄丁ヲシテ之ヲ決行セシム但其時限ハ午前十時前ト

ス

第二條 死刑ヲ行フ時ハ刑場ノ警戒ヲ嚴ニシ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルヲ許サス但立會官吏ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニアラス

第三條 死刑ノ執行畢リタル時ハ書記其始末書ヲ作り立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印シ之ヲ裁判所ノ檢事局ニ納ム可シ

第四條 左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フヲ禁ス

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

仁孝天皇祭

神武天皇祭

六月大祓

秋季皇靈祭

神宮神嘗祭

天長節

後桃園天皇祭

新嘗祭

光格天皇祭

十二月大祓

第五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懐胎ト申スル者ハ醫師及ヒ穩婆ヲシテ之ヲ検査セシメ果シテ懐胎ナル時ハ檢察官ヨリ司法卿ニ上申シテ其執行ヲ停メ産後一百日ヲ經テ更ニ司法卿ノ命令ヲ受ケ執行スヘシ

第六條 死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アル時ハ獄司之ヲ許可シ下付スルヲ得

第七條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル者執行ニ至ルマテ何時ニテモ獄司ノ許可ヲ得テ其親屬故舊ニ接見スルヲ得

第八條 死刑ヲ執行シタル時ハ犯人ノ屬籍氏名年齢職業住所及ヒ其罪狀刑名ヲ記載シテ左ノ各所ニ榜示公告ス可シ

刑ヲ宣告シタル裁判所ノ門前

犯罪ノ地

犯人住居ノ地

第九條 徒流ノ囚ヲ發遣スルハ裁判ヲ爲シタル地ノ獄司ヨリ内務卿ニ上申シ其命令ヲ待テ發船ノ地ニ護送ス可シ

條參看

第十條 徒刑ノ囚ハ島地ニ於テ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルコトヲ得
第十一條 流刑ノ囚幽閉中獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ獄司之ヲ許ス可シ
第十二條 流刑ノ囚幽閉ヲ免ス可キ者アル時ハ獄司ヨリ内務司法兩卿ニ上申シ其許可ヲ受ケヘシ

第十三條 徒刑ノ囚假出獄ヲ許サレタル者又ハ流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者家屬ヲ招キ同居スルヲ請フ時ハ之ヲ許スコトヲ得但其路費ハ自ラ之ヲ辨ス可シ

第十四條 流刑ノ囚幽閉ヲ免シ地ヲ限リ居住セシムル者ハ監獄近傍ノ地ヲ限リ獄司ノ監督ヲ受ケシム若シ已ムコトヲ得サル事故アル時ハ獄司ニ請フテ限外ニ出ルコトヲ得

第十五條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者再ヒ罪ヲ犯シタル時ハ本刑期限内ト雖モ島地ニ於テ直チニ其刑ヲ執行ス可シ

第十六條 懲役重禁錮ノ囚ハ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルコトヲ得

第十七條 禁獄輕禁錮ノ囚獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ獄司之ヲ許ス可シ

第十八條 服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル者後犯ノ刑期百日以内ハ工錢ヲ給與セス

第十九條 四人ニ給與スル工錢ノ額ヲ定メ之ヲ交付シ及ヒ領置スル方法ハ監獄ノ規則ニ從フ

第二十條 罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未タ納完セサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ之ヲ徵收セ

同第二十條參看

同上第三十七條參看

ス附加ノ罰金ニ於ル亦同シ

第二章 監視

第二十一條 監視ハ主刑ノ終リタル後仍ホ將來ヲ檢束スル爲メ警察官吏ヲシテ犯人ノ行狀ヲ監視セシムル者トス

第二十二條 監視ニ付ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ主刑ノ終リタル時典獄ヨリ最近ノ警察所ニ護送シ其警察所ヨリ住居ノ地ノ警察所ニ送致シ監視ヲ執行セシム但主刑ノ期滿免除ヲ得タル者又ハ主刑ヲ免シ止マ監視ニ付スル者ハ其裁判所ノ檢察官ヨリ護送スヘシ十五年第四拾貳號布告ヲ以テ全條改正

第二十三條 犯人ヲ警察所ニ護送スル時ハ其監視ノ起算滿期ヲ記載シタル文書及ヒ刑名宣告書ノ謄本ヲ附ス可シ

第二十四條 同上布告ヲ以テ削除ス

第二十五條 警察所ヨリ犯人ヲ住居ノ地ノ警察所ニ送致スル時ハ其里程ヲ計リ日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與シ犯人到着ノ日直チニ之ヲ其地ノ警察所ニ差出サシム但途中事故アリテ淹滞シタル時ハ第三十一條ノ例ニ從フ可シ

犯人ヲ送致スル時ハ第三十三條ニ記載シタル書類ヲ其地ノ警察所ニ遞送ス可シ

第二十六條 犯人住居ノ地ノ警察所ニ於テハ監視ノ期限間遵守ス可キ條件ヲ讀聞カセ監視ノ票ヲ下付ス可シ

第二十七條 監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ遵守ス可シ

一 毎月二度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルコトヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病又ハ已ムコトヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルコト能ハサル時ハ其事由ヲ届出ツ可シ

二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルコトヲ許サス

三 事故アリテ其住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

四 擅ニ他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許サス若シ已ムコトヲ得サル事故アル時ハ其事由ヲ警察所ニ具申シ許可ヲ受ク可シ

第二十八條 監視ノ期限間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シ

第二十九條 警察所ニ於テ住居ヲ轉スルコトヲ許可シタル時ハ其事由ヲ轉住ノ地ノ警察所ニ通知シ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ遞送ス可シ

第三十條 他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許可シタル時ハ其里程ヲ計リ先方ノ地ニ滯留スル時日ヲ算シ往復日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與ス可シ

犯人先方ノ地ニ到レハ其地ノ警察所ニ出テ旅券ヲ示シ官吏ノ認印ヲ受ケ限定ノ日數内ニ歸來リ直チニ旅券ヲ警察所ニ還納スヘシ

第三十一條 旅行中天災又ハ疾病等ニ因リ臨時淹滯シタル時ハ事由ヲ其地ノ警察所ニ具申シ官吏ノ證書ヲ受ケ歸着ノ日旅券ニ添へ警察所ニ差出ス可シ

十六年第六十二號公達(第九十五)ノ二項(參看)

第三十二條 監視ニ付スル者住居ナク及ヒ引取人ナキ時ハ其期限間懲治場ニ留置シ工業ヲ爲サシメ又ハ使役ニ供ス住居遠地ニ在テ歸着スル資力ナキ者亦同シ

第三十三條 懲治場ニ留置シタル者限内引取人ヲ得又ハ住居ノ地ニ歸着スル資力ヲ得タル時ハ其地ニ送致シテ殘期ノ監視ヲ執行セシム可シ

第三十四條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯シ初犯再犯共ニ監視ニ付スヘキ時又ハ監視ノ期限間再ヒ罪ヲ犯シ更ニ監視ニ付スヘキ時ハ並ニ主刑滿限ノ後前後ノ期限ヲ通算シテ監視ヲ執行ス可シ

第三十五條 罰金ヲ禁錮ニ換ヘタル者監視ニ付ス可キ時ハ其禁錮ノ日數ヲ監視ノ期限ニ算入ス可シ

第三十六條 監視ニ付セラレタル者其規則ヲ遵守シ悛改ノ狀アル時ハ警察官ヨリ其事實ヲ上申シ内務司法兩卿ノ命ヲ受ケテ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得

第三十七條 假ニ監視ヲ免セラレタル者住居ヲ轉移スル時ハ第二十七條第三及ヒ第二十九條ノ例ニ從フ可シ

第三章 假出獄及ヒ特別監視

第三十八條 假出獄ヲ許ス可キ者アル時ハ獄司ヨリ其犯人ノ行狀及ヒ刑名入獄ノ年月ヲ記載シ假ニ出獄ヲ許サレンコトヲ内務司法兩卿ニ上申シテ許可ヲ受ク可シ

第三十九條 假出獄ヲ許シタル時ハ獄司ヨリ其證票ヲ犯人ニ下附ス可シ

刑法第五十三條以下參看

十四年第八十一號達(第九

十五)監獄則ニ假出獄證票式ヲ示ス又十五年四月内務省番外達(同上六項)ニ同宣告狀書式ヲ掲ク

第四十條 假出獄證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 本人ノ屬籍氏名年齢住所罪名刑名及ヒ處刑ノ年月日
二 殘期何年何月何日間假出獄ヲ許ス事

三 假出獄中ハ特別監視ニ付ス可キ事

四 假出獄中更ニ重輕罪ヲ犯シタル時ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ヲ刑期ニ算入セサル事

第四十一條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者假出獄中自ラ財産ヲ治メ若クハ職業ヲ營マントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

第四十二條 假出獄ヲ許ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ出獄ノ日典獄ヨリ其證票ノ謄本ヲ添ヘ第二十二條ノ例ニ依リ犯人ヲ護送シ特別監視ヲ執行セシム可シ十五年第四十號布告ヲ以テ改

第四十三條 特別監視ニ付ナル者ハ第二十三條第二十四條第二十五條第二十六條第二十九條第三十一條ノ例ヲ適用ス

第四十四條 特別監視ニ付セラレタル者ハ其期間左ノ條件ヲ遵守ス可シ
一 毎週間一度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルコトヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病又ハ已ムコトヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルコト能ハサル時ハ其事由ヲ届出ツ可シ

二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルコトヲ許サス

三 事故アリテ住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ但他ノ府縣ニ轉移スルコトヲ許サス

四 往復一日程ヲ過クル地ニ旅行スルコトヲ許サス

第四十五條 特別監視ノ期間間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シ

第四十六條 假出獄ヲ許サレタル者刑期滿限ノ日ニ至レハ假出獄證票ヲ警察所ニ還納シ警察所ヨリ證票ヲ出シタル獄司ニ遞送ス可シ

主刑滿限ノ後監視ニ付ス可キ犯人ナル時ハ警察所ニ於テ第二章ノ例ニ從テ處分ス可シ

第四十七條 假出獄ヲ許ス可キ者住所ナク及ヒ引取人ナキ時ハ第三十二條ノ例ニ從ヒ懲治場ニ留置ス可シ

第四章 刑事裁判費用

第四十八條 豫審公判ニ付キ呼出シタル證人醫師鑑定人通辯人翻譯人ニ給與ス可キ日當旅費止宿料及ヒ第五十一條第五十二條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス

第四十九條 日當旅費及ヒ止宿料ハ左ノ制限ニ據リ各地方適宜其額ヲ定ム可シ
日當五十錢以下
旅費一里拾錢以下

九年第六十三號布告(第二)百八十八(一)ヲ以テ刑事證人ノ旅費日當ヲ定ム十五年司法

省丙第廿五號
(同一項)十七
年內務省第七
十八號(同一
項)同年第五
十七號(公達
同三項)參府

止宿料一宿貳拾五錢以下

住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ給シ及ヒ呼出ノ地ニ滯在中ハ日當并ニ止宿料ヲ給ス其三里未滿ノ地ニ在ル者ハ旅費止宿料ヲ給セス十六年第三拾九號布告ヲ以テ全條改正

第五十條 證人ノ日當旅費及ヒ止宿料ハ本人ノ請求アルニ非サレハ之ヲ給與セス

第五十一條 證人日稼ヲ以テ生業トスル者治罪法第百九十條ニ從ヒ償金ヲ要求スル時ハ旅費日當ノ外若干ノ償金ヲ給スルコトアル可シ

第五十二條 解剖舍密等ノ費用及ヒ數多ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類ハ日當ノ外別ニ之ヲ給與ス可シ

第五十三條 裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未タ之ヲ納メサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ其相續人ヨリ之ヲ徵收ス

第五章 賠償處分

第五十四條 贓物犯人ノ手ニ在ル時ハ直チニ被害者ニ還付スト雖モ若シ輾轉シテ他人ノ手ニ在ル時ハ被害者ノ請求ニ因リ還給セシムル者トス

第五十五條 贓物輾轉シテ他人ノ手ニ在ル時公商ニ由リ買取シタル物品ハ其公商若クハ被害者ヨリ買取者ニ原價ヲ償ハサレハ直チニ還給セシムルコトヲ得ス

若シ公商ニ由ラスシテ買取シタル物品ハ其還給ヲ拒ムコトヲ得ス但其買取者ハ賣者ニ對シ轉償ヲ求ムルコトヲ得

刑法第四十五
條以下參看

第五十六條 贓物ヲ受ケ又ハ典物トシテ受取タル者其贓物現在スル時ハ還給ヲ拒ムコトヲ得ス但典物トシテ受取タル者ハ典主ニ對シ轉償ヲ求ムルコトヲ得

第五十七條 贓物交換シテ現在スル時ハ公商ニ由ルト否トヲ區別シ第五十五條ノ例ニ從テ處分ス可シ

第五十八條 贓物已ニ費用シタル時又ハ識別ス可カラサル時又ハ其所在ノ知レサル時ハ損害ノ賠償ヲ請求スルコトヲ得

第五十九條 人ノ名譽若クハ殺傷ニ關シタル損害其他犯罪ノ爲メ現ニ生シタル損害ハ其賠償ヲ請求スルコトヲ得但失火ハ此限ニ在ラス

第六十條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ其犯罪ヲ審判スル刑事裁判所ニ請求スルコトヲ得若シ其審判已ニ終リタル後ハ民事裁判所ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第六十一條 刑事裁判所ニ於テ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求スル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其民事裁判所ニ請求スル者ハ民事訴訟ノ程式ニ從フ可シ

第六十二條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ本犯死スル時ハ其相續人ニ對シ之ヲ要求スルコトヲ得第六十三條 贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠償セサル時ハ被害者ヨリ更ニ民事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ請求スルコトヲ得

(二)新舊法ヲ比照スルノ例

刑法第二條第二項ニ依リ新舊法ヲ比照スルニハ左ノ例ニ從フヘシ

明治十四年十二月二十八日
布告第八拾壹號

看 刑法第三條參

第一條 新舊法比照左ノ如シ

一	新法 死刑	舊法 斬絞
二	無期徒刑	懲役終身
三	有期徒刑	
四	無期流刑	禁獄終身
五	有期流刑	
六	重懲役	懲役十年
七	輕懲役	懲役七年
八	重禁獄	禁獄十年
九	輕禁獄	禁獄七年
十	重禁錮	懲役十一年以上 五年以下 禁獄五年以上 禁錮十一年以下
十一	輕禁錮	懲役五年以上 禁獄五年以下 禁錮十一年以下
十二	罰金	料罰二圓以上 懲役十日以上 禁獄五日以上 禁錮五日以上
十三	拘留	懲役十日以上 禁獄五日以上 禁錮五日以上
十四	科料	料罰二圓未滿 懲役十日未滿 禁獄五日未滿 禁錮五日未滿
第二條	舊法ノ刑期新法主刑ノ刑期ニ在ル時ハ新法ニ從フ但舊法ノ刑期ニ過クルヲ	

得ス舊法ニ於テ懲役百日ニ該ル者新法ニ照シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ二月以上百日以下ノ重禁錮ニ處スルノ類

若シ舊法ノ刑期新法主刑ノ短期ニ等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ舊法ニ於テ禁獄三十日ニ該ル者新法ニ照ラシ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ禁獄三十日ニ處スルノ類

第三條 舊法新法ノ刑共ニ短期長期アル者ハ其短期ノ短キ者ニ從フ但其長期ノ短キ者ニ過ルヲ得ス舊法ニ於テ一年以上三年以下ノ懲役ニ該ル者新法ニ照ラシ三月以上四年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處スルノ類

若シ舊法新法ノ刑其短期等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ舊法ニ於テ一年以上三年以下ノ禁獄ニ該ル者新法ニ照ラシ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ禁獄ニ處スルノ類

第四條 舊法ノ贖罪收贖若クハ罰金科料ノ金額新法主刑ノ金額内ニ在ル時ハ新法ニ從フ但舊法ノ金額ニ過クルヲ得ス

第五條 舊法新法ノ罰金科料共ニ多數寡數アル者ハ其寡數ノ寡キ者ニ從フ但其多數ノ寡キ者ニ過クルヲ得ス

第六條 舊法ニ於テ單ニ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金ヲ附加ス可キ時ハ其罰金ヲ附加セス

第七條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金科料ニ該ル時ハ新法ニ從フ

舊法ニ於テ贖罪收贖若クハ罰金科料ニ該ル者新法ニ照體シ刑ニ該ル時ハ舊法ニ從フ

第八條 舊法ニ從ヒ贖罪收贖ニ處シタル者其金額ヲ延期限内ニ納完スル能ハサル時ハ一圓ヲ一日ニ折算シ輕禁錮又ハ拘留ニ換フ但一圓未滿ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第九條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ重罪ノ刑ニ處スル時ハ新法ノ附加刑ヲ適用

セス但除族追奪位記沒收ノ類ハ舊法ニ從フ

第十條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ禁錮ノ刑ニ處スル時ハ監視ヲ附加セス

第十一條 華士族ノ犯罪新法ニ於テ輕罪ニ該ル者舊法ニ從ヒ處斷スル時ハ其族ヲ除セ

第十二條 新法ト舊法トヲ比照スルニハ各其本法ニ照シ加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲

第十三條 舊法ニ於テ棒鎖ニ該ル者ハ仍ホ棒鎖ニ處ス
右奉 勅旨布告候事

〔三〕憲兵卒ノ職務ニ關スル犯罪處斷例

明治十五年十二月二十八日
布告第七拾三號

憲兵卒其職務ニ關シ罪ヲ犯シタル時ハ官吏犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

憲兵卒ノ職務ニ對シ罪ヲ犯シタル者ハ官吏ニ對スル犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス
右奉 勅旨布告候事

〔四〕陸海軍法衙ニ於テ罰金科料ニ處スル時換刑方

明治十六年十一月十日
布告第三拾七號

陸海軍法衙ニ於テ罰金科料ニ處スル時ハ直ニ輕禁錮拘留ニ換フルコトヲ得
右奉 勅旨布告候事

〔五〕偽證又ハ贋造文書沒收方等

明治十二年七月二十九日
司法省達丙第拾號大審院諸裁判所檢察檢事アヲサル府縣

凡ソ偽證或ハ公私文書ノ贋造ニ係ルヲ發覺シ刑事裁判ヲ經シ上ハ其文書ハ素ヨリ其裁判所ニ没入シ置クヘシト雖正成

刑法第三百二十九條及第二百七十六條參看

刑法第二十七條參看

刑法第四十三條參看

ハ其文書ノ證憑カキヲ以テ他ニ詞訟ヲ起スヘキ途方ヲ失ヒ冤枉者ナキヲ保シ難シ故ニ其文書ヲ没入スルニ當リ其文書ノ寫ヲ請求スル者ニハ必ス之ヲ與フヘシ
但裁判所ニ於テ該書類ニ消印ヲ捺捺スル如キノ慣習ハ廢止トス

各裁判所ニ於テハ前條文書ノ寫ヲ以テ取出ルモノアラハ尋常ノ證據ト見ルハ勿論ト雖若他ノ裁判ニ在リテハ一應其没入セシ所ノ裁判所ヘ照會シテ其没入セシハ果シテ信ナルヤヲ認メシ上裁判ヲ與フヘシ
右相達候事

〔六〕各地方便宜ニ從ヒ違警罪目ヲ定メ發行シタルキ主務省ニ届出方

明治十四年八月三十一日
第七拾七號達警視廳府縣東

京府ヲ
除ク)

刑法第四百三十條ニ依リ各地方ノ便宜ニ從ヒ違警罪目ヲ定メ發行シタルトキハ之ヲ主務ノ省ヘ届出ヘシ此旨相達候事

〔七〕死刑者犯由牌揭示式ヲ改正ス

明治十五年二月六日
司法省達丙第三號裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

處刑ノ者犯由揭示ノ儀ニ付明治七年^五當省第九號ヲ以テ相達置候旨モ有之候處今般新刑法實施ニ付テハ明治十四年二月第六拾七號公布刑法附則第八條ニ據リ自今左ノ通改正候條此旨相達候事

一 死刑ノ執行アリタルトキハ重罪裁判所書記ニ於テ左ノ雛形ニ據リ公告案ヲ製シ三日間該廳門前ニ揭示シ且別ニ宣告書ノ謄本ヲ製シ犯罪ノ地并犯人居住ノ地方(東京ハ)府縣ヘ速ニ送達スヘシ

一 警視廳府縣ニ於テハ重罪裁判所書記ヨリ死刑宣告書ノ謄本送達アレハ左ノ雛形ニ據リ犯罪ノ地并犯人居住ノ地何レモ三日間通衢ニ榜示公告スヘシ

死刑宣告榜示公告雛形

犯罪ノ地又ハ犯人居住ノ地榜示



月二十	月一十	月十	月九	月八	月七	月六	月五	月四	月三	月二	月一	初年 二年 三年 四年 五年	認 印 表
											何日出願 印 疾 病 不 二 參 付 中 旅 行		
												前十五日以後十六日以前	
												前十五日以後十六日以前	
												前十五日以後十六日以前	
												前十五日以後十六日以前	
												前十五日以後十六日以前	
												前十五日以後十六日以前	
												前十五日以後十六日以前	
												前十五日以後十六日以前	

第十七年十一月
本表ヲ以テ
改正ス

旅券

刑名刑期
監視何年何月
罪質犯數

何府何區何町何番地在
又ハ寄附何某
子孫並女同居
何年何月何日
何年何月何日
何年何月何日
何年何月何日
何年何月生
何年何月何年何月

族籍
何某

一此者何府縣何區郡何町村何某方へ旅行スル
一ヲ許可ス

一何年何月何日本地ヲ發途ス
一先方ノ地トキハ其旨ヲ記スニ滞在スル日數何日
間トス

一何年何月何日販宅スルモノトス
先方ノ地トキハ其旨ヲ記スニ到レハ此旅券ヲ直ニ其
地ノ警察署ニ出シテ官吏ノ認印ヲ受クヘキ事
旅行中天災又ハ疾病等ニヨリ已ムコトヲ得スシテ
淹滞シタルキハ其事由ヲ其地ノ警察署ニ具申シ
官吏ノ證書ヲ請ヒ歸着シタルキ若シクハ先方ノ
地ニ到レハ此旅券ニ副ヘ速ニ之ヲ其警察署ニ示
スヘキ事

歸着シタルキハ此旅券ヲ直ニ還納スヘキ事
右刑法附則第三十條ニ依リ下付スル者也

署
明治何年何月何日
何警察署
警察使何某印

府縣ニテハ
何府縣何警察署
警部何某印

〔九〕軍人制服ヲ着用乗馬シタル者ハ刑法第四百貳拾七條第三項ノ限ニ無之明治十五年四月二十九日

大政官達第二十二號内務省陸軍省海軍省司法省警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

刑法第四百二十七條第三項夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者ト有之候處軍人制服ヲ着用乗馬シタル者ハ右ノ限ニ無之候條此旨相達候事

〔十〕犯罪ノ用ニ供シ及犯罪ニ因テ得タル物件所有主ニ還付方明治十五年五月十一日 司法省達丙第貳拾號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

府ヲ除ク)

刑法第四十三條參看

犯罪ノ用ニ供シタル物件及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ本案ノ裁判ヲ言渡ス迄ニ所有主ヲ發見セサル時ハ刑法第四十三條第四十四條ニ從ヒ其本案ノ裁判ト共ニ沒收ノ言渡ヲ爲スヘシト雖モ右ノ物件ハ之ヲ其裁判所所在ノ地及ヒ犯罪ノ地ニ公告シ一年間ヨリ起算スニ所有主ヲ發見シタル時ハ檢察官ヨリ直ニ之ヲ還付スヘシ此旨爲心得相達候事
但檢察官ニ於テ保存ス可カラサル物件又ハ保存スルニ付費用ヲ要スヘキ者ト思料スル時ハ公賣ノ處分ヲ爲シタル上其代金ヲ保存シ置クヘシ

〔十一〕犯罪ノ用ニ供シ又ハ犯罪ニ因リ得タル物件其所有主ヘ假ニ下渡方明治十五年六月廿六日 司法省達丙第貳拾四號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)東京憲兵本部

視廳府縣(東京府ヲ除ク)東京憲兵本部

犯罪ノ用ニ供シ又ハ犯罪ニ因リ得タル物件ハ轉讓シテ他人ノ手ニ在リ及ヒ沒收スヘキモノ若クハ證據ノ爲メ官ニ保存シ置クヲ必要トスルモノヲ除クノ外ハ裁判官檢察官司法警察官ニ於テ實際ノ便宜ニ因リ裁判言渡アルマテ其所有主ヘ假ニ之ヲ下渡シ置クヲ得ヘシ此旨爲心得相達候事

〔十二〕陸軍上等卒ニシテ刑法特ニ官吏ノ爲メ定メタル罪ヲ犯シタル時處斷方明治十五年八月二十一日 司法省達丁第拾四拾壹號大審院裁判所

司法省達丁第拾四拾壹號大審院裁判所

今般大政官ヨリ左ノ通御達有之候條此旨相達候事

同上

刑法第二百七十六條以下參看

看

大政官達 明治十五年八月十五日
陸軍上等卒ニシテ刑法特ニ官吏ノ爲メ定メタル罪ヲ犯シタル時ハ都テ官吏ニ準シ候儀ト心得此旨相達候事

〔十三〕罰金ヲ禁錮ニ換フルノ手續明治十七年十月十日 司法省達丁第五拾三號大審院裁判所

罰金ヲ禁錮ニ換フル儀ニ付神奈川重罪裁判所判事荒木博臣ヨリ別紙甲號ノ通出候ニ付乙號ノ通及指令候條爲心得此旨相達候事

(別紙)

甲號

罰金ヲ禁錮ニ換フル義ニ付伺

重罪裁判ニテ罰金ノ言渡ヲ受ケタル者期限内ニ納完セサル時ハ刑法第廿七條ニ照シ輕禁錮ニ換フヘキ處重罪裁判所開廳後ハ始審裁判所ニ於テ右禁錮ニ換フル事ヲ檢察官ノ求ニ因リ其始審裁判所ノ所長判事ニテ之ヲ命シ候條致度右ハ差掛テ開キタルト
候事件有之候間至急御指令相成度此段相伺候也

神奈川重罪裁判所

判事荒木博臣印

明治十五年九月十八日

司法卿大木喬任殿

乙號

伺ノ通

明治十五年九月廿六日

〔十四〕監視ニ附セラレタル者他ノ地方旅行ノ片取計方明治十七年三月二十六日 内務省達乙第拾九號警視廳府縣東京府ヲ除ク

監視ニ付セラレタル者他ノ地方ニ旅行スルハ必ス監視票ヲ携帶セシメ其滯留數日ニ涉ル者ハ滯留地ノ警察署ニ到リ謹慎ヲ表シ官吏ノ認印ヲ受ケシム可シ此旨相達候事

十四年第八十一號公達(第七十五)第廿七條參看

但官吏ノ認印ハ監視票ノ裏面旅行中欄内ニ捺印スヘシ

〔十五〕監視假免假出獄上申方 明治十七年七月九日
内務司法兩省達シ第三拾二號監視廳府縣(東京府ヲ除ク)

刑法附則ニ從ヒ監視假免ハ警察官假出獄ハ典獄ヨリ其事實行具シ直ニ上申致來候處自今其所屬長官ヲ經由スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

● 伺指令

● 刑期計算方ノ儀ニ付伺指令 明治十六年六月二十一日
京都府伺

茲ニ一人ノ未決監ニ收監セラレ審理中餘罪發シテ又收監狀ヲ發セラル、モノアリ而シテ第一ノ所爲ニ對シ刑ノ言渡ヲナシ數日ヲ經テ第二ノ所爲ニ對シ放免ノ言渡ヲナシ又ハ刑ノ言渡シヲナスモノアリ此場合ニ於テハ未決監ニ收監中ト雖モ第一ノ刑期ハ刑法第五十一條ノ通計算シ可然哉前罪果シテ伺ノ通ナルハ已決囚ニシテ餘罪發シテ未決監ニ收監セラル、ハ其餘罪ノ罪トナルト否トヲ論セス其日數ハ刑期ニ算入スル義ト心得可然哉差係リタル義有之候條至急伺分ノ御指令相成度此段相伺候也

司法省指令 明治十六年六月三十日

伺ノ通

● 囚人放免時日過誤之者處分之儀ニ付伺指令 明治十六年六月二十八日
青森縣伺

刑法第二百七十九條ニ司獄官吏程式規則ヲ遵守セスシテ囚人ヲ監禁シ若クハ囚人ヲ出獄セシムヘキノ時ニ至リ之ヲ放免セサル者ハ云々トアルハ即チ故意擅行ニ出ツルモノニ限ルハ勿論ナリト雖モ若シ故意擅行ニ非スシテ放免スヘキ時日ヲ誤算スル者ハ本廳長官ニ於テ懲戒例ニ據リ處分スルニ止マリ刑法ニ於テ論スルノ限リニアラサル儀ト心得可然哉此段相伺候也

司法省指令 明治十六年七月十三日

伺ノ通

● 監視執行疑義ノ伺指令 明治十六年七月四日
長野縣伺

刑法附則第二章第三拾貳條ニ據リ監獄中ノ別房ニ留置シタル監視人ハ同章第二拾六條第二拾七條等ニ據リ警察者ヨリ監視票ヲ下附シ總テ監視執行上ニ就テハ警察者ノ管理ニ屬セシムル儀ニ候哉又ハ常ニ司獄官吏ニ於テ監督致シ候得者其儀ヲ爲スニ及ハサルモノニ候哉若シ監獄中ノ別房ニ留置シ唯ニ司獄官吏ニ於テ之カ監督ヲ爲シ警察者ノ管理ニ屬セサル場合ニ於テ逃走シタル監視人ハ監視規則違犯ノ者ト認メ可然哉右相伺候也

司法省指令 明治十六年七月廿四日

伺ノ通在監中ハ司獄官吏ニ於テ監督ス可キ者トス但逃走シタル時ハ監視規則違犯者トシテ罰スル儀ト心得可シ

● 人身ヲ略取誘拐シタル者之儀ニ付伺指令 明治十六年七月九日
熊本縣伺

二十歳以下ノ者ヲ略取誘拐シタル者處分方ハ刑法第三百四十一條以下ニ明瞭ナリト雖モ二十歳以上ノ者ヲ略取誘拐シタル者ヲ罰スルノ明文ナシ右ハ已ニ知力備ハルヲ以テ欺罔又ハ略取セラル、モ被害者ノ自爲ト同視シテ不問ニ置カラル、所以ナラン歟然リト雖モ二十歳以上ニシテ或ハ不腦力ニシテ欺罔以テ誘拐セラル、ナキ能ハス儘ヘハ白痴ノ者ヲ誘拐シテ力役又ハ賣淫等ノ爲ニ他人ヘ賣ルノ類如斯ハ其歳二十歳以上ト雖モ不腦力ノ點ヨリ見ルハ長幼ノ別ヲ以テ論シ得ケル者ノ如シト雖モ其年齡明記有之上ハ刑法第三百四十一條以下ノ各條ニ比擬處分スルヲ得サル儀ト心得可然哉聊疑議ヲ生候條至急伺分ノ御指令相成度此段相伺候也

司法省指令 明治十六年七月二十四日

伺ノ通二十歳以上ノ者ニ付テハ刑法ノ間フ所ニ非ス

● 生年ヲ知テ生月ヲ知ラサル被告人年齡計算方ノ伺指令 明治十六年七月十三日
海軍省伺

生年ヲ知テ生月ヲ知ラサル被告人年齡計算方ノ儀舊法ニ在テハ改定律例第九十三條ニ據リ生年ヲ以テ半年ニ計算致候得共新法ニハ右等ノ明文無之且ツ生月ヲ知ラサル者ハ其ノ六月前ニ出生セシヤ將タ七月以後ノ出生ナルヤモ知ル

ヘカラサルニ付舊法ノ如キ計算法ニシテハ被告人ニ於テ大ニ幸不幸ヲ來シ不都合ト被存候處地方注衛ニ於テハ生月ヲ知ラサル者ハ十二月ヲ以テ生月ト爲シ計算致候由右ハ算定方穩當哉ト存候條當軍衛ニ於テモ生年ヲ知テ生月ヲ知ラサル者年齢ノ儀ハ十二月ヲ以生月ト定メ計算致度此段相伺候也

大政官指令 明治十六年八月二十二日

伺之通

●舊法受刑期限中新法實施後重輕罪ヲ犯セシ者假出獄之儀ニ付伺指令 明治十六年八月二十三日

宮城縣伺

刑法第五十七條ニ曰刑期限内更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許サストアリ就テハ舊法ニ處セラレ該刑期中新法實施後ニ至リ重罪輕罪ヲ犯セシ者モ亦假出獄ヲ許ルサハ儀ニ可有之哉將ク許スニ得ヘキ哉若シ是レヲ許スモノトセハ其刑期四分ノ三計算法ノ如キハ舊刑殘日數ト新刑ニ處セラレタル日數トヲ合算スル儀ト相心得可然哉此段相伺候也

司法省指令 明治十六年九月八日

伺之趣前段見込之通

●刑期計算方ノ伺指令 明治十六年九月十四日 石川縣伺

爰ニ詐偽取財之罪人アリ其所在不明ニ付甲地裁判所ニ於テ八月四日缺席ノ儘重禁錮三ヶ月罰金四圓監視六月ヲ言渡サレタリ然ルニ本犯ハ乙地ニ於テ毆擊創傷ノ事件ニ付七月廿五日同地監獄署ニ勾禁セラレタル事甲地裁判所ヘ相知レ八月十七日右欠席裁判言渡書ヲ乙地ヘ送致シタルニヨリ即日本犯ニ告示シタリ然處同月廿七日乙地裁判所ニ於テ毆擊創傷事件ト前罪詐偽取財ト二罪俱發一ノ重二間ヒ重禁錮二年ノ刑ニ處セラレタリ右刑期計算方後判二罪ヲ併セタル處分ナルヲ以テ前判ニ不關係判言渡ノ日ヨリ起算シ後判ノ刑ニ併テ重禁錮二年ヲ執行候儀ニ候哉若シ候儀有之候條至急御指揮被成下度此段相伺候也

司法省指令 明治十六年九月二十六日

後段伺之通

●監視人取扱方ノ伺指令 明治十六年九月十三日 京都府伺

甲地在籍ノ者乙地ニ於テ罪ヲ犯シ主刑滿期ノ上本人ノ申立ニ寄リ在籍地ニ於テ監視執行ノ爲メ乙地警察署ヨリ甲地警察署ヘ本犯送致セシト甲地警察署ハ監視執行ノ爲メ其住所ヲ調フルニ本犯ハ丙某附籍ナリシカ其丙某ハ會テ失踪シ唯戸籍ノミ存在スルモ本犯在居スヘキ家屋及ヒ引取人モ無之亦亦貧ニシテ別ニ住所ヲ定ムル能ハス如此場合ニ於テハ在籍則甲地ノ監獄署ヘ引渡全署ニ於テ刑法附則第三十二條ノ處分ヲ可爲儀ト相心得可然哉將乙地則主刑執行地ノ監獄署ヘ送戻シ同署ニ於テ同條ノ處分ヲ爲スヘキ儀ニ可有之哉目下差掛リ候事件有之候間至急何分ノ御指揮有之度此段相伺候也

司法省指令 明治十六年九月二十六日

伺ノ趣前段見解ノ通

●死刑之宣告ヲ受ケタル者犯由揭示ノ伺指令 明治十六年九月十二日 茨城縣伺

第一條 茲ニ死刑ノ宣告ヲ受ケタル犯人アランニ其裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲シ該上告棄却セラレタル後死刑執行シタル時犯由ヲ榜示公告スルニハ原裁判言渡書ノ全文ヲ掲ケ(上告ニ對スル判文ハ公告セス)明治十五年御省丙第三號御達ニ依リ揭示方取扱可然哉

第二條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル者前條ノ如ク上告ヲ爲シ其上告ニ付キ原裁判言渡ノ幾分ヲ破毀セラレ死刑ヲ執行シタル時ハ原裁判言渡書及ヒ大審院判決書ノ全文ヲ掲ケ公告スル儀ト相心得可然哉

右ハ死刑ノ宣告ヲ受ケタル後上告及ヒ哀訴ヲ爲シ其上訴總テ棄却セラレ已ニ裁判確定シタル者有之ニ付刑ノ執行ヲ爲シタル時ハ取扱方差置候條至急御指揮有之度此段相伺候也

司法省指令 明治十六年九月十八日

書面伺之通

●犯罪ニ關スル物件處分ノ伺指令 明治十六年九月八日 栃木縣伺

置捨品中贓物其他犯罪ノ證據トスヘキ物件アリ警察官ヨリ之ヲ檢事ニ送致セシニ犯人未ク捕ニ就カスシテ公訴期滿免除ノ期限ヲ經過シタルハ其物品ハ行政官ノ處分ニ屬スルモノニ候哉果シテ行政官ノ處分ニ屬スルモノトセハ前顯ノ物品ハ勿論犯罪捜査ノ爲メ檢事ニ於テ直チニ勾收シタル物件中事主不分明ナルモノニシテ期滿免除ノ期限ヲ過キタルモノモ檢事ヨリ警察官ヘ引渡シ相成ヘキ筋ニ之レアルヘキ哉此段相伺候條至急御指揮ヲ仰キ候也

司法省指令 明治十六年九月十九日

伺之通

●刑期計算方ノ請訓 明治十六年九月二十六日 京都府裁判所檢事請訓

第一條 刑法第四十九條ニ前一年ト稱スルハ曆ニ從フトアリ右八平年ハ三百六十五日閏年ハ三百六十六日ヲ以テ計算スル儀ニ有之候哉果シテ然ラハ一年ノ刑ヲ言渡サレタル者平年ト閏年ト岐リタル時ハ受刑ノ年ノ日數ニ從テ可キヤ滿限ノ年ノ日數ニ從テ可キ哉ノ疑團ヲ能ハス何トナレハ受刑ノ年ノ日數ニ從テハ例セハ平年三月五日ニ一年ノ刑ヲ言渡サレ翌年閏年ナレハ翌年三月三日滿限トナリ閏年三月五日言渡サレタル時ハ翌年三月五日滿限六日ニ放免スヘキモノニ相成又滿限ノ年ノ日數ニ從フトキハ平年二月十日ニ一年ノ刑ヲ言渡サレ翌年閏年ナル時ハ翌年二月十日滿限十一日放免スヘキモノニシテ初年閏年ナレハ翌年二月八日滿限ト相成刑期區々ニ涉リ不穩當ノ様ニ有之抑右曆ニ從フトハ十二ヶ月ヲ以テ計算スル儀ニテ平年閏年ヲ論セス當年三月五日ニ一年ノ刑ヲ言渡サレタル者ハ翌年三月四日ヲ以テ滿限ト相心得可然哉

第二條 重禁錮一年ノ刑ヲ受ケタル者六十日役過シテ逃走シ捕ニ就キタル時ハ一年ノ日數三百六十五日ノ内ヨリ右六十日ヲ扣除シ殘ル三百五日ヲ更ニ役セシムヘキヤ將タ己ニ役過セシ日數二月ナルヲ以テ一年ノ日數十二ヶ月ノ内ニテ二月ヲ扣除シ殘ル十ヶ月ヲ更ニ役セシメ可然哉

司法省内訓 明治十六年十月十六日

請訓ノ趣ハ第一條第二條共後段見込ノ通

●刑法附則ノ儀ニ付疑義ノ伺指令 明治十六年十月十一日 愛媛縣伺

茲ニ主刑滿期后監視ニ附セラル、者アリ假令ハ甲警察署ニ於テ旅券ヲ附與シ丙警察署所轄即チ犯人居住地ナルヲ以テ歸路ノ際不斗病ニ罹リ或ハ正當ノ事故アリ又ハ途次車ニ乘シ又ハ宿料等ニシ警察署所轄内ニテ滞在ノ爲メ旅金ヲ消費シ進退如何トモスル能ハス終ニ出テ救助ヲ請フアルハ刑法附則第三十二條ニ準據シ監視ノ別房ニ留置スルノ處分ヲ爲スヘキモノト思考候得共抑該條ニ於ケル單ニ監視署ヨリ送致ヲ受タル節其居住地ヘ歸着スル資金ナキ場合ニ於テ處分スルノ法則ニテ有之候得ハ聊カ疑義ニ涉リ候條如何取扱ヒ可然哉

若シ果シテ前條ノ如ク附則第三十二條ニ準據スヘキモノトスルハ甲警察署ヨリ丙警察署則チ居住地ヘ送付セシ儀類取扱ノ手續ハ如何取計ヒ可然哉

前條ノ場合ニ於テ若シ監視署無之地ナレハ附則第三十二條ニ準據スルヲ得ス右ハ如何處分シ可然哉

右ハ差掛リタル儀モ有之候條至急何分ノ御指揮相成度此段相伺候也

司法省指令 明治十六年十月二十九日

伺之趣刑法附則第三十二條ニ準據シテ其滞在地監獄ノ別房ニ留置シ其種類ハ居住地ノ警察署ニ其事由ヲ報知シテ送送ヲ求ム可ク若シ其滞在地ニ監獄署アラサル時ハ最近ノ監獄署ニ送致シテ同斷ノ手續ヲ爲ス可キモノトス

●刑期計算方ノ伺指令 明治十六年十月廿六日 京都府伺

本年九月廿六日付京都府裁判所檢事請訓其第二條ニ重禁錮一年ノ刑ヲ受タルモノ六十日經過シテ逃走シ云々ニ對シ本月十三日付請訓ノ趣ハ第一條第二條トモ後段見込ノ通ト内訓有之候處當府ニ於テハ刑法第四十九條ニ據リ斯ノ如キモノハ一年ノ内ヨリ六十日ヲ扣除シ殘ル三百五日ヲ執行致來候處右内訓ノ通ニテハ一年ノ刑ヲ受タルモノ六十日經過シテ逃走スル片ハ其逃走スルカ爲メニ已ニ確定シタル裁判ノ刑期五日ヲ減縮スル義ニテ稍不穩當ニ被考候如

何相心得可然哉

司法省指令 明治十六年十一月八日

伺ノ趣曆ニ從フトハ一年ヲ三百六十五日トスルニ非スシテ曆ノ年月日ニ從ヒ計算スルヲ云フ即チ年ノ平閏ニ拘ハラス禁錮一年ニ處セラレタル者本年十一月一日ヨリ執行シタルトキハ明年十一月一日ニ之ヲ放免ス若シ明年一月二日ニ逃走シ同五月一日ニ捕ニ就キタルトキハ明後年四月三十日迄ヲ一年ト假定シ其内ヨリ前ニ執行ヲ經タル二ヶ月一日ヲ扣除シ平年ナルトキハ明後年二月廿七日ヲ以テ滿期トス依テ京都始審裁判所檢事會根誠藏(前訓示)通心得ヘシ

●刑期計算ノ伺指令 明治十六年十一月一日

刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シタル後檢察官ヨリモ又附帶ノ上告ヲナシタリ然ニ大審院於テハ二者ノ上告棄却シタリ右刑期ハ原裁判言渡ノ日ヨリ起算シ可然哉法律ニ正條ナキヲ以テ此段相伺候也

司法省指令 明治十六年十一月十日

伺ノ趣後判宣告ノ日ヨリ起算スヘシ但上告期限内檢察官ヨリ上告シタルモノニ係ル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算スル儀ト心得ヘシ

●刑法第二百七十七條疑義ニ付請訓 十六年十月五日

根室輕罪裁判所檢事請訓
刑法第二百七十七條身體財產ヲ妨害スルノ犯人アルニ當リ豫審判事檢察官更其報告ヲ受ケテ速ニ保護ノ處分ヲ爲サル者ハ云々トアリ右ハ公務ノ餘暇則登樓ノ如キ場合ト雖モ該報告ヲ受ケタル以上ハ無論職權ヲ以テ其保護ノ處分ヲ爲ス可キモノト心得可然ヤ將タ公務ノ餘暇ナルヲ以テ治罪法第百五條ニ依テ通常凡人ノ資格ヲ以テ其處分ヲ爲ス可キ歟

第二條右第二百七十七條ニハ治罪法第六十條警視廳警部區長郡長治安判事警部ノ在ラサル地ノ戶長等モ該條ヘ含蓄シ居ル無論ノ儀ト心得可然哉

司法省内訓 明治十六年十月三十日

請訓ノ趣左ノ通心得ヘシ

第一條 職務外ノ時間ト雖モ相當ノ處分ヲ爲スヲ得但之ヲ爲サ、ルモ刑法ノ間フ所ニ非ス

第二條 見解ノ通

●贓物處分方ノ請訓 明治十六年九月十七日

於三次治安裁判所原爲輕罪裁判所檢事請訓
刑法第四十三條同第四十八條米項ノ旨趣ハ渾テ現ニ得ル贓ヲ指稱スルモノト了解罷在候處客年七月當裁判所ニ於テ贓金ヲ以買取シタル物品ヲ沒收セリ然ルニ當時檢事代理ハ之ヲ不當トシ被害者ヘ下付スヘキ趣意ヲ上告ス大審院ハ本年七月上告ノ如ク第四十八條ニ據リ裁決アリ右ハ凡ソ裁判例トナルヲ以テ之ニ倣フハ勿論ト雖モ大疑團不少抑モ金ハ品ニ變化スルモ猶間接ノ贓トシ品ハ金ト同視スルモノトモトモ何度其種質ヲ變スルモ同ク源贓ト同視セサルヲ得ン爰ニ一例ヲ舉ンニ農甲吉商乙吉カ賣品タル反物數拾ヲ盜ミ以農用牛馬數頭ヲ所有セハ之ヲ押收シテ乙吉ニ還付スヘシ然ルニ被害者タルモノ、常情ハ素ヨリ源贓ノ返還若クハ相當ノ要償ニ可有之右牛馬ヲ還付セラル、如キハ迷惑僅少ナラサレハ之ヲ辭退センニ判官ハ已ニ押收還付ノ宣告ヲナシタルハ如何モスヘカラス其他言ヘカラサル障害アルニ至ラン右ハ法理上甚タ了解致候間何分ノ御訓示ヲ仰キ候也

司法省内訓 明治十六年十一月二日

請訓ノ趣贓金ヲ以テ買取シタル物品ハ勿論贓物ト交換シタル物品ト雖モ仍ホ贓物トシテ處分ス可キモノトス但還付ノ處分ヲ受クルモ被害者ニ於テ其物品ヲ領收セスシテ別ニ損害ノ賠償ヲ求ムルハ其隨意ナリトス此旨及内訓候也

●罪ヲ免カル、爲メ人ヲ傷シ死ニ致シタル者處分方ノ伺指令 明治十六年十一月五日

大分輕罪裁判所檢事請訓
茲ニ庖丁ヲ携帶シ人ノ邸内ニ設ケアル米搗水車場ヘ忍入り米ヲ密取セントスル際看守者ニ覺知セラレ看守者ヨリ捕リ押ヘラレタルニ依リ免カル、爲メ携帶シ居ル庖丁ヲ以テ看守者ノ兩手ニ疵ヲ負ハセ終ニ死ニ致シタル者アリ右ハ

故殺スルノ意アツテ傷ヲ負ハセタルニ非ス捕リ押ヘラレタル故免カル、爲メ傷ヲ負ハセタリト陳述スルモ之ヲ證明スル能ハサル以上ハ故殺シタル者トシ刑法第二百九十六條ニ間フヘキモノナルヤ將タ同法第三百三條ニ間フヘキモノナルヤ此段御内訓候也

司法省指令 明治十六年十一月五日

犯罪ヲ免カル、爲メ人ヲ傷シ死ニ致シタル者處分ノ件請訓ノ趣右ハ故殺ノ證憑ハ原告官ヨリ之ヲ舉示セサル可カラス若シ其證憑トキハハ刑法第三百三條ニ依リ處分ス可キ者トス此旨及内訓候也

●官林看守者其職務ニ付テノ犯罪處分等ノ儀ニ付伺指令 明治十六年十一月二十日 長崎縣伺

第一條 雇員犯罪處分ノ義ニ付本年十月第四八二五號ヲ以テ御内訓ノ次第有之右ハ戶長役場筆生ノミナラス一般雇員ト雖モ官吏ノ行フヘキ職務ニ付テノ犯罪及ヒ他人ノ其職務ニ對シタル犯罪ハ總テ官吏ト同ク處分スヘキモノニ可有之依テハ官林看守人ノ如キモ其山林ノ竹木ヲ竊取シタルハ刑法第二百八十九條ニ依リ處分シ又其職務執行中即チ官林監視ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ看守人ニ抗拒シ或ハ其目前ニ於テ侮辱シタル者ハ刑法第三章第二節ノ各條ニ依リ處分スヘキ哉

第二條 一般雇員並官林看守人等官吏ノ職務 看守人ハ官林監視ニ際シ行フニ因リ重罪輕罪アルヲ認知又ハ思料シタル時之ヲ告發スルニハ治罪法第九十六條ニ依ルヘキモノニ候哉

司法省指令 明治十六年十二月二十日

第一條 官林監視ノ如キハ官吏ノ行フヘキ職務ト爲サヘルニ依リ看守人職務ニ付テノ犯罪及職務ニ對スル犯罪ハ官吏ト同視シテ處分スルヲ得ス

第二條 一般ノ雇員ハ官吏ノ職務ヲ行フ場合ニ限リ伺之通其他職務ヲ行フニ際シ重罪輕罪アルヲ發見セシ時ハ當然告發ノ責任ハアルヘシト雖モ治罪法第九十六條ニ依ルヘキ者ニ非ス山林監視人ニ付テモ亦同シ

●刑期計算方ノ伺指令 明治十六年十一月十二日 茨城縣伺

刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲナシ上告者ノ主意相立サルモ大審院於テ原裁判ノ幾分ヲ破棄セラレタル節ハ原裁判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算スヘキ儀トハ思料候得共其判決ニ服セス哀訴ヲナシ棄却セラレタル節モ亦原裁判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算シ可然哉此段相伺候也

司法省指令 明治十六年十二月廿一日

伺之趣原裁判宣告ノ日ヨリ起算ス可シト雖モ大審院ニ於テ破毀ノ言渡アリタル翌日ヨリ哀訴棄却ノ言渡迄ノ日數ハ除去スル儀ト心得可シ

●刑名宣告書謄本ノ儀ニ付伺指令 明治十六年十二月十一日 福岡縣伺

刑法附則第二十三條犯人ヲ警察署ニ送送スルハ刑名宣告書ノ謄本ヲ附スヘシトアルヲ以テ是迄裁判所ヨリ送附シタル刑名宣告書ノ謄本ハ監獄署ニ止メ置キ之ヲ謄寫シテ警察署ヘ差回シ來リ候所監視ハ監獄署ニ於テ謄寫シタル宣告書ヲ以執行スルハ穩當ナラサル様思考シ少シク疑惑ヲ生シ相伺候條至急伺分ノ仰御指揮候也

司法省指令 明治十六年十二月廿八日

伺ノ趣監視執行ハ裁判所ヨリ送致シタル刑名宣告書ノ謄本ヲ以テ之ヲ爲ス可シ但監獄署ニ於テハ之ヲ謄寫シテ止メ置ク儀ト心得可シ

●強盜共犯者ヲ傷シタル者處分方ノ請訓 明治十六年二月二十日 神戶始審裁判所檢事請訓

茲ニ甲乙丙者共謀シテ丁者ノ家ニ侵入シ脅迫シテ財ヲ奪ヒ去ラントスルニ際シ追捕者ト誤認シ甲者丙者ヲ傷シタル而シテ斯ク人ヲ傷スルノ原因ヲ探究スルニ若シ追捕スルモノアル時ハ殺死セントスルヤ既ニ犯前互ニ共謀シタルモノナリ

此場合ニ於テハ甲乙丙者共ニ強盜人ヲ傷スルモノトシ論ス可キヤ又ハ甲乙者ノミ強盜人ヲ傷スルノ共犯トシ負傷シタル丙者ハ單ニ強盜罪ヲ以テ論シ可然哉又ハ共犯ナルモノハ合體一人ト見做スヲ以テ單ニ自己ノ身体ニ傷ケ候モノト同一ナルヲ以テ甲乙丙者共單ニ強盜罪ノミ論シ可然哉處分上聊疑義ヲ生シ候間仰内訓候條至急伺分ノ御指揮有之

度候也

司法省内訓 明治十七年一月八日

請訓ノ趣中段見解ノ通此旨及内訓候也

●監視之儀ニ付伺指令 明治十六年九月廿五日 滋賀縣伺

通常監視ニ付セラレタル者ニシテ他管下へ旅行且ツ滞在スル節取締方之儀ハ刑法附則第二章中ニ明文モアリ且本縣ヨリ同定置候次第モ有之候得共居住地管内旅行ニ就テハ別ニ取締方法無之然ルニ力役等ヲ以テ糊口ヲ爲スモノ、如キハ其業体ノ都合ニ依任リ居地町村最寄ニ於テ其職業ニ従事スルヲ得ス數里外ナル他ノ警察署下へ數十日出稼スルモノアリ右等ノ者ニ至テハ毎月兩度居住地ノ所轄警察署へ謹慎ヲ表スル爲メ出頭スルハ時日ヲ費シ糊口上ニ困難スル趣ヲ以テ出稼地ノ所轄警察署又ハ分署へ出頭謹慎ヲ表シ度旨出願スルモノアリ右ハ事實憫然ノ至リニ付之ヲ許可シ其旨出稼先キノ所轄警察署又ハ分署へ通牒監視致シ候モ御差支之筋無之候哉相伺候也

内務省指令 明治十七年一月九日

伺之趣事情無機者ニ限リ許可シ不苦儀ト可心得事

●賭博犯ニ關スル偽證者處分方ノ伺指令 明治十七年一月十一日(電報) 新潟縣伺

賭博犯ニ關スル證人偽證及ヒ認告者ハ無論刑法ニ依リ處分相成儀ト心得可然哉

司法省指令 明治十七年一月十五日

本月十一日附電報伺ノ趣ハ刑法ニ依ルノ限ニアラス

●已決囚刑期計算之儀ニ付伺指令 明治十六年十二月廿五日 新潟縣伺

第一條 舊刑法處斷ノ者ニシテ改定律例第五十條ニ依リ價役アル者現今服役中ニ在ル者ハ新刑法ニ比準シ其價役ヲ宥メ原年限内ニ算入シ可然哉

第二條 前條ノ者改定律例第四十條ニ依リ價役アル者現今服役中ニ在ル者ハ前條同様處分シテ可然哉

司法省指令 明治十七年一月十九日

第一條 第二條伺之通

●囚徒遺骸葬式ノ伺指令 明治十六年十二月二十八日 德島縣伺

刑期々限内ニ死亡シタル囚徒ノ親族等ヨリ其遺骸ヲ請フニ依リ之ヲ下付致シ候上ハ式ヲ以テ葬儀執行候共不苦儀ニ候哉

司法省指令 明治十七年一月十九日

伺之通

●監視規則上申内訓 明治十七年二月二十二日 長崎控訴裁判所檢事上申

監視規則中一月兩度所轄警察署ニ出頭セシムルヲアリ遊地人民ノ如キハ所轄警察署ヲ距ル或ハ十數里ノ遠キニ及ヒ山ヲ躋エ海ヲ航シ日數三四日ヲ要セサレハ往復スル能ハサルモノアリ爲ニ犯則スルモノ比々有之候故ニ自今警察署ナキ地ニ於テハ監視表ノ檢印ヲ戶長役場ニ受クルノ便ヲ與フルルハ獨リ犯則者ヲ減スルノミナラス實地ノ取締モ亦大ニ相立可申依テ本規則御改正相成度此段及上申候也

司法省内訓 明治十七年三月十八日

監視規則中改正ノ儀ニ付上申ノ趣檢印ヲ受クヘキ警察署往復一泊以上ヲ要スル地ニアル場合ニ於テハ郡役所又ハ戶長役場ニ出頭シ檢印ヲ受クルモ妨ケナキ儀ト心得ヘシ

●監視ニ付スル犯人警察署へ護送ノ時刑名宣告書ノ謄本送付ノ伺指令 明治十七年三月五日 茨城縣伺

監視ニ付セラレタル犯人ヲ警察署ニ護送スル時當縣ニ於テハ是迄裁判所ヨリ送致ヲ受ケタル刑名宣告書ノ謄本ハ監獄署ニ止メ置キ同署書記ヲシテ之ヲ復寫ヒシメ其謄本ヲ以テ執行致シ來候處昨十六年十二月二十八日福岡縣へノ御指令ニ據レハ監視ノ執行ハ裁判所ヨリ送致シタル刑名宣告書ノ謄本ヲ以テ之ヲ爲ス可シトアレ共犯人被告人數名ニシテ其宣告書一通ナル時ハ各其居住ノ地ヲ異ニシ又刑期ノ長短アリテ之カ執行ヲ爲スニ際シ宣告書數通裁判所ヨ

リ送致ヲ受ケサルヲ得サル場合アルノミナラス主刑ノ終ルマテ數年間監獄署ニ宣告書ノ謄本ヲ保存スルニ散亂ノ患ナカラシメンカ爲メ簿冊ニ編纂ヲサヘルヲ得サルニ依リ裁判所ヨリ送致セラレタル宣告書ノ謄本ヲ警察署ニ送致スルハ大ク不便ニシテ裁判所ト監獄署ニ於テハ頗ル手數ヲ煩シ實際差支ノ筋不尠ヲ以テ當縣ニ於テハ從前ノ如ク監獄署書記ヲシテ謄寫セシメ其謄本ニハ書記署名官印ヲ押捺シ而シテ官署ノ印ヲ用ヒ之ヲ以テ監視ノ執行ヲ爲サシムルモ不苦候哉

司法省指令 明治十七年三月二十五日

伺ノ趣共犯人アル場合ニ限リ見込ノ通但共旨ヲ送致ス可キ謄本ニ記載ス可シ

●監視ニ付セラレタル者旅費欠乏ノ爲メ救護ニ係ル諸費支辨方ノ伺指令 明治十七年二月一日

新潟縣伺

監視ニ付セラレタル者刑法附則第二十五條ノ場合ニ於テ途中發病等ノ爲メ澆滯中旅費欠乏シ其地ノ警察署ニ救護ヲ乞フ者ハ刑法附則第三十二條ニ準據シ滯在地監獄署ノ別房ニ留置スヘキ旨愛媛縣ヨリ司法卿ヘ伺出タル指令ニ報第百有之候處監獄署ニ遠隔ノ警察署ヘ右等ノ救護ヲ乞フ時ニ當リ監獄署ヘ押送ニ關スル費用ハ本籍ヨリ追償致スヘキ者ト存候得共赤貧ニシテ償還スルノ道無之節ハ何レノ費目ヨリ可致支辨候哉

司法省指令 明治十七年四月九日

伺之趣自家親戚引取人等總テ代償スル資力無之節ハ犯人本籍ノ地方稅教育費中ヨリ辨償セシムヘシ

●監視認印巡查交番所ニ於テ取扱ノ儀ニ付伺指令 明治十七年三月三十日

三重縣伺

交番所ニ於テ監視事務取扱ノ儀ニ付別紙寫第一條ノ通相向朱書之通御指令有之候ニ付不得止警察署ノミニテ檢印爲致居候處長崎控訴裁判所檢事長ヨリ監視規則中ノ警察署ヲ司法警察官ト改正ノ上申ニ對シ檢印ヲ受クヘキ警察署往復一泊以上ヲ要スル地ニアル場合ニ於テハ郡役所又ハ戶長役場ニ出頭シ檢印ヲ受クルモ妨ケナキ旨御内訓相成候趣本年三月二十一日附第一四四一號ヲ以テ御省第四局副長ノ移牒ニ依リ致承知候右ハ郡戶長ハ司法警察官ト謂フノ故

ヲ以テ斯ク御内訓相成候義ト相考ヘ候果シテ然ラハ當縣交番所ノ如キモ常ニ警部代理ヲ命シタル巡查即チ司法警察官ノ事務ヲ取扱フ巡查有之且ツ實際上ノ景况前伺ニ具載スル通ニ付右御内訓郡役所戶長役場同様交番所ニ於テモ檢印爲致度此段重テ相伺候條何分ノ御指令有之度候也

司法省指令 明治十七年四月二十一日

刑法附則第二十七條第一ノ場合ニテ所轄警察署マテノ距離往復一泊以上ヲ要スル時ハ伺ノ通

別紙

刑法附則ノ儀ニ付伺

第一條 刑法附則第二章中ニ散見スル警察所トハ警察署及其分署ヲ指稱シタルモノトハ存候得共當縣ノ如キハ該署部内延長十餘里ニ洩ルノ箇所往々有之被監者ハ處刑人ナリトハ申毎月警察署ヘ往復スル因却不尠然ニ其實運者ノ如キニ至テハ右往復スル時間ハ家業ヲ休止スルヲ以テ生計ニ差支候而已ナラス又路費モ無之遂ニ不參スル者可有之然ルニ該署部内ニハ數箇ノ巡查交番所ヲ配置シ必ス第一等巡查ヲ派遣シテ警部代理トナシ之ニ巡查數名ヲ附屬セシムルヲ以テ名ハ交番所ナリト雖モ其實ハ隣府縣ノ分署ニ異ナラス故ヲ以便宜ニ從ヒ右交番所ニテ前縣警察署同様監視ノ事務爲取扱候モ妨ケ無之哉

第二條 略ス

右相伺候條何分ノ御指令相成度候也

明治十五年八月廿三日

司法卿大木喬任殿

朱書

伺之趣左ノ通心得ヘシ

第一條 交番所ニ於テ監視ノ事務ヲ取扱ハシムルヲ得ス

三重縣令岩村定高

第二條 略ス

明治十五年十月廿六日

●子孫父祖ニ對スル偽證書ノ儀ニ付請訓

明治十七年四月十日
岡山始審裁判所檢事請訓

刑法第二編第四章第四節中別ニ親屬ニ係ル不備罪ノ特例無之ニ付假令其祖父ヲ欺瞞シテ金圓ヲ騙取センカ爲ノ目的ノミニ出タル偽印證書ノ所爲ト雖モ猶且之ヲ罰スヘキノ律意ナルヤ抑偽印證書ノ所爲タルヤ尚取詐取ノ如キ特ニ父子間ノミニ直接スルノ類ニ異ナリ之ヲ他人ニ公示シ之ヲ訟廷ニ提出スレハ則社會ニ公使シタルモノナルヲ以テ即チ社會ノ信用ヲ害スルモノト謂ハサルヘカラス且父祖モ亦社會ノ一部ニ屬スルヲ以テ假令父祖ノミノ信用ヲ害スルニ於テモ亦以テ社會ノ信用ヲ害スルモノト謂ハサルヘカラスルノ理アリ況ンヤ之ヲ公衆ニ公使スルヲヤ故ニ本案一ハ信用ヲ害スル罪ニシテ一ハ財産ニ對スルノ罪ナルニ付其所爲自カラニ罪ニ判カレ彼此立法ノ主義相異ナルヲ以テ詐欺取財ノ罪ハ之ヲ問ハサルモ偽印證書ノ罪ハ猶之ヲ罰スヘキ所以ナル乎

或ハ本節ハ偽造官印ノ條ニ異ナリ其起因タル偽造ノミヲ以テハ之ヲ罰セス必其結果タル使用行使ヲ合スルニアラサレハ罰トナラサルモノニシテ而シテ其結果タル使用行使ハ即チ刑徒之ヲ問ハサルノ詐欺取財ニ係ルヲ以テ元來其罪ノ成リ立ツヘキ因果ノ結合セサルモノニ付父祖ノ金圓ヲ騙取センカ爲ノ目的ノミニ出タル偽印證書ニシテ敢テ他人ヲ害スルニアラサル以上ハ之ヲ罰スルノ限ニアラサル乎本案疑義ノ事實ハ左ノ如シ

茲ニ甲乙丙ノ三人アリ乙ハ甲ノ養子ニシテ丙ハ其朋友ナリ乙放蕩ニシテ品行修ラス自カラ養家ノ意ニ適セス早晚必離絶セラルヘキヲ知リ之カ準備ヲナサント欲シ竊ニ甲ノ印影ヲ盜用シ以テ甲カ丙ヨリ金若干圓借用シタル證書ヲ偽造シ丙ニ其情ヲ告ケ申成ルノ後ハ該金ノ幾分ヲ與フヘキヲ約シ丙ヲシテ之ヲ出訴セシメタリ於是其引合人トシテ出廷シ該證書ハ甲ノ囑ニ因テ之ヲ代書シ其金圓ハ即チ甲ノ借用シタルニ相違ナキ旨證據シ遂ニ甲ノ敗訴トナリタリ甲其裁判ニ服セス未タ執行セサルニ際シ會シ其罪發覺ニ及ヒ甲亦之ヲ告訴シタリ如此キ場合ニ於テ乙ヲ處スル如何ノ疑團ニ係ルモノナリ

右疑義仰内訓候也

司法省内訓 明治十七年五月十四日

子孫父祖ノ借用證書ヲ偽造シ金圓ヲ詐取セントシタル者處分ノ儀ニ付請訓ノ趣右ハ第二項見解ノ通此旨及内訓候也

●醫師公務ニ關セサル詐僞ノ疾病證書ヲ造ル者ノ儀ニ付伺指令

明治十七年六月二十八日
山形始審裁判所酒田支廳檢事

伺

戶主ヲ廢スルカタメ又ハ被告人召喚ノ際或ハ保釋中呼出ノ節又ハ其他ノ事ニ因リ醫師囑託ヲ受ケ詐僞ノ疾病證書ヲ造リタル者ハ公務ヲ免ル可キタメノ一元索ナキカ故ニ刑法第貳百拾五條ノ犯罪ニ非サル可シ然レモ不應爲ノ事タルハ勿論爲ニ害ヲ生スルモノナレハ刑法第貳百拾條貳項ノ犯罪ニシテ該條ニ依リ處ス可キモノニ候哉

司法省内訓 明治十七年七月三十日

別紙伺ノ趣ハ後段見解ノ通此旨及内訓候也

●刑期計算方ノ請訓

明治十七年七月十七日
和歌山輕罪裁判所檢事請訓

刑ノ言渡ニ對シ被告人自ラト告シ檢察官亦附帶ノ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ二個ノ上告共ニ棄却セラレタルハ刑法第五拾壹條第壹ノ後段ニ依リ後判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算スヘキ儀ト存候得共同上ノ場合ニ於テ被告人ノ上告旨趣ハ原裁判ヲ破毀スルノ理由ト爲スニ足ラサルモ他ニ不法ノ點アルヲ以テ大審院之ヲ破毀シタルハ又ハ檢察官附帶上告ノ旨趣ニ依リ原裁判ヲ破毀シタルハ到底原裁判不法ナリシモノニ付被告人ノ之ニ服セスシテ上告セシハ不當ナリト爲シカタク且原裁判ノ破毀ト爲リタルハ畢竟被告人ノ上告ニ因ルヲ以テ此二個ノ場合ニ於テハ刑法第五拾壹條第壹ノ前段ニ依リ前判宣告ノ日ヨリ刑期ヲ起算スヘキ儀ト相心得可然哉

司法省内訓 明治十七年七月三十日

別紙請訓ノ趣ハ見解ノ通此旨及内訓候也

●輕罪ノ刑ヨリ減等シテ拘留ニ處セラレタルモノ、件ニ付請訓
明治十七年十月一日
 岐阜始審裁判所檢事請訓
 刑法第五拾條刑ハ裁判確定ノ後ニアラサレハ之ヲ執行スルヲ得ストアリテ總テ刑ノ執行ハ上訴期限經過ノ後執行
 スヘキモノナルモ違警罪ノ如キハ明治十四年第四拾四號公布ニ依リ上訴ヲ許サレサルモノナレハ裁判宣告ハ即日ヨ
 リ執行スヘキモノナラン依テ思考スルニ茲ニ輕罪犯ニシテ宥恕減輕酌量減輕等ニテ禁錮ヲ減盡シ拘留ニ處セラレタ
 ルモノハ勿論縱令減シテ其長期一月以上ニ在ルモ其短期十日以下トナリ其短期ヲ以テ拘留ニ處セラレタルモノハ其
 現ニ受ケヘキ刑ハ即チ違警罪ノ刑ナレハ該第四拾四號ノ公布ニ基キ上訴ヲ許サレサルモノトシ裁判宣告ノ即日ヨリ
 執行スヘキモノト心得可然哉仰内訓候也

司法省内訓 明治十七年十月十八日

請訓之趣禁錮ヲ減盡シテ拘留ニ處セラレタル者ト雖モ尚ホ上訴スルヲ得ルヲ以テ上訴期限經過ノ後ニアラサレハ
 其刑ヲ執行スルヲ得サル儀ト心得可シ此旨及内訓候也

●舊法受刑ノ者刑期計算ノ儀ニ付伺指令
明治十七年十月二十一日
 大分縣伺

本年八月御省第三八一〇號内訓千葉縣伺第壹條ニ對シ云々御指令有之候處茲ニ明治四年七月廿一日準流十年ノ言渡
 ヲ受ケ處刑中逃走外ニ在テ又犯罪ニ依リ全六年十二月十七日從新拘役十年加役七十日ノ處刑中全十年四月二日再ヒ
 逃走セシニ依リ棒鎖二日ノ上懲役終身ニ處セラレ服役中全囚ノ逃走ヲ報シタルニ依リ減一等懲役十年トナリタル者
 アリ右ハ千葉縣伺ト事情相違ノ廉モ有之候ヘ尺矢張該内訓ニ基キ刑法第五拾貳條ニ從ヒ逃走棒鎖等ノ日數ヲ除キ最
 前受刑ノ日 明治四年七月廿一日 自明治四年七月廿一日至全六年二月十八日 日數ヲ除キ最
 日數三年百六日合 ヲ懲役十年ノ内ヨリ扣除シ刑期ヲ計算致可然哉
 セテ本文ノ如シ

司法省指令 明治十七年十一月二十日

伺ノ趣明治十年四月二日即チ懲役終身ノ宣告アリタル日ヨリ刑期ヲ起算スル儀ト心得可シ

●刑期計算之伺指令
明治十七年十二月五日
 岐阜縣伺

第壹條 甲地裁判所ニ於テ缺席裁判ヲ受ケし地ニテ他ノ被告事件ニテ捕縛入監シタルモノ其事件數罪俱發例ニ依リ
 不論罪等ノ言渡ヲ受ケタルモノアリ右刑期計算方ハ假令他ノ事件ニテ捕縛入監中缺席裁判アリタルヲ知リタル
 場合ト雖モ明治十五年九月廿日本縣監第五拾貳號伺御指令ニ依リ逮捕ノ日ヲ以テ該缺席裁判ノ刑期ヲ起算可然哉
 第貳條 缺席裁判アリタルヲ不知全ク往時ノ罪科ヲ悔ヒ自首入監中右缺席裁判アリタルヲ知リタル時モ猶舊章
 條ノ通相心得可然哉

第三條 治罪法第四百拾條但書ニ捕ニ就キタル時八十日內ニ故障ヲ爲スヘシトアルハ是レ單ニ本案事件ヲ指シタル
 場合ニテ他ノ事件ニテ入監中當然定期ノ期限ヲ經過スルト雖モ缺席裁判言渡アリタルヲ知リタルヨリ十日ノ期
 限ヲ與フヘキモノカ

司法省指令 明治十八年一月二十四日

第壹條 第二條 伺之通

第三條 本按事件ノ爲メ捕ニ就キタル場合ト否トニ拘ハラス缺席裁判アリタルヲ知リタルヨリ十日ノ期限ヲ與
 フ可シ但伺書ニ治罪法第四百拾條トアルハ第四百七條ノ照寫ナルヘシ

●縣ノ布達ニ違背スル者處分方ノ伺指令
明治十六年十一月九日
 滋賀縣伺

本縣限リ制定スル布達施行期限ハ是迄別ニ相定メス總テ太政官布告施行期限ニ準シ來候處本年太政官第拾七號公布
 ヲ以テ布告布達施行期限制定セラレ候ニ付テハ爾來本縣限リ定ムル處ノ布達ニシテ 假ヘハ地方限リノ違警罪目ニシ
 之ニ違背スルモノハ尚ホ從前ノ慣例ニ依リ右第拾七號公布第壹條ニ準シ發令ノ日ヨリ七日ヲ過キタルハ相當處罰
 致シ可然哉

司法省指令 明治十六年十一月二十八日

伺之通

●假出獄者刑期計算並ニ假出獄停止申渡書式ノ伺指令 明治十八年九月二十一日 栃木縣伺

第一條 刑法第五十六條ニ假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直ニ出獄ヲ停止シ出獄中之日數ハ刑期ニ算入セス
ト有之右所謂出獄中之日數トハ即本年九月丙第七號御達假出獄停止手續第一條ニ依リ典獄ニ於テ假出獄ノ停止申渡
ヲナセシ前日迄ヲ云フモノナルヤ果シテ然レハ刑法第五十二條刑期限內逃走シ再ヒ捕ニ就キ未決監ニ拘禁中之日
數ヲ本刑刑期ニ算入スル者ト權衡如何ト被考候因テハ前文第五十六條出獄中之日數計算方ハ假出獄停止ノ申渡ヲ
ナサハルモ既ニ監獄スル以上ハ其日數ハ刑期ニ算入スル儀ト心得可然哉

第二條 假出獄停止手續中假出獄申渡書式之末文ニ其出獄ヲ停止シ證票取上候事トアルハ出獄中已ニ其證票紛失等
ノ爲メ所持セサル者ト雖猶證票取上ノ四字ヲ記入スル儀ニ候哉

司法省指令 明治十八年十二月五日(內務卿連署)
書面伺ノ趣左ノ通可心得申

第一條 末段伺ノ通
第二條 證票取上ノ四字ハ省クヘシ

第二百八十二 大赦令 明治二十二年二月十一日公布 勅令第拾二號

朕憲法ヲ發布スルニ當リ此盛典ヲ表シ惠澤ヲ施サンカ爲ニ特ニ命シテ左ノ條項ニ依リ大赦
ヲ行ハシム

御名 御璽

內閣總理大臣 伯耆黑田清隆

明治二十二年二月十一日

- 樞密院 議 長 伯耆伊藤博文
- 外務 大 臣 伯耆大隈重信
- 海軍 大 臣 伯耆西郷從道
- 農商務 大 臣 伯耆井上馨
- 司法 大 臣 伯耆山田顯義
- 大藏大臣兼內務大臣 伯耆松方正義
- 陸軍 大 臣 伯耆大山巖
- 文部 大 臣 子爵森有禮
- 逓信 大 臣 子爵榎本武揚

勅令第十二號

第一條 本令發布以前ニ於テ左ノ罪ヲ犯シタル者ハ之ヲ赦免ス

- 一 刑法第一百七條第百十九條ノ罪
- 二 刑法第二百一一條第百二十三條第百二十五條第百二十六條第百二十七條ノ罪
- 三 刑法第二百二十九條第百三十條第百三十一條第百三十二條第百三十三條第百三十四條ノ罪
- 四 刑法第三百三十六條第百三十七條第百三十八條ノ罪
- 五 刑法第四百一一條ノ罪

廿二年陸軍省訓令甲第二號(第二百ノ二項)參看

- 六 陸軍刑法第五十條第五十二條第五十四條第五十五條第五十六條第五十七條第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第六十四條ノ罪
- 七 陸軍刑法第六十六條第六十七條ノ罪
- 八 陸軍刑法第六十九條第七十條第七十一條ノ罪
- 九 陸軍刑法第九十三條第九十四條ノ罪
- 十 陸軍刑法第九十九條第一百條ノ罪
- 十一 海軍刑法第五十六條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第六十四條第六十五條第六十六條第六十七條第六十八條第六十九條第七十條第七十一條ノ罪
- 十二 海軍刑法第八十六條第八十七條ノ罪
- 十三 海軍刑法第一百條第一百一條ノ罪
- 十四 海軍刑法第一百十條第一百十一條ノ罪
- 十五 海軍刑法第二百二十六條ノ罪
- 十六 保安條例ノ罪
- 十七 集會條例ノ罪
- 十八 治安ヲ妨害スルノ目的ヲ以テ爆發物取締罰則ヲ犯ス罪
- 十九 新聞紙條例第二十一條第二十二條ニ違ヒ第三十條第三十一條ニ該ル罪及ヒ第三十二條ニ該ル罪但第三十條ニ該ル者ノ内風俗ヲ壞亂スルカ爲メ發賣頒布ヲ禁セラレタル新聞紙ヲ發賣頒布シタル者ハ赦免セス

同年海軍省訓令第一號(第二百一ノ一項)參看

二條ヲ犯ス罪但第三十條ニ該ル者ノ内風俗ヲ壞亂スルカ爲メ發賣頒布ヲ禁セラレタル新聞紙ヲ發賣頒布シタル者ハ赦免セス

政治ニ關スル意思ヲ以テ同條例第一條第三條ニ違ヒ第二十七條ニ該ル罪及ヒ第六條第十七條第十八條ニ違ヒ第二十九條ニ該ル罪

二十 出版條例第十六條第十七條第十八條ニ違ヒ第二十七條ニ該ル罪及ヒ第二十四條ヲ犯ス罪但第二十七條ニ該ル者ノ内風俗ヲ壞亂スルカ爲メ發賣頒布ヲ禁セラレタル文書圖畫ヲ發賣頒布シタル者ハ赦免セス

政治ニ關スル意思ヲ以テ同條例第三條ニ違ヒ第二十一條ニ該ル罪第六條第七條ニ違ヒ第二十二條第二十三條ニ該ル罪及ヒ第十五條第十九條第二十條ニ違ヒ第二十七條ニ該ル罪

- 第二條 舊法ニ依リ處斷セラレタル罪ト雖モ其性質前條ニ記載シタル罪ト同一ナル者ハ之ヲ赦免ス
 - 第三條 數罪俱發例ニ依リ處斷セラレタル者最重ノ罪赦免ヲ得タル場合ト雖モ他ノ罪ニ其効ヲ及ボサス
 - 第四條 赦免ヲ得ルト雖モ既ニ徵收シタル罰金科料及ヒ沒收シタル物件ハ還付セス
 - 第五條 陸軍大臣海軍大臣司法大臣ハ本令ノ施行ニ關シ必要ノ指揮ヲ爲ス可シ
- 〔一〕大赦施行手續 明治二十二年二月十一日 司法省訓令第二號 檢察廳長檢事廳府廳(東京府ヲ除ク)

本年勅令第十二號ヲ以テ大赦ノ儀公布相成候ニ付テハ右施行方左ノ手續ニ從フヘシ

大赦施行手續

第一條 本年勅令第十二號ニ依リ赦免ヲ得ヘキ罪ヲ犯シタル者ハ既ニ判決ヲ經タルト否トヲ問ハス又既ニ刑ノ執行ヲ終リタルト否トヲ別タス總テ赦免ヲ得ル者トス

第二條 赦免ヲ得ヘキ罪ニ付刑ノ言渡ヲ受ケ其言渡未タ確定セサル者言渡確定スルモ未タ其執行ニ著手セサル者及ヒ其執行中ニ係ル者ニ對シテハ原裁判所ノ檢察官ヨリ速ニ赦免ヲ得タル旨ヲ通知シ在監中ノ者ハ之ヲ放免スヘシ

第三條 數罪俱發例ニ依リ處斷セラレタル者若クハ數罪併科セラレタル者又ハ刑期限内再ヒ罪ヲ犯シ刑ノ言渡ヲ受ケタル者赦免ヲ得タルニ因リ更ニ赦免ヲ得サル罪ノ刑ヲ執行スヘキトキハ赦免ヲ得タル罪ニ付執行シタル刑ヲ通算ス

若シ數罪俱發例ニ依リ處斷セラレタル者ノ裁判言渡ニ疑點(裁判言渡中赦免ヲ得タル罪ノミニ付刑期金額)アルトキハ檢察官ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ其説明ヲ請フヘシ(ヲ示シ其他ノ罪ニ付テハ之ヲ示サハルノ類)

第四條 赦免ヲ得ヘキ囚人原裁判所ノ管轄地外ノ監獄ニ在ルトキハ典獄ヨリ最近ノ始審裁判所(本廳又)檢察官ニ通知スヘシ

通知ヲ受ケタル檢察官ハ第二條ノ處分ヲ爲スヘシ若シ其囚人ノ裁判言渡ニ付原裁判所ノ説明又ハ訴訟書類ノ取調ヲ要シ直ニ處分ヲ爲シ難キ場合ニ於テハ其事件ヲ原裁判所ノ檢察官ニ送致スヘシ

通知ヲ受ケタル檢察官第二條ノ處分ヲ爲シタルトキハ其旨ヲ原裁判所ノ檢察官ニ通知スヘシ

第五條 赦免ヲ得ヘキ罪ニ付監視又ハ特別監視執行中ニ係ル者ハ執行地ノ警察官ヨリ原裁判所ノ檢察官ニ通知スヘシ若シ其執行地原裁判所ノ管轄地外ニ係ルトキハ最近ノ始審裁判所(本廳又)檢察官ニ通知スヘシ

通知ヲ受ケタル檢察官ハ監視又ハ特別監視ヲ免スルノ手續ヲ爲スヘシ(ハ支廳)檢察官ニ通知スヘシ(上訴中ノ事件ニ付テハ其上訴)ヨリ公訴ヲ抛

第六條 赦免ヲ得ヘキ罪ニ付豫審又ハ公判中ニ係ル事件ニ付テハ檢察官(上訴中ノ事件ニ付テハ其上訴)ヨリ公訴ヲ抛

棄スルノ手續ヲ爲スヘシ

第七條 赦免ヲ得ヘキ罪ニ付刑ノ言渡ヲ受ケ既ニ其執行ヲ終リタル者ヨリ赦免ヲ得タル旨ノ證明ヲ請フトキハ檢察官ニ於テ事實ヲ精査シ證明ヲ與フヘシ

第八條 勅令第十二號第一條第十九項第二段及ヒ第二十項第二段ニ記載シタル犯罪ニ付テハ檢察官ニ於テ發行シタル新聞紙又ハ出版シタル文書圖畫ノ性質其他裁判言渡ニ認メタル事實ニ因リ政治ニ關スル意思ニ出テタル者ナルト否トヲ査定スヘシ

第九條 大赦ノ施行ニ付疑ヒアルトキハ檢察官ヨリ速ニ司法大臣ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第十條 大赦ノ施行ニ關スル處分ハ檢察官ヨリ速ニ司法大臣ニ報告スヘシ

〔二〕赦免ヲ得タル證明ヲ得ルノ申立方明治二十二年二月十一日 司法省告示第二號
本年勅令第十二號ニ依リ赦免ヲ得ヘキ罪ニ付刑ノ言渡ヲ受ケ既ニ其執行ヲ終リタル者ニシテ赦免ヲ得タル旨ノ證明ヲ得ント欲スルトキハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ申出ツヘシ

但明治十四年以前司法省佐賀萩九州其他ノ臨時裁判所ニ於テ處斷ヲ受ケタル者ハ大審院檢察長ニ申出ツヘシ

○第二章 罰例 處斷 讒謗律

第二百八十三 法律規則中罰例ニ係ルモノ處斷例明治十四年十二月二十八日

布告第七
十二號

明治十五年一月一日ヨリ刑法施行候ニ付法律規則中罰例ニ係ルモノハ左ノ例ニ照シテ處斷

刑法第二條參

スヘシ

- 第一條 凡懲役ハ十一日以上ヲ重禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス
 - 第二條 凡禁獄及禁錮ハ十一日以上ヲ輕禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス
 - 第三條 凡罰金及科料ハ貳圓以上ヲ罰金ニ處シ貳圓未滿ヲ五錢以上壹圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
 - 第四條 法ニ照シ律ニ照シ若クハ違令違式ニ照シ處斷ストアリ及ヒ咎可申付トアルハ總テ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
 - 第五條 法律規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス
 - 第六條 法律規則中罰例アリト雖モ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依テ處斷ス
 - 第七條 前數條ノ罪ヲ犯シ拘留科料ニ處スル者ト雖モ輕罪裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス但始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ裁判スルヲ得
- 右奉 勅旨布告候事
- 〔一〕諸罰則ヲ犯シ罰金科料ニ處セラル、者處分法 明治十三年三月三十一日
 諸罰則ヲ犯シ罰金科料ニ處セラル、者處分法左ノ通相定候條此旨布告候事
 一罰金科料ハ宣告ノ日ヨリ一月内ニ納完セシム若シ限内納完セサル者ハ壹圓ヲ一日ニ折算シ禁獄ニ換フ其壹圓以下ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス
 但算シテ禁獄二年以上ニ及ホスヲ得ス

- 一禁獄限内罰金科料ヲ納完シ又ハ親屬等代テ納完スル時ハ經過シタル日數ヲ扣除シテ禁獄ヲ免ス
- 一罰金科料ノ實決ノ刑ヲ併科シタル時完納セサル者ハ刑期滿限ノ後例ニ照シテ禁獄ス
- 〔一〕諸罰則ヲ見届ケ訴出ル者科料罰金ノ半高給與方 明治十三年三月二十日
司法省達丙第壹號 大審院諸裁判所檢事檢事ヲ置カサル 府縣
 諸罰則中逃犯者ヲ見届ケ訴出ル者ハ其責トシテ科料又ハ罰金ノ半高ヲ給付スト之レアルハ其逃犯者無力ニシテ科料又ハ罰金ノ全部ヲ完納スル能ハサルハ實地徵收セシ金高ノ半額ヲ給付スル儀ト心得ヘク此旨相達候事
 但シ本文ニ抵觸セル從前ノ伺指令ハ總テ取消候事
- 〔二〕建言ヲ名トシ官吏ニ面謁口陳ヲ求メ抗論喧擾ニ涉ル者處分方 第六ノ第三項ニ掲出ス
- 〔三〕請願規則罰例 第七ニ掲出ス
- 〔四〕衆議院議員選舉法罰則 第五十三ノ第二項ニ掲出ス
- 〔五〕府縣會議員會議ニ關スル事項ヲ以テ他ノ府縣會議員ト聯合集會スル者解散ノ命ニ從ハサル時處分方 第五十四ノ第三項ニ掲出ス
- 〔六〕府縣會議員選舉規則罰例 第五十四ノ第四項ニ掲出ス
- 〔七〕府縣會議員選舉規則罰例 第五十四ノ第四項ニ掲出ス
- 〔八〕鐵道犯罪罰例 第六十六ノ第一項ニ掲出ス
- 〔九〕鐵道犯罪罰例私設鐵道ニ適用方 第六十六ノ第二項ニ掲出ス
- 〔十〕集會條例罰則 第七十六ニ掲出ス

- 〔十一〕保安條例罰則 第七十七
二掲出ス
- 〔十二〕銃砲取締規則違犯者罰則 第七十八ノ第
一項二掲ク
- 〔十三〕火藥取締規則罰則 第七十九
二掲ク
- 〔十四〕爆發物取締規則 第八十一
二掲出ス
- 〔十五〕遺失物取締規則罰則 第八十二ノ第
一項二掲ク
- 〔十六〕古物商取締條例罰則 第八十三
二掲出ス
- 〔十七〕質屋取締條例罰則 第八十四
二掲出ス
- 〔十八〕石油取締規則罰則 第八十五
二掲出ス
- 〔十九〕危害品船積法則罰則 第八十六
二掲出ス
- 〔二十〕不開港場規則難船救助心得方等ノ條目違犯者處分方 第八十七
二掲出ス
- 〔廿一〕内國船難破及漂流物取扱規則罰則 第八十八
二掲出ス
- 〔廿二〕富籤賣買ノ牙保補助者及富籤購買者罰則 第八十九ノ第
一項二出ス
- 〔廿三〕帶刀違犯者處分方 第九十二
掲出ス
- 〔廿四〕賭博犯者處分規則 第九十一
二掲出ス
- 〔廿五〕出生死去出入等届出方及寄留者届出方違犯者處分方 第九十九ノ第
二項二掲ク
- 〔廿六〕生死出入届漏及従前ノ寄留者届出期限違犯者處分方 第九十九ノ第
四項二掲ク
- 〔廿七〕華士族家督相續法違犯者處分方 第一百五
二掲ク

- 〔廿八〕墓地及埋葬取締規則違犯者處分方 第一百一ノ第
一項二掲出ス
- 〔廿九〕賣藥規則罰則 第一百十五
二掲出ス
- 〔三十〕藥品營業並藥品取扱規則罰則 第一百十六
二掲出ス
- 〔三十一〕藥用阿片賣買並製造規則罰則 第一百十八
二掲出ス
- 〔三十二〕傳染病豫防規則罰則 第一百二十
二掲出ス
- 〔三十三〕種痘規則罰則 第一百二十ノ第
一項二掲ク
- 〔三十四〕虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則違犯者處分方 第一百二十一
二掲出ス
- 〔三十五〕新聞紙條例罰則 第一百二十三
二掲出ス
- 〔三十六〕出版條例罰則 第一百二十四
二掲出ス
- 〔三十七〕版權條例罰則 第一百二十四ノ
第一項二掲ク
- 〔三十八〕寫真版權條例罰則 第一百二十四ノ
第三項二掲ク
- 〔三十九〕地租條例罰則 第一百二十七ノ
第一項二掲ク
- 〔四十〕隱田切開切添地處分方 第一百二十八
二掲出ス
- 〔四十一〕北海道水產稅則罰則 第一百四十
二掲出ス
- 〔四十二〕北海道水產稅則施行細則罰則 第一百四十ノ第
一項二掲ク
- 〔四十三〕外國形日本船輸入稅未納内外貨物廻漕規則罰則 第一百四十一
二掲出ス
- 〔四十四〕酒造稅則罰則 第一百四十二
二掲出ス

- 〔四十五〕 酢造營業者酢元ニ供スル爲メ酒類製造違犯者罰例 第四百四十二ノ
- 〔四十六〕 酒造稅則附則罰令 第三百四十二ノ
- 〔四十七〕 沖繩縣酒類出港稅則罰例 第四百四十二ノ
- 〔四十八〕 東京府區内清酒輸入規則罰例 第四百四十二ノ
- 〔四十九〕 自家用料酒類製造者心得違犯者罰例 第四百四十二ノ
- 〔五十〕 沖繩縣酒類出港稅則施行細則罰例 第四百四十二ノ
- 〔五十一〕 營麴營業稅則罰令 第四百四十三
- 〔五十二〕 煙草稅則罰例 第四百四十四
- 〔五十三〕 煙草稅則施行細則罰例 第四百四十四ノ
- 〔五十四〕 證券印稅規則罰例 第四百四十五
- 〔五十五〕 船稅規則罰例 第四百四十六
- 〔五十六〕 車稅規則罰例 第四百四十七
- 〔五十七〕 牛馬賣買免許稅規則罰例 第四百四十八
- 〔五十八〕 賣藥印紙稅規則罰例 第四百四十九
- 〔五十九〕 醬油稅則罰例 第四百五十
- 〔六十〕 醬油稅則施行細則罰例 第四百五十ノ
- 〔六十一〕 菓子稅則罰例 第四百五十一

- 〔六十二〕 所得稅法罰則 第五百五十二
- 〔六十三〕 所得稅法施行細則 第五百五十二ノ
- 〔六十四〕 兌換銀行券偽造變造者處斷方法 第六十一
- 〔六十五〕 滙入紙製造取締規則 第六十一
- 〔六十六〕 新舊公債證書發行條例罰則 第六十三
- 〔六十七〕 金祿公債證書發行條例中處分方 第六十四
- 〔六十八〕 起業公債證書發行條例中證書贗造等ノ處分方 第六十五ノ
- 〔六十九〕 金札引換公債條例中明文ナキ條件處分方 第六十六
- 〔七十〕 國立銀行條例罰例 第七十四
- 〔七十一〕 橫濱正金銀行條例罰則 第七十五
- 〔七十二〕 徵發令罰則 第七十八
- 〔七十三〕 徵兵令罰則 第八十ノ
- 〔七十四〕 徵兵事務條例罰則 第八十ノ
- 〔七十五〕 測量標規則罰例 第九十四
- 〔七十六〕 蠶種檢査規則罰例 第一百二十二
- 〔七十七〕 茶業組合規則罰例 第一百二十三
- 〔七十八〕 鳥獸獵規則 第一百二十八

- 〔七十九〕北海道ニ於テ臘虎並服胎獸ヲ獵獲スル者處分方第二百十八ノ第二項ニ掲ク
- 〔八十〕官許ヲ得スシテ獸醫業ヲ爲シタル者處分方第二百十九ノ第二項ニ掲ク
- 〔八十一〕獸類傳染病豫防規則罰例第二百二十ニ掲出ス
- 〔八十二〕特許條例罰則第二百二十一ニ掲出ス
- 〔八十三〕意匠條例罰則第二百二十二ニ掲出ス
- 〔八十四〕商標條例罰則第二百二十三ニ掲出ス
- 〔八十五〕米商會所條例罰則第二百二十四ニ掲出ス
- 〔八十六〕米商會所株式取引所ノ限月又ハ現場買賣ノ方法ニ倣ヒ又ハ類似ノ方法ヲ用ヒ物品賣買取引ヲ爲シ及其場所ヲ給與シタル者處分方第二百二十四ノ第三項ニ掲ク
- 〔八十七〕米商會所及株式取引所ノ仲買人竊ニ米穀金銀貨幣公債證書株式ノ限月又ハ現場買賣買取引ヲ爲シ又ハ類似ノ取引ヲ爲シ及其場所ヲ給與シタル者處分方第二百二十四ノ第四項ニ掲ク
- 〔八十八〕米商會所株式取引所收稅規則罰例第二百二十四ノ第五項ニ掲ク
- 〔八十九〕株式取引所條例罰則第二百二十五ニ掲出ス
- 〔九十〕取引所條例罰則第二百二十六ニ掲出ス
- 〔九十一〕取引所條例施行細則違犯者處分方第二百二十六ノ第一項ニ掲出ス
- 〔九十二〕度量衡改定規則違令處分方第二百二十七ニ掲出ス

- 〔九十三〕日本坑法罰則第二百二十八ニ掲出ス
- 〔九十四〕郵便條例罰則第二百二十九ニ掲出ス
- 〔九十五〕電信條例罰則第二百三十ニ掲出ス
- 〔九十六〕軍用電信ニ係ル妨害者處分方第二百三十ノ第一項ニ掲ク
- 〔九十七〕海底電信線保護萬國聯合條約罰則第二百三十二ノ第一項ニ掲出ス
- 〔九十八〕水底電信線路ニ於テ投錨漁業採藻等ノ禁ヲ犯ス者處分方第二百三十ノ第三項ニ掲出ス
- 〔九十九〕航路標識條例罰則第二百三十ニ掲出ス
- 〔百〕西洋形商船規則罰例第二百三十ノ六ニ掲出ス
- 〔百一〕西洋形船舶検査規則罰例第二百三十ノ八ニ掲出ス
- 〔百二〕海上衝突豫防規則罰則第二百四十ニ掲出ス
- 〔百三〕農商務省ノ許可ヲ受ケス檣燈舷燈ヲ製造シタル者處分方第二百四十ノ第一項ニ掲ク
- 〔百四〕船燈信號器製造販賣規則罰例第二百四十ノ第四項ニ掲ク
- 〔百五〕西洋形日本船各開港場出入規則罰例第二百四十ノ第一項ニ掲出ス
- 〔百六〕外國船乗込規則違犯者處分例第二百四十ノ第二項ニ掲出ス
- 〔百七〕西洋形船舶長運轉手機關手免狀規則罰例第二百四十ノ第三項ニ掲出ス
- 〔百八〕西洋形船水先免狀規則罰例第二百四十ノ第四項ニ掲出ス
- 〔百九〕西洋形船海員雇入雇止規則罰例第二百四十ノ第五項ニ掲出ス

〔百十〕公證人規則懲罰例 第二百五十
四ニ掲出ス
 〔百十一〕登記法罰則 第二百六十
五ニ掲ク
 〔百十二〕裁判所ノ呼出ヲ受ケ遲參不參ノ者處分方 第二百七十
一ニ掲出ス
 〔百十三〕治罪法中證人鑑定人ノ召喚ニ應セサル者罰金處分方 第二百八十
五ニ掲出ス

〔第二百八十四〕 讒謗律 明治八年六月二十八日
布告第百拾號

讒謗律別冊之通被定候條此旨布告候事

(別冊)

讒謗律

第一條 凡ソ事實ノ有無ヲ論セス人ノ榮譽ヲ害スヘキノ行事ヲ摘發公布スル者之ヲ讒毀ト
 ス人ノ行事ヲ舉ルニ非スシテ惡名ヲ以テ人ニ加ヘ公布スル者之ヲ誹謗トス著作文書若ク
 ハ畫圖肖像ヲ用ヒ展觀シ若クハ發賣シ若クハ貼示シテ人ヲ讒毀シ若クハ誹謗スル者ハ下
 ノ條別ニ從テ罪ヲ科ス
 第二條 第一條ノ所爲ヲ以テ乘輿ヲ犯スニ涉ル者ハ禁獄三月以上三年以下罰金五十圓以上
 千圓以下 二罰并セ科シ或ハ偏ヘニ
一罰ヲ科ス以下之ニ依ヘ
 第三條 皇族ヲ犯スニ涉ル者ハ禁獄十五日以上二年半以下罰金十五圓以上七百圓以下
 第四條 官吏ノ職務ニ關シ讒毀スル者ハ禁獄十日以上二年以下罰金十圓以上五百圓以下誹

刑法第百十七
條第百十九條
第百二十條及
第百二十五條
第六十一條ニ依
リ取捨スヘシ

謗スル者ハ禁獄五日以上一年以下罰金五圓以上三百圓以下

第五條 華士族平民ニ對スルヲ論セス讒毀スル者ハ禁獄七日以上一年半以下罰金五圓以上

三百圓以下誹謗スル者ハ罰金三圓以上百圓以下

第六條 法ニ依リ檢官若クハ法官ニ向テ罪犯ヲ告發シ若クハ證スル者ハ第一條ノ例ニアラ

ス其ノ故造誣告シタル者ハ誣告律ニ依ル

第七條 若シ讒毀ヲ受ルノ事刑法ニ觸ル、者檢官ヨリ其事ヲ糾治スルカ若クハ讒毀スル者

ヨリ檢官若クハ法官ニ告發シタル時ハ讒毀ノ罪ヲ治ムルコトヲ中止シ以テ事案ノ決ヲ俟チ

其ノ被告人罪ニ坐スル時ハ讒毀ノ罪ヲ論セス

若シ事刑法ニ觸レスシテ單ヘニ人ノ榮譽ヲ害スル者ハ讒毀スルノ後官ニ告發スト雖モ仍

ホ讒毀ノ罪ヲ治ム

第八條 凡ソ讒毀誹謗ノ第四條第五條ニ係ル者ハ被害ノ官民自ラ告ルヲ待テ乃チ論ス

○第十九類

○第一章 治罪法

●治罪法沿革要領

明治元年二月五日刑法事務局ヲ置ク○同年閏四月廿七日布告ヲ以テ刑法事務局ヲ廢シテ刑法官ヲ置ク○同年十一月十八日布告ヲ以テ御誕辰ノ日ハ刑罰拷問等ヲ除カシム○二年七月八日官制ヲ改定シ刑法官ヲ廢シテ刑部省ヲ置ク○同年十一月五日刑部省中選部司ヲ置キ捕亡ノ事務ヲ掌セシム○四年七月九日刑部省ヲ廢シ司法省ヲ置キ聽斷ノ事務ヲ管セシム○五年十月司法省第廿五號布達ヲ以テ白洲上尊弁ノ分界ヲ廢ス○同年十一月司法省第四十五號達ヲ以テ罪按書式及凡例ヲ頒布ス○六年一月司法省第八號達ヲ以テ罪按凡例二十四條ヲ改正ス○同年三月司法省第三十二號布達ヲ以テ除刑罰拷問ノ日ヲ更定ス○七年一月第十四號達ヲ以テ檢事職制章程司法警察規則ヲ定ム○同年九月第百廿八號達ヲ以テ司法警察規則附録ヲ定ム○同年十月第百三十二號達ヲ以テ司法警察ノ事務ヲ當分使府縣ニ委任ス○八年五月四日檢事職制章程ヲ定ム○同月第九十一號布告ヲ以テ巡回裁判規則ヲ定ム○同月第九十三號布告ヲ以テ刑事上告手續ヲ定ム○同年六月第百三號布告ヲ以テ裁判事務心得ヲ定ム○九年四月第三十九號達ヲ以テ七年第十四號達司法警察規則ヲ廢ス○同月司法省達第四十七號達ヲ以テ糾問判事職務假規則ヲ定ム○同月司法省達第四十八號達ヲ以テ司法警察假規則ヲ定ム○同年六月第八十六號布告ヲ以テ凡ソ罪ヲ斷スルハ證ニ據ラシム○十年二月第十七號布告ヲ以テ保釋條例ヲ定ム○同月第十九號布告ヲ以テ八年第九十三號布告刑事上告手續ヲ改正ス○同第廿二號布告ヲ以テ警察官變死者ノ屍ヲ解剖檢査スルヲ許ス○同年三月第三十二號達ヲ以テ檢事職制章程ヲ定ム○同年七月第四十九號布告ヲ以テ民刑事ヲ上告シテ已ニ裁判ヲ經タル者司法卿ニ於テ不當ト思量スルトキハ檢事ヲシテ再審ヲ求メシム○十二年十月第十二號布告ヲ以テ拷訊ニ關スル法例ヲ廢ス○十三年七月第三十七號布告ヲ以テ治罪法ヲ制定ス○同年第四十六號達ヲ以テ司法警察ノ事務委任ノ處自今司法省ノ都合ヨリ漸次各地方ニ檢事ヲ置キ檢事ニ屬スル事

第二百八十五 治罪法

治罪法別冊ノ通創定候條此旨布告候事

但實際施行ノ期日ハ追テ布告スヘキ事

治罪法目錄

第一編 總則

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

第二章 違警罪裁判所

第三章 輕罪裁判所

第四章 控訴裁判所

第五章 重罪裁判所

第六章 大審院

第七章 高等法院

第三編 犯罪ノ搜查起訴及ヒ豫審

第一章 搜查

第一節 告訴及ヒ告發

第二節 現行犯罪

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第二節 民事原告人ノ起訴

第三章 豫審

第一節 令狀

第二節 密室監禁

第三節 證據

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第五節 檢證及ヒ物件差押

第六節 證人訊問

第七節 鑑定

第八節 現行犯ノ豫審

第九節 保釋

第十節 豫審終結

第四章 豫審上訴

第四編 公判

第十九類 第一章 治罪法

第一章 通則
 第二章 違警罪公判
 第三章 輕罪公判
 第四章 重罪公判
 第五編 大審院ノ職務
 第一章 上告
 第二章 再審ノ訴
 第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴
 第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴
 第六編 裁判執行復權及ヒ特赦
 第一章 裁判執行
 第二章 復權
 第三章 特赦

治罪法
 第一編 總則
 第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贖物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス
 第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス
 第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラヌ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スコトヲ許サル場合ハ此限ニ在ラス
 又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得
 第五條 公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ
 第六條 刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラス若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ供ニ其效ナカル可シ
 第七條 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレハ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スコトヲ得ス
 刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スコトヲ得
 第八條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ス

ムルノ妨礙ト爲ルヲナカル可シ

第九條 公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被告人ノ死去

二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和

三 確定裁判

四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

五大赦

六 期滿免除

第十條 私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被害者ノ棄權又ハ私和

二 確定裁判

三 期滿免除

第十一條 公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

一 違警罪ハ六月

二 輕罪ハ三年

三 重罪ハ十年

第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時

ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從フ

第十三條 公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日

ヨリ起算ス

第十四條 期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ又

豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯從犯

及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ

其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラ

ス

第十五條 起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無効ニ屬スル時ハ期滿免除ノ

期限ノ經過ヲ中斷スルノ效ナカル可シ但裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬ス

ル時ハ此限ニ在ラス

第十六條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又

ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルヲ

ヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失

ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時亦同シ
民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ニ因リ生
シタル損害ノ償ヲ要ムルヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スヲ得

第十七條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要
償ノ訴ヲ爲スヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メ
タル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十八條 此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル
者ハ初日ヲ算入セズ若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラズ但期滿免除ノ期
限ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從
フ

第十九條 此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サル者ト雖
モ三里以上ナル時亦同シ

十五年第七號
布告(本款四
項)ヲ以テ海
上陸路行程ノ
割合ヲ定ム

島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム
第二十條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタル時ハ特別ノ場合ヲ除
クノ外其權ヲ失フ可シ

第二十一條 訴訟關係人ハ裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ届
置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルヲ得ス

第二十二條 此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラサル時ハ書記
其送達書ヲ作り書記局所屬ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム
若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ
事ヲ囑託ス可シ

第二十三條 送達書ハ二通ヲ作り其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スヲ得サル時ハ其住
所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ
送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヲ能ハサル
時ハ其旨ヲ附記ス可シ

同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スヲ得ス若クハ是等ノ者之ヲ受取ルヲ肯セサル時ハ
其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ
送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載ス可シ
本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ效ナカル可シ

送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ之ヲ保存ス可シ
第二十四條 休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラズ此規則ニ背キタル時
ハ其送達ノ效ナカル可シ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス

十四年四十六
號布告(本款
一項)ヲ以テ
送達方制限ニ
及ハス

第二十五條 官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ毎葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ效ナカル可シ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十六條 官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ效ナカル可シ

第二十七條 此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其效アリトス

第二十八條 此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ牴觸スル規則ハ此限ニ在ラス

從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス

第二十九條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第一百四十四條第一百五條ノ例ニ從フ

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

第三十一條 通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬ス

第三十二條 裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條 裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第三十四條 刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

一 犯罪ヲ捜査ス

二 犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス

三 裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス

四 裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第三十五條 檢察官一名ハ公廷ニ立會フ可シ

第三十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

第三十七條 書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ

又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第三十八條 犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルコト左ノ如シ

十六年第二號
布告(第二百
六十三)參看

十五年第十六號布告(本款第十六項)同年第四十二號布告(同十九項)參看

十四年第四十六號布告(本款一項)參看

一 違警罪ハ違警罪裁判所

二 輕罪ハ輕罪裁判所

三 重罪ハ重罪裁判所

重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第三十九條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一 同一ノ場合ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時

二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時

三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カル、爲メ他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條 數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一箇ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條 犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ

令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

第四十三條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルコト能ハス若クハ法律上逮捕スルコト許サ、ル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十四條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ在ラズ

第四十五條 外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

闕席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第四十六條 商船内ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條 豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラズ前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ闕席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラズ此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第四十八條 裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否ヲ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルコトヲ得

第二章 違警罪裁判所

第四十九條 治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

第五十條 違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ

第五十一條 違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フ

第五十二條 違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作り輕罪裁判所檢事ニ差出ス可シ

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十三條 違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

第三章 輕罪裁判所

第五十四條 始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス

又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス

第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿

十四年第五十六號布告(第一項)同第五十七號布告(同二項)參看
十四年第五十四號布告(木款八項)參看

一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルコトヲ得

第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ス

又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キコトヲ命スルヲ得

第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ

判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルコトヲ得

第五十八條 輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其指名シタル檢事補之ヲ行フ

第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法

警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

一 警視警部

二 區長郡長

三 治安判事

四 (警部ノ在ラサル地ノ) 區長

第十九類 第一章 治罪法

廿一年法律第七十四號(第五十七條)市制第七十四條(第九條)長町村長ニ於テ司法警察補トシテ職務ヲ行フ
地方法官ノ職務ヲ行フ
助官ノ職務ヲ行フ
地方警察ノ事務ヲ委任ス

十五年第二十三號布告(本
三號布告(本
六十四號)
十四年司法省
甲第五號布告
(同六十三項)
參看

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取
調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ證據其他事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑托ヲ受ク
ルコアル可シ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り控訴裁判所檢事長ニ
差出ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之
ヲ附記ス可シ

第四章 控訴裁判所

第六十三條 控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但
其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

第六十四條 刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命
ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

第六十五條 刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム
裁判所長ハ何時ニテモ裁判長ト爲ルヲ得

第六十六條 刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第六十七條 檢事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ屬スル司法警察及ヒ起
訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之ヲ行ハシムルヲ得

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察官ニ告達スルコアル可シ

檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス

第六十八條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可
シ

又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附
記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條 刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

第五章 重罪裁判所

第七十條 重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

第七十一條 重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク

若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢事長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得テ臨時開
應スルヲ得

第七十二條 重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第七十三條 重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

十五年第三十七
號(本款第十七
項)同第三十八
項(同十八號布
告)同第三十九
項(同十九號布
告)同第四十項
參看
十四年第四十
六號布告(本

款一(項)同第
五十五號(本
廿四項)參
看十六年第三
十號(本款十
三項)參看
十四年第四十
六號(本款十
六項)三項
參看

一 裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命ス

二 陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命シ
始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行
フ

始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢事長ヨリ始審裁判所檢事ヲシテ其職務ヲ行ハシムルヲ得

第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條 控訴裁判所檢事長ハ閉廳ノ後既決事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ
事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六章 大審院

第七十七條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

一 上告

二 再審ノ訴

三 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

四 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可カラス

第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス

十四年第五十
五號(本款十
四項)參看

判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ

第八十條 刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十一條 刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

第八十二條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可
シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七章 高等法院

第八十三條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス

十六年第四十
九號(本款十
五項)參看

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其裁判ス可キ事件及ヒ開
院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議官大審院判事中ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命
ス

二 豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ス

第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢事長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行

フ

第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スル

ヲ得

一 闕席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二 第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十條 被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルヲアル可

シ

第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪アルヲ認知

シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査シ第七條以下ノ規則ニ從ヒ起

訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第九十三條 何人ニ限ラズ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在

ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第七條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得其告訴

ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

第九十四條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キヲ申立ツ可シ

又告訴人ハ第七十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルヲ得

第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀

聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シ

タル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ

十四年司法省
丁第廿八號達
本款ニテ以令狀
様式ヲ定ム

事物ヲ添フ可シ

違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

第九十七條 何人ニ限ラス重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得

告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第九十八條 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在ラズ

無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其效アリトス

第九十九條 告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其中立ヲ變更スルコトヲ得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコトアル可シ

第二節 現行犯罪

第一百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第一百一條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時

二 兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帯シタル時

三家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戶

十四年第七十三號布告(本款六十七項)參看

十四年第四十六號布告(本款一項)參看

主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第一百二條 司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルコトヲ得

第一百三條 巡查被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第一百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ

第一百五條 何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第一百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルコトヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡查ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ
被告人又ハ巡查ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求ムルコトヲ得但逮捕ヲ爲シ